(2) 権現山遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の立地と環境 265
1．位置と地形 265
2．周辺の遺跡 265
Ⅱ．調査の経過 267
Ⅲ．調査の成果 267
Ⅳ．考　　察 272
Ⅴ．ま　と　め 273

調 査 要 項

遺　跡　名：権現山遺跡（宮城県遺跡地名表：権現山古墳群）

宮城県遺跡地名表登載番号：02007

遺跡所在地：宮城県白石市森合字権現山

発 掘 面 積：74 ㎡

調 査 期 間：昭和 46 年 11 月 25 日～12 月 10 日

調　査　員：宮城県教育庁文化財保護室

志間泰治・佐々木安彦

Ⅰ．遺跡の立地と環境

1. 位置と地形

権現山遺跡は、白石市森合権現山に所在し、東北本線白石駅より南西方約1.7㎞の地点に位置している。

県南地方、特に遺跡付近の地形をみてみると、西側に奥羽山地帯とそれに続く山麓帯、東側に阿武隈山地帯があり、その間に中部低地帯が拡がっている。

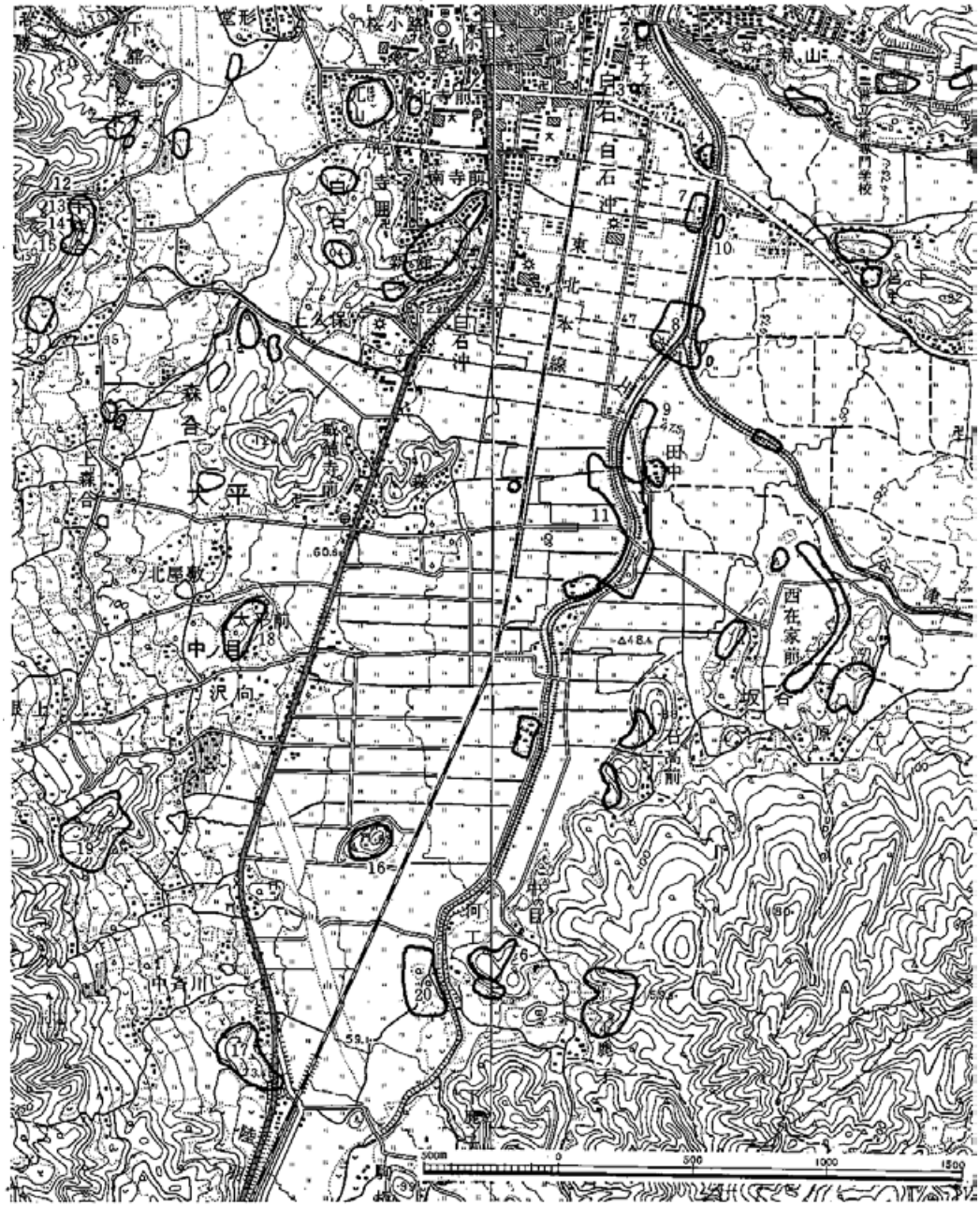
奥羽山地帯は、南北に延び、奥羽山地である二井宿山地と火山群のひとつである蔵王火山地から成っている。阿武隈山地帯は、福島県側から続き、丸森町付近は、最北端にあたり、さらに二つに枝分れする。東側の支脈は、亘理地塁山地で亘理海岸平野を東に望み、海岸線に沿って細長く北上し、北端は阿武隈川と接する。西側は、角田丘陵で、中央の低地帯に向かって北方に延びていき、白石川と接するようになる。中部低地帯には、阿武隈川やその支流である白石川が流れ、これらの河川によって埋積された盆地状低地が拡がっている。そのひとつである白石低地(盆地)は、南北約6.5㎞、東西約2.5㎞の範囲にわたり、白石川やその支流の小河川によって埋積された盆地状の低地である。

遺跡は、二井宿山地が南西に張り出し、次第に低くなって白石低地と接する丘陵上に立地している。この丘陵は、南北に延びる独立丘陵のような様相を呈しており、頂部は、標高約80mで平坦面になっており、そこから周辺に急な傾斜で下りていく。この平坦面の北端に近いやや東寄りのところに塚が存在している。

2. 周辺の遺跡

遺跡が所在している白石市内の丘陵や沖積低地には、多くの遺跡が分布しており、現在まで確認された遺跡は400を数える。

旧石器時代の遺跡として6遺跡が知られており、いずれも標高100m～200mの丘陵の山間部に立地している。次の縄文時代になると、遺跡の数は多くなり、特に白石市深谷地区に集中している。これらの遺跡は、蔵王山の東麓の丘陵地帯で、白石川の支流である児捨川や松川によって形成された河岸段丘に立地しているのが多い。弥生時代の遺跡として、白石市内で22遺跡と数は少なく、むしろ大部分は、蔵王町の藪川流域の沖積低地や白石市深谷地区から蔵王町へかけての丘陵地帯に立地している遺跡が多い。また、前の縄文時代に比して沖積低地への進出が目立ち梅田遺跡などでは、石包丁が出土しており、白石川や斎川流域などではすでに水稲農耕が開始されたと思われる。古墳時代には、古墳と集落跡が知られ、鷹巣古墳群、銚ケ盛古墳、亀田古墳群などの高塚古墳が知られ、また郡山横穴古墳群などのような横穴古墳も知られている。これらの古墳と関連する集落跡としては、あまり確認されておらず、亀田西遺跡、田中遺



（国土地理院発行3/2分54「白石南部」を複製）

No	遺跡名	種別	時代	地形図	No	遺跡名	種別	時代	地形図
1	権現山遺跡			02007	11	二天堂遺跡	包蔵地	奈良・平安	02136
2	鼠ヶ平横穴石室	横穴、墓	奈良・平安	02005	12	赤城石室	石室	古代・中世	02116
3	鼠ヶ平横穴墓	古墳	古墳	02008	13	男ノ塚遺跡	土塁	中世	02117
4	北無辺作遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	02009	14	神明塚遺跡	土塁	中世	02118
5	鼠無辺遺跡	古墳	古墳	02005	15	鷲山経塚	経塚	平安	02119
6	亀田古墳群	古墳	古墳	02006	16	殿防館跡	城館	中世	02131
7	白石外遺跡	包蔵地	奈良・平安	02132	17	地蔵館館跡	城館	中世	02172
8	谷津川遺跡	包蔵地	縄文・弥生・奈良・平安・中世	02135	18	泰義館跡	城館		02132
9	田中遺跡	包蔵地	縄文・古墳・奈良・平安・中世	02133	19	赤間館	城館	中世	02144
10	西田遺跡	包蔵地	弥生	02257	20	亀田西遺跡	包蔵地	古墳・奈良・平安	02179

第1図　周　辺　の　遺　跡

跡、北無双作遺跡、観音崎遺跡などが知られている。奈良、平安時代になると遺跡の数は多く、二丈橋遺跡、白石沖遺跡などが知られている。中世に入ると沖積低地の周辺の丘陵に館跡が分布している。本遺跡の付近にも飯詰館や地蔵院館、泰衡館、赤館などがあり、市街の東方約 4 ㎞の丘陵斜面には、常滑系の中世陶器を生産したと思われる東北古窯跡が所在しており、田中、谷津川遺跡などからも類似した中世陶器片が出土している。また、本遺跡の北西約 700mの鉢森山麓の一支脈丘陵の裾部（標高約 90m）には、馬ノ塚遺跡、赤城石塚墳、神明塚墳等の中世頃の所産と考えられる塚や石塚が共存している。しかし、この当時の村落の実態については不明な点が多い。

Ⅱ．調査の経過

発掘調査に先立ち、塚がある丘陵の $^{1}/_{500}$ の地形図を作成した。さらに塚の分布状況等を知るため $^{1}/_{50}$ の平面図を作成し、南側の塚から番号を付した。つまり、南端の塚が 1 号となり、北端の塚が 5 号となる。

調査は、塚の内部状況を調べるため、各塚にトレンチを設定した。その結果、各塚とも盛土は、1 層のみで、遺構は認められなかった。また、5 基の塚がある地点より南へ約 30m離れた所に井戸に利用されたと思われる溜池とその西側に土塁状の高まりがあるため溜池付近に東西 2m×12.5mのトレンチを設定したが、遺構は検出されなかった。

遺物として古銭（文字判読不明）1 枚が出土したのみである。

Ⅲ．調査の成果

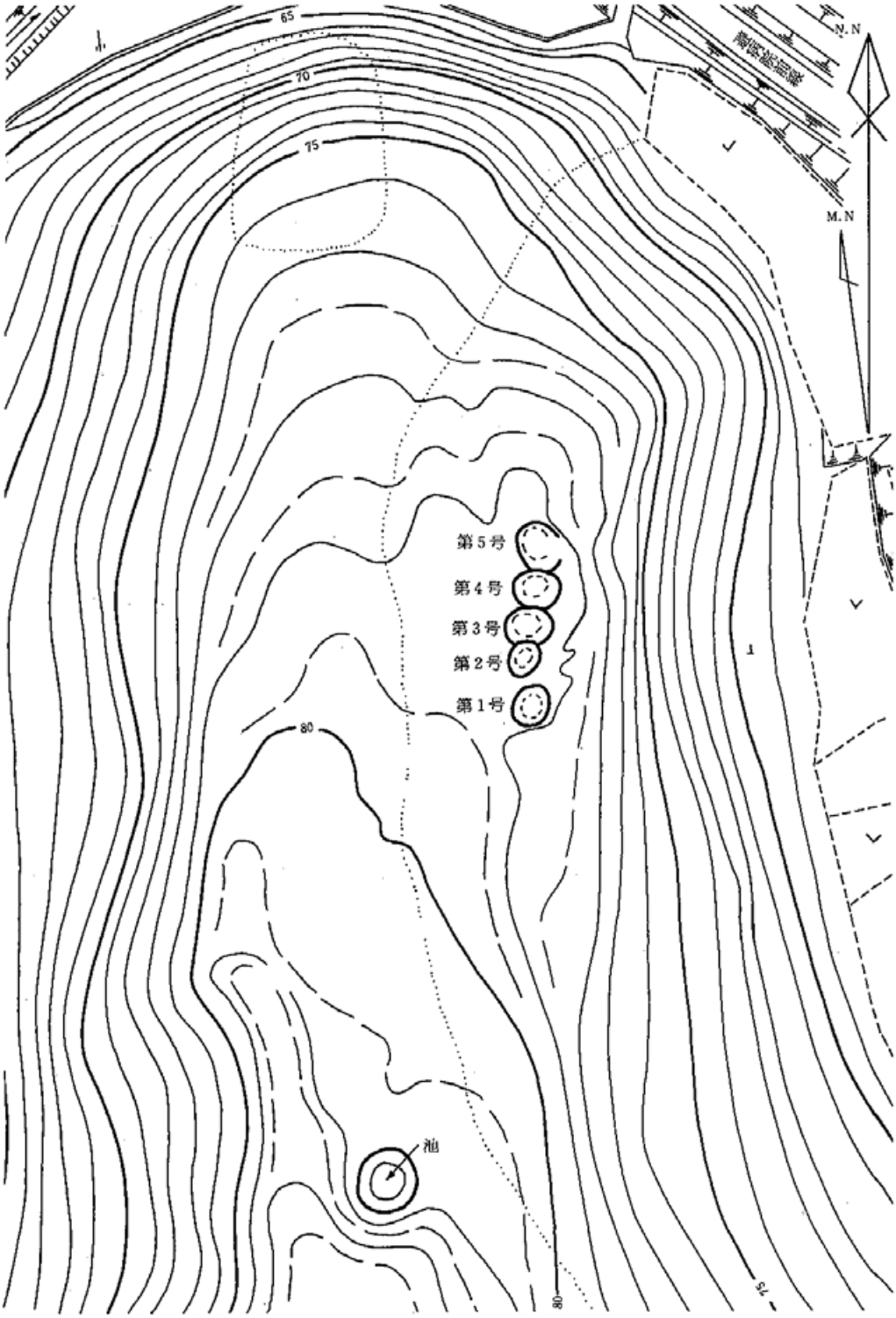
測量調査、実地踏査により 5 基の塚が確認された。各々にトレンチを設定し、塚の内部状況を調査した結果、いずれも塚の内部は、自然的な堆積土でなく、盛土されたものである。しかも、盛土は 1 層のみで地山を若干削り出してその上面から盛土されている。内部には、塚に伴う遺構は検出されず、また出土遺物もない。

以下、各塚の規模について記していく。

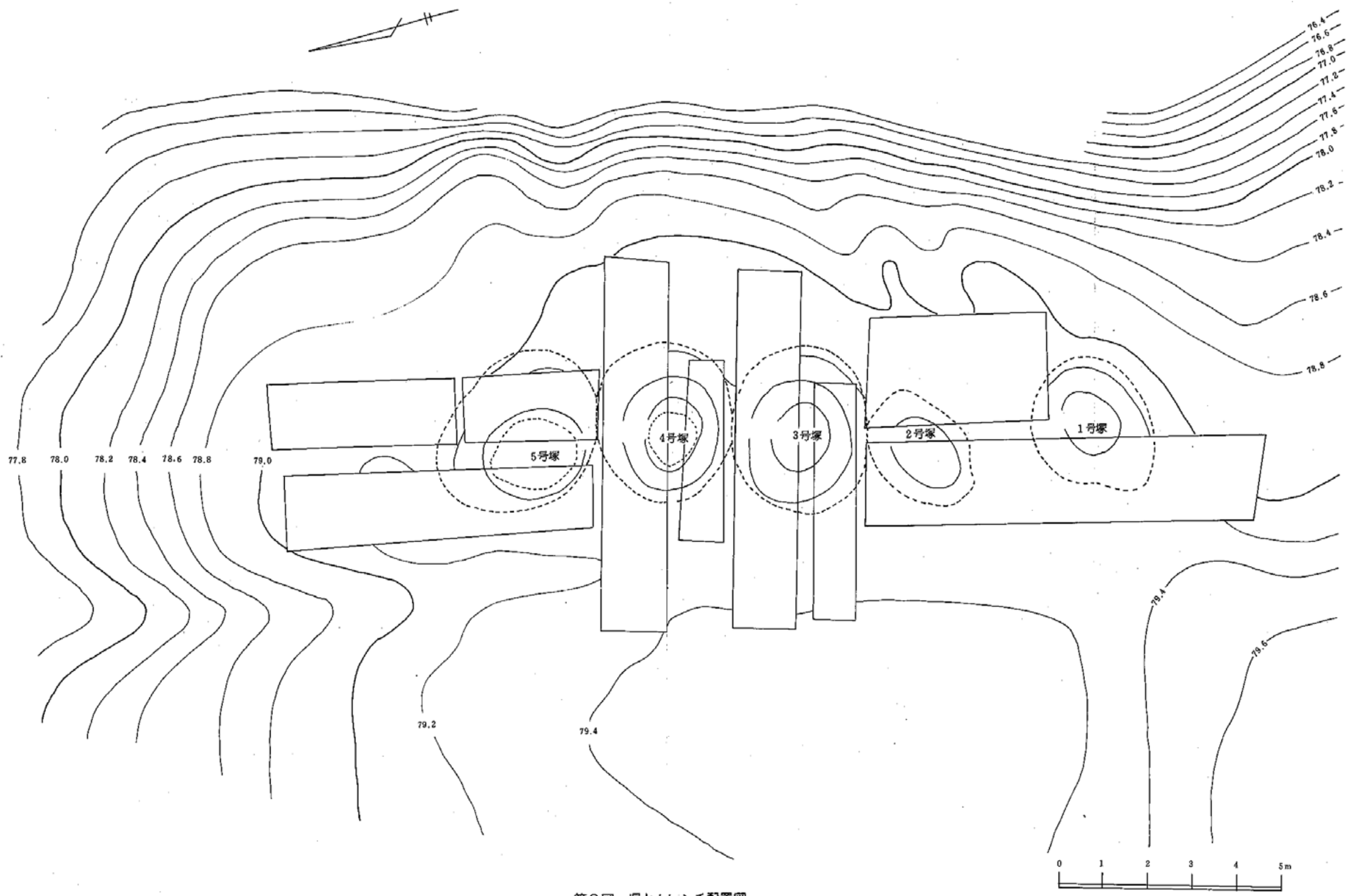
第１号塚

塚の麓で長軸約 2.9m、短軸 2.6mとほぼ円形を呈している。高さは、現地表面から約 65㎝ある。

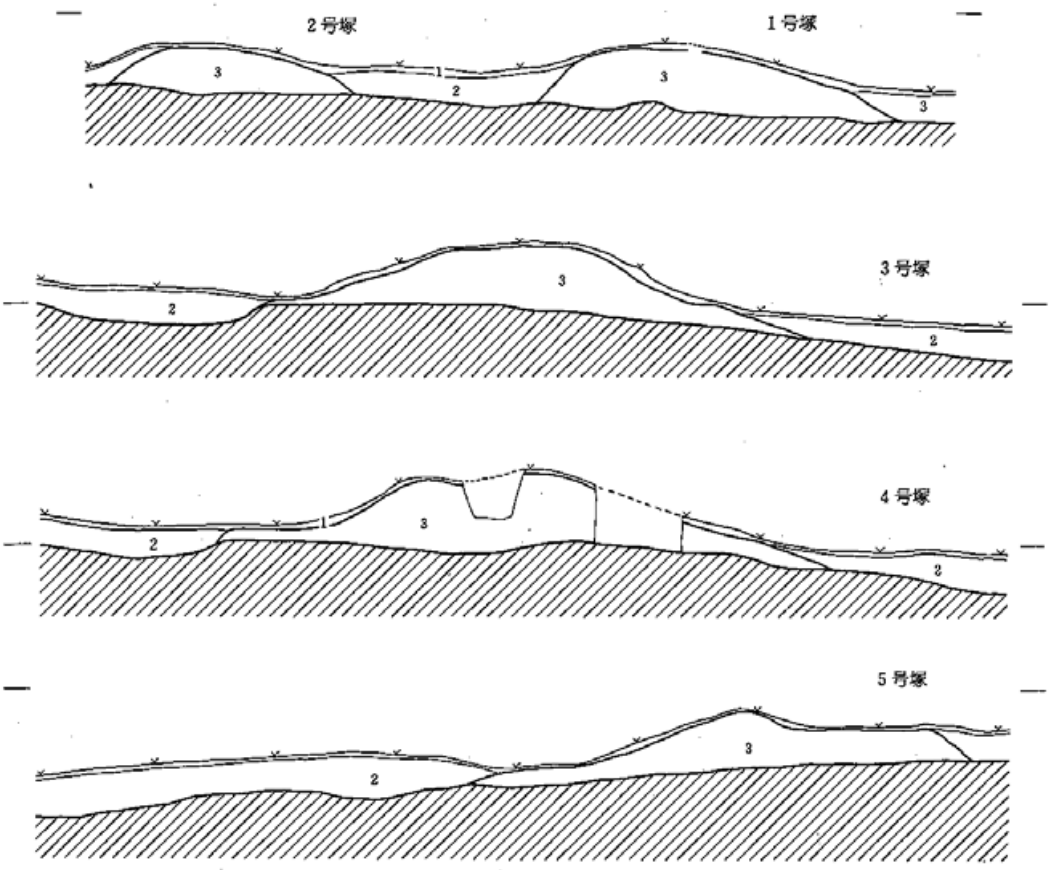
トレンチを入れた結果、積土は 1 層のみである。内部には遺構は検出されなかった。出土遺物もない。



第2図　周辺の地形と塚



第３図　塚とトレンチ配置図



層No.	土　色	土　性	備　　考
1	黒褐色	シルト	表土
3	黄褐色	シルト	堆積土、
2	黄褐色	シルト	塚の盛土、砂粒混入

0　2m

第４図　塚　断　面　図

第２号塚

塚の麓で長軸約2.8m、短軸約2.0mと楕円形を呈している。高さは、現地表面から約46㎝ある。

第３号塚

塚の麓で長軸約3.8m、短軸約3.0mと楕円形を呈している。高さは、現地表面から約62㎝ある。

第４号塚

塚の麓で長軸約3.6m、短軸約3.1mと楕円形を呈している。高さは現地表面から約70㎝ある。

第５号塚

塚の麓で長軸約４.１m、短軸約３.１mと楕円形を呈している。高さは、現地表面から約50㎝ある。

Ⅳ．考　　察

今回の調査で明らかにされたことを基に塚の性格等について若干考えてみたい。

塚は５基確認され、ほぼ南北(磁北に対して西へ７度偏っている)に一列に並んで位置している。塚と塚の間隔は、２号塚から５号塚までの４基は接している。１号塚は、若干離れており北へ約１mのところに位置している。

平面形は、１号塚がほぼ円形を呈している他は、楕円形を呈している。規模は約２～４m、高さは約46～70㎝で小規模のものである。盛土は、いずれの塚においても１層のみで、内部施設は存在しない。出土遺物もない。これら５基の塚は、配列、盛土の状況等から自然的なものでなく、人為的な所産と考えられる。また、内部状況等から、高塚古墳とは考えられない。県内に於いて、古墳とは考えられない塚の調査例として、角田市横倉大久保遺跡（宮教委：1977）、宮城町想海塚遺跡(宮城町委：1973)、日光山遺跡(宮教委：1973)、宮ノ脇遺跡(宮教委：1975)、古川市清水側遺跡１号塚(宮教委：1977)、金成町小迫字高見山七ツ森(十三塚)(金成町委：1973)等がある。

内部施設として土壙、ピットが存在しているのは、横倉大久保遺跡・日光山遺跡・宮ノ脇遺跡清水側１号塚である。日光山遺跡の重層方壇・円形周溝・葺石をもつ塚を除く、いずれの塚からも人骨が出土しており、墳墓と考えられている。その内、横倉大久保遺跡、日光山遺跡、清水側１号塚から出土の人骨は火葬骨であるとされている。

また、古銭が土壙内から出土している例として横倉大久保遺跡・日光山遺跡があり、想海塚遺跡からは封土中から出土している。このことから中世以降の所産と考えられている。これらの塚と本遺跡の塚とを比較してみると、本遺跡の場合、内部施設、出土遺物がなく、中世以降の墳墓と考えるには困難を要する。

栗原郡金成町小迫字高見山七ツ森(十三塚)は、丘陵の稜線上に 13 基の塚がほぼ南北に一列に並んで位置している。平面形では、円形と方形を呈している。調査は、3 基の塚について実施され、いずれの塚も封土は１層のみで円部施設はなく、基底部より炭屑が検出され築壇に先立って焚火による何等かの宗教的儀礼が行なわれたと考えられ、さらに、13 基の塚が、かって村境にあたり旧街道沿いの丘陵上に立地していることから、十三塚と断定している(三崎:1973)。

十三塚については、柳田国男(柳田：1969)、堀一郎(堀：1972)、三崎一夫(三崎：1966・1970)

らの研究があり、十三塚とは、多く村境などの丘陵上や街道に沿って並んで存在している小規模な塚のことをいい、その分布は全国的に見られ、特に関東・東北地方に多く存在しており、東北地方では宮城県と岩手県南部はひとつの密集地帯とされている（三崎：1966）。宮城県内に於いては18カ所確認されており、その内、栗原郡金成町では4カ所確認されている。塚の配列・形態について現在8つに分類されており、その中で、十三の円形列塚と中央の一塚がとくに大きいものが圧倒的に多い（堀：1972）。

本遺跡が所在している白石市斎川付近にも十三塚が存在したと言われているが、未確認であり（三崎：1965）、本遺跡がそうであるという確証もない。塚の築造目的については、種々の学説や伝説があり、一定しない。特に十三という数については、貝原益軒の十三仏説、柳田国男の聖天と十二天壇、堀一郎の四臂不動明と十二天壇、梅尾祥雲の十三地仏説がある（堀：1972）。とにかく、中世の一時期に流行した民間信仰上の遺構とされている。

本遺跡の塚の場合は、5 基確認されたのみで他に存在したかどうかは不明である。また、丘陵上の平坦な地に一列に並び立地している。この丘陵の東側には、現在、国道四号線が通っているが、かっての街道筋にあたる（宮教委：1978）。

以上のことから、本遺跡の塚は、十三塚の可能性がある。しかし、十三塚については、未だ不明な点が多く 13 基の塚ではないため、断定はできない。

また、本遺跡の周辺をみてみると、本遺跡の北西約 700mの丘陵上には、馬ノ塚遺跡、赤城石塚墳、神明塚墳、鷲山経塚等の塚や石塚、経塚が存在している。これらは、中世頃の所産と考えられており、本遺跡を含めた周辺の丘陵には、宗教的な遺構が存在していた可能性があり、本遺跡の塚もそういった遺構のひとつと思われる。

V．ま　と　め

1. 権現山遺跡は、独立丘陵の頂部、平坦地に立地している。
2. 遺跡は、従平高塚古墳とされていたが、今回の調査により、内部施設等がなく、古墳、またはそれ以降の墳墓でないことが明らかになった。
3. 塚の立地、配列等により十三塚に類似した何らかの遺構の可能性がある。

〈引用・参考文献〉

宮城県教育委員会：「日光山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集・1973
宮城町教育委員会：「宮城町想海塚発掘報告」『宮城町文化財調査報告書』第1集・1973
三崎　一夫　　：「小迫字高見山七ツ森(十三塚)発掘調査報告」『金成町史』・1973
宮城県教育委員会：「宮ノ脇遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第40集・1975
宮城県教育委員会：「横倉大久保遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第48集・1977
宮城県教育委員会：「清水側遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第50集・1977
興野義一・遠藤智一：「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』下巻・1970
柳田　国男　　：「十三塚」「石神問答」「十三塚の分布及基伝説」『定本柳田国男集』第12巻・1969
三崎　一夫　　：「東北における十三塚の分布」『東北民俗』第1輯・1966
三崎　一夫　　：「岩手県の十三塚」　北上市史第2巻・1970
堀　　一郎　　：「十三塚」『神道考古学講座』第5巻・1972
宮城県教育委員会：「歴史の道調査結果略報」『宮城県文化財調査報告書』第55集・1978
白石市　　：「白石市史」　別巻・1976

写　真　図　版

遺跡遠景
（左から）

発掘前の状況

地下の断面

図版 1

(3) 塩沢北遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 281
1. 遺跡の位置と自然環境 281
2. 周辺の遺跡 281
Ⅱ　調査の方法および経過 284
Ⅲ　発見された遺構と遺物 286
1. 竪穴住居跡とその出土遺物 287
2. 溝とその出土遺物 305
3. 溝状落ち込みとその出土遺物 308
4. 石組炉 310
5. 墓壙とその出土遺物 310
6. 表土および出土地点不明の遺物 310
Ⅳ. 遺構と遺物に関する考察と問題点 315
1．遺物 315
(1)　出土土器の分類 315
(2)　出土土器の組み合せとその年代 321
(3)　出土土器に関する問題点 323
(4)　土器以外の遺物について 328
2. 遺構 329
(1)　竪穴住居跡の形態・構造とその年代 329
(2)　溝の性格と年代 330
(3)　溝状落ち込みとその年代 331
(4)　石組炉とその年代 331
(5)　墓壙とその年代 331
3. 遺跡の構成と今後の問題点 331
Ⅴ. ま　と　め 332

調 査 要 項

遺　跡　名：塩沢北遺跡

遺 跡 記 号：ＳＺ（遺跡地名表登載番号：05038）

遺跡所在地：宮城県刈田郡蔵王町円田字塩沢北

調査対象面積：約2,500㎡（発掘面積738㎡）

調 査 期 間：昭和45年9月15日～10月9日

調　査　員：宮城県教育庁社会教育課

志間泰治・藤沼邦彦・白鳥良一

調査協力者：西脇俊郎（東北大学考古学研究室）

佐藤庄一（東北大学考古学研究室）

高野芳宏（東北大学考古学研究室）

鈴木　清（東北学院大学学生）

土岐山武（宮城教育大学考古学研究会）

太田昭夫（宮城教育大学考古学研究会）

阿部　恵（立正大学学生）

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と自然環境

塩沢北遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町円田字塩沢北に所在し、蔵王町役場より南東方向約 800mの円田中学校南東側の地点に位置している。

本遺跡の所在する蔵王町は、宮城県の南西部、刈田郡の北東部にあたり、蔵王山の東麓に位置して、東西に長い地域を有している。

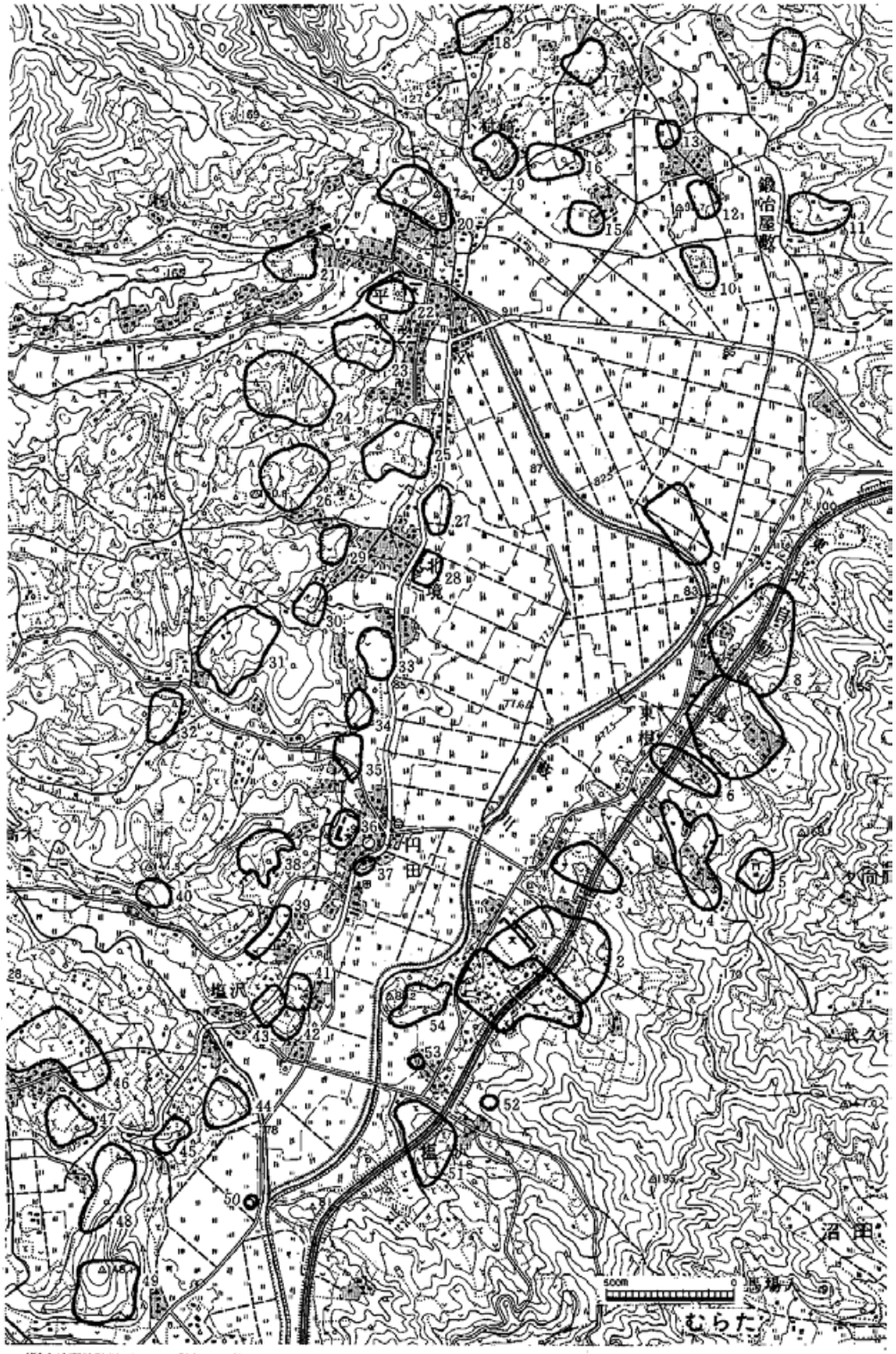
町内の地形を鳥瞰すると、町の大部分は蔵王火山地の東麓にのびて広がる高館丘陵によって占められ、この丘陵の一部は同町の東端で南方に張り出し、通称愛宕山丘陵と呼ばれ、村田町との境を画している。この高館丘陵は、白石川の支流である松川および藪川によって開析され、その流域には、両河川によって、中、下位の河岸段丘や扇状地、沖積地が形成されており、白石低地の北東部を構成している。その内、町役場のある円田地区は、北・西・東を丘陵によって挾まれて盆地状を呈し、円田盆地と呼称されている。この円田盆地の北・西縁には、藪川によって形成された中・下位の河岸段丘が発達し、盆地中央部には氾濫原が広がっている。一方、盆地東縁の愛宕山丘陵麓には段丘の発達が認められず、藪川の東西において、非対称的景観を呈している。

本遺跡は、この盆地東縁を成す愛宕山丘陵の一部が西に突き出た舌状台地上に立地している。遺跡の範囲は、約 35×100mであり、台地頂上平坦部から南斜面にかけて遺物の散布が密である。台地の標高は95～100mで、盆地床現水田面との比高は約20mである。遺跡周辺は、その表層土壌が黒ボク土壌であるため、現在、多くが果樹園として利用されている。

2. 周辺の遺跡

本遺跡の所在する蔵王町には、現在163ヶ所の遺跡が確認されており（県教委：1979）、旧石器時代から中・近世に至るまでの、連綿とした人々の生活の痕跡が数多く残されている。これらの遺跡の多くは、高館丘陵の東麓や松川・藪川により形成された河岸段丘上、および、愛宕山丘陵の西縁に立地しており、稀に、沖積地にも認められる。

本遺跡の立地する円田盆地周縁地域の遺跡をみると、旧石器時代の遺跡は、現在のところ、認められておらず、縄文時代の遺跡は、高館丘陵の東麓に立地しているものが多く、盆地周縁には、あまり認められていない。しかし、弥生時代になると、その遺跡数は急増している。遺跡としては、「円田式」（伊東：1960）の標式遺跡である西裏遺跡を始めとして、下永野遺跡、上野遺跡、大山遺跡、天王遺跡、大橋遺跡など、弥生時代中期後葉の円田式土器を出土する遺跡が多く、白石低地においては、最も、弥生時代の遺跡の多い地域である。さらに、大橋遺跡や赤鬼上遺跡などからは、弥生時代後期に比定されている天王山式土器が出土している。古墳時代の



（国土地理院発行1/25,000「村田」を複製）

第１図　周辺の遺跡

遺跡には、宮城県内で初めて古墳時代前期に属する住居跡の発見された大橋遺跡(藤沢：1971)や棒状浮文の土師器を出土した伊原沢下遺跡(白石市：1976)などの、古墳時代前半に属する遺跡がほとんどで、本遺跡と同時期頃（古墳時代後期）の遺跡は数少ない。また、本地域の南辺部には、八幡山古墳(円・方墳)、宋膳堂古墳(円筒埴輪一方墳)、天王古墳(円筒埴輪一円墳)、中屋敷遺跡（円墳）などの高塚古墳が発見されており、群集墳や横穴古墳が認められていないものの、白石低地における古墳の分布上、貴重な地域である。次の、奈良・平安時代の遺跡は、前時代に比べて、爆発的に増加しており、前時代までの遺跡の少ない盆地北辺部や沖積地にまで、その存在が認められる。沖積地に立地している都遺跡（白石市：1976）からは、布目瓦が出土しており注目される。中世に属する遺跡と考えられているものには、平沢館、花楯館などの館跡の存在が確認されており、これらの多くは、盆地北縁部の、盆地全域を眺望できるような要衝の地に立地している。

以上のように、本遺跡の立地する円田盆地周縁地域には、弥生時代以降の遺跡が多いことがわかる。このことは、弥生時代以降の人々の生業である水稲農耕のための可耕地として、藪川の氾濫原からなる円田盆地が最適の場所であったことを物語るものであり、弥生時代以降、漸次的にであれ、安定した生産力の発展が約束された地域であると言える。換言すれば、本遺跡

第1表　遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号	番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号
1	塩沢北遺跡	集落跡	弥生・古墳・平安・近世	05038	28	中組遺跡	包含地	奈良・平安	05092
2	伊原沢下遺跡	包含地	古墳	05041	29	北境遺跡	包含地	弥生・奈良・平安	05094
3	中沢遺跡	包含地	弥生・古代	05045	30	沢遺跡	包含地	奈良・平安	05090
4	立目場遺跡	包含地	弥生・古代	05013	31	花楯館跡	城館	中世	05037
5	愛宕山遺跡	包含地	弥生	05012	32	鳥山遺跡	包含地	縄文・奈良・平安	05089
6	尾木戸遺跡	包含地	弥生・古墳	05043	33	本宿前遺跡	包含地	奈良・平安	05091
7	大橋遺跡	集落跡	弥生・古墳	05044	34	白山遺跡	包含地	奈良・平安	05087
8	赤鬼上遺跡	集落跡	弥生・平安	05042	35	清水遺跡	包含地	弥生・奈良・平安	05086
9	都遺跡	包含地	弥生・古墳・奈良・平安	05015	36	寺坂遺跡	包含地	奈良・平安	05085
10	六角下遺跡	包含地	弥生・奈良・平安	05112	37	堀ノ内遺跡	包含地	縄文・弥生・奈良・平安	05084
11	上葉ノ木沢遺跡	包含地	奈良・平安	05143	38	八幡山古墳	円墳・方墳	古墳	05036
12	六角上遺跡	包含地	奈良・平安	05113	39	土ヶ市遺跡	包含地	弥生・奈良・平安	05082
13	原遺跡	包含地	奈良・平安	05111	40	見継遺跡	包含地	古墳	05083
14	清上遺跡	包含地	奈良・平安	05142	41	宋膳堂遺跡	包含地	弥生・奈良・平安	05008
15	西小屋館跡	城館	中世	05048	42	宋膳堂古墳	方墳	古墳	05034
16	十郎田遺跡	包含地	奈良・平安	05105	43	戸の内遺跡	包含地	奈良・平安	05077
17	後原遺跡	包含地	奈良・平安	05110	44	天王古墳	円墳	古墳	05032
18	大久保遺跡	包含地	奈良・平安	05107	45	蟹沢遺跡	包含地	弥生	05060
19	熊野社前遺跡	包含地	奈良・平安	05108	46	上野遺跡	包含地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	05016
20	平沢館跡	城館	中世	05050	47	天王遺跡	包含地	弥生・奈良・平安	05007
21	丈六遺跡	包含地	奈良・平安	05103	48	下永野遺跡	包含地	弥生	05011
22	平沢遺跡	包含地	奈良・平安	05104	49	矢付館跡	城館	中世	05053
23	諏訪館前遺跡	包含地	弥生・古墳・奈良・平安	05014	50	鉾付神社古墳	円墳	古墳	05033
24	諏訪館跡	城館	中世	05124	51	大山遺跡	包含地	縄文・弥生・古墳	05040
25	小高遺跡	包含地	奈良・平安	05100	52	中屋敷古墳	円墳	古墳	05035
26	大垣内遺跡	包含地	弥生	05101	53	西脇古墳	円墳	古墳	05141
27	堂の入遺跡	包含地	弥生	05106	54	台遺跡	包含地	古墳・奈良・平安	05009

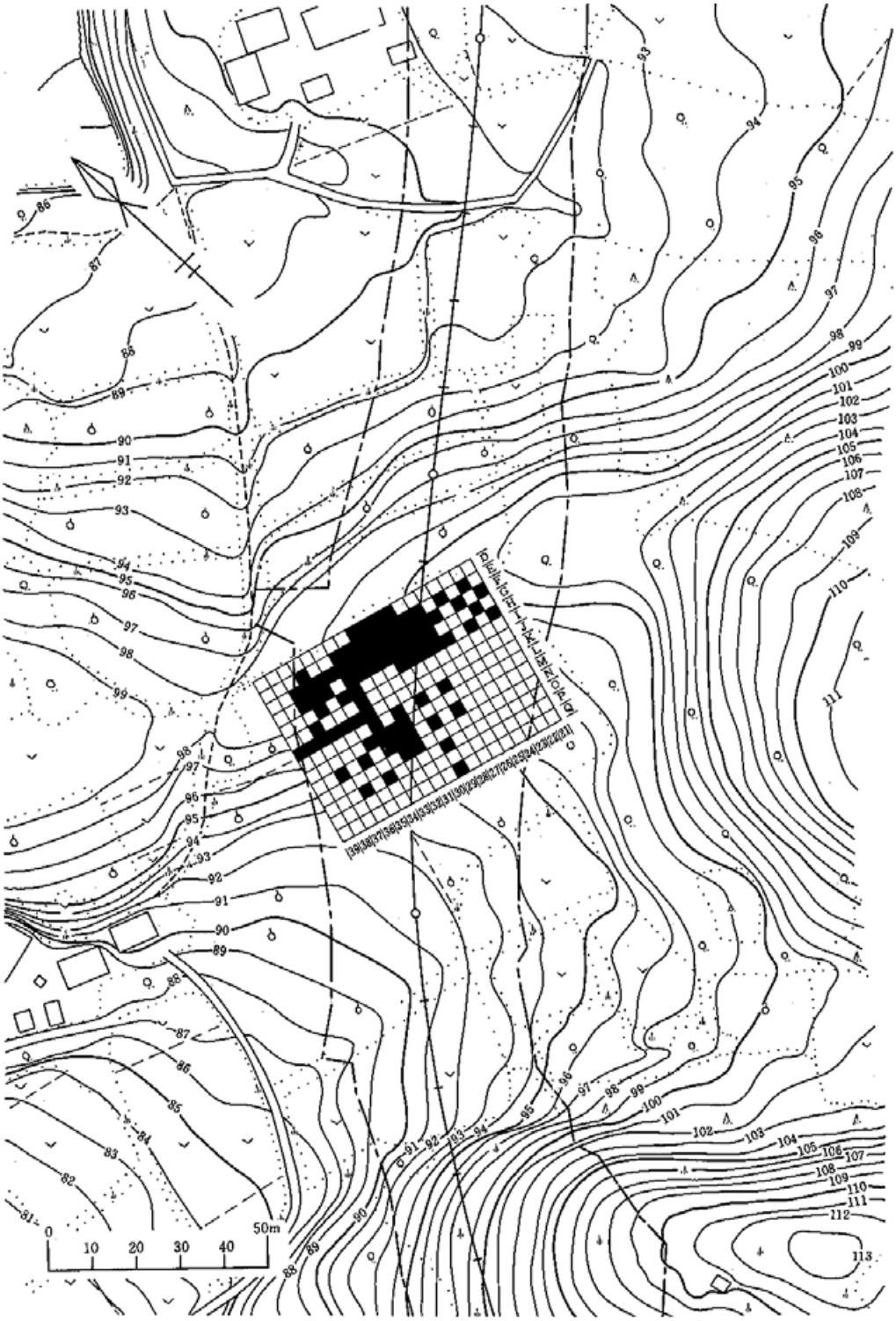
の立地する周辺の遺跡の歴史的変遷は、水稲農耕を基礎とした、土地と人との関係、そして、この生活する人と人との関係の中で、この円田盆地を開墾してきた人々の歴史に他ならなく、本遺跡の歴史的意義も、この歴史的過程の中に位置付けられるべきものである。

Ⅱ　調査の方法および経過

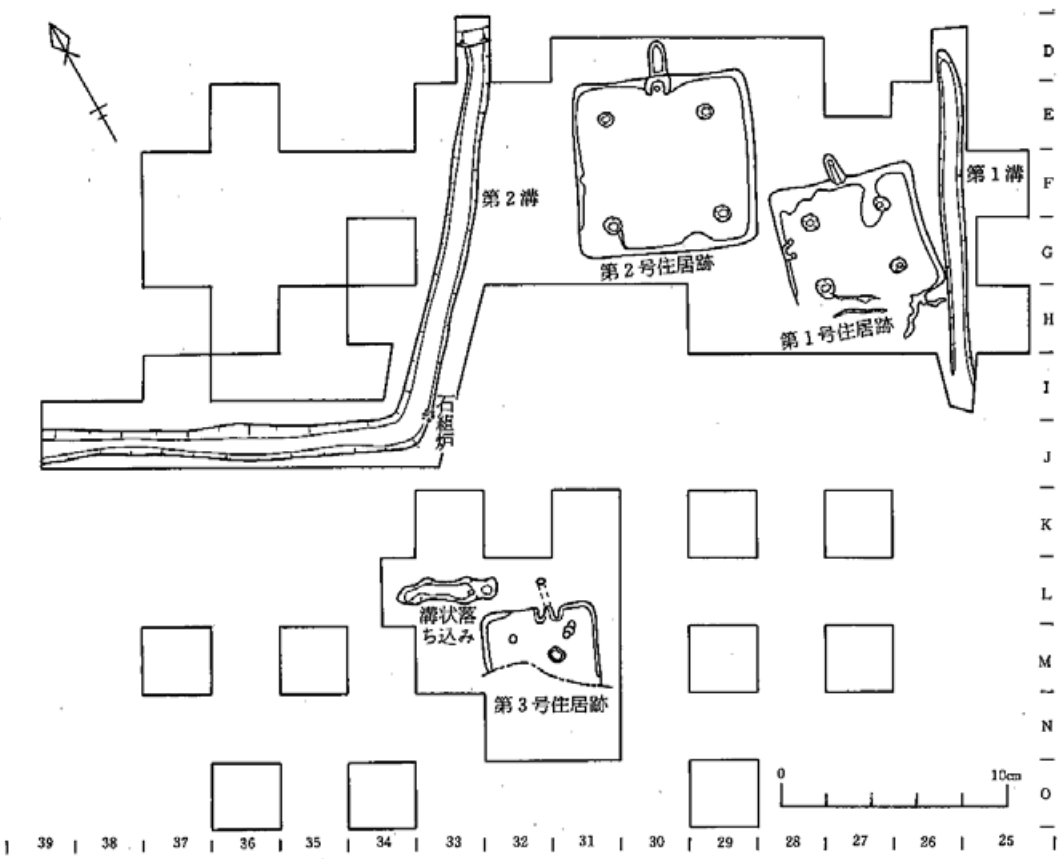
本遺跡の範囲の内、自動車道路敷地にかかる調査対象地区(約2,500㎡)では、土師器の細片が数片表採できるにすぎなかった。しかし、集落の立地条件に適すると考えられたので、台地の平坦部と南斜面に、道路敷中心杭ＳＴA76＋60 を原点として、地形の状況にあわせて東西、南北の基準線を設定し、東西57m、南北42mの範囲に3m単位のグリッドを組んだ。グリッドの名称は、3m単位に東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベットで示した。

調査は、昭和45年9月15日に開始した。台地平坦部の東側から始まり、市松状に西側へと調査を進めた。その結果、台地平坦部で、カマドのついた竪穴住居跡2軒と溝2本および石組炉を検出した。その内、Ｌ字状を呈した西側の溝は、方形周溝墓を想定させるものであったため、溝で囲まれた内側の部分にも、主体部を検出する目的で調査区を設定した。しかし、主体部と考えられる施設等は検出されなかった。調査はさらに、台地南斜面へと進み、ここで、カマドのついた竪穴住居跡1軒と溝状落ち込み1基、墓壙1基を検出した。調査区の基本層序は、表土の直下に地山であり、表土は台地平坦部では浅く約20㎝前後であるが、斜面を下るにつれて厚くなっている。遺構の確認面は全て地山面であり、比較的検出が容易であった。発掘調査面積は738㎡である。10月9日、調査を終了した。

遺構の平面図は、平板測量によって作成した。断面図は必要に応じて作成した。さらに、遺構、遺物の出土状況等の写真撮影も併行して行なった。



第２図　グリッド配図



第３図　遺構配置図

Ⅲ　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡３軒、溝２本、溝状落ち込み１基、石組炉１基墓壙１基である。遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、手捏ね土器、石製模造品砥石、鉄製刀子、古銭等がある。ここでは、これらの発見された遺構とその出土遺物について記載してゆく。なお、出土遺物は、実測可能なものは洩れなく集録して図示してあるが、その他の破片類は、器形、部位、器面調整などによって分類して、末尾に、破片集計表として一括した。

1. 竪穴住居跡とその出土遺物

第１号住居跡

〔確認面〕　地山面で確認された。

〔平面形・規模〕　南辺が削平されているが、平面形は方形で、規模は北辺 6.5m、東辺残存長 5.7mである。残存住居内面積は約 35 ㎡である。

〔堆積土〕　4 層に大別できる。第 1 層は北東方向からの流入による堆積土で、住居東半部に堆積している。第 2 層は北西方向からの流入による堆積土で、住居北半部に床面まで厚く堆積している。第 3 層は西方からの流入による堆積土で、住居西半部に堆積している。第 4 層は住居壁崩壊土を含み壁際に堆積している。堆積層の形態は将棋倒し状を呈している。

〔壁〕　地山を壁としており、残存壁高は北壁で 50～60㎝ である。壁はやや外傾気味に立ち上がる。

〔床面〕　地山を床としている。黒色土が混っているが堅くしまっている。

〔柱穴〕　床面上でピットが 6 個検出された。その内、配置の規則性、柱痕跡の有無、深さから、対角線上の位置にあるピット 1・2・3・4 が柱穴と考えられる。

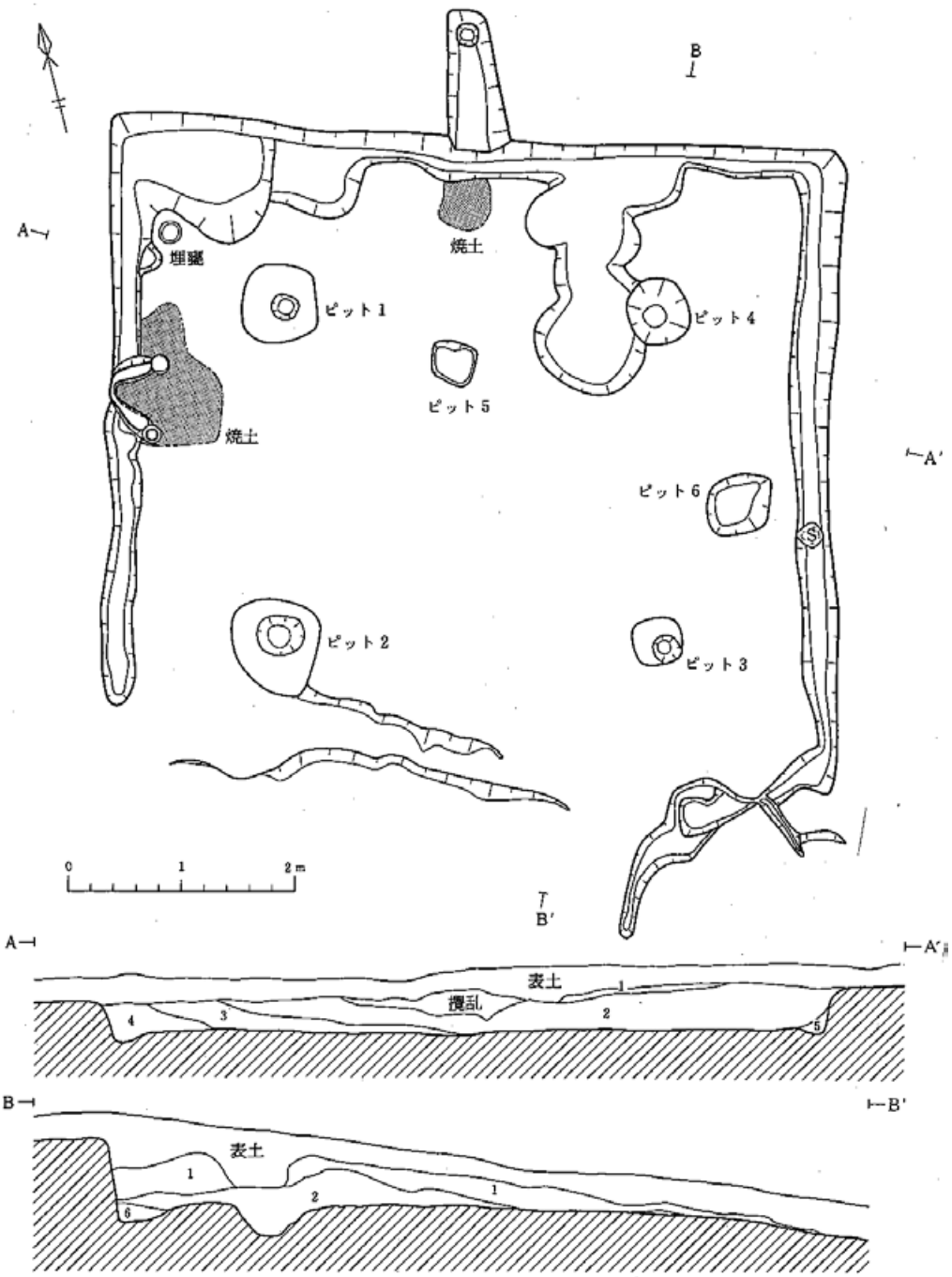
〔周溝〕　削平された南辺を除いて認められた。住居壁に沿って巡り、底面幅約 6～15 ㎝、床面からの深さ約 5～10 ㎝である。ただし、北西隅においては、底面幅が約 46～64 ㎝と幅広く、また、北東の一部は住居内側にまで張り出してピット状を呈し、焼土が多量に混入している。

〔カマド〕　北辺と西辺に 2 基検出された。

第 1 カマドー北辺の中央部において、煙道部、燃焼部が認められた。煙道部は住居外にのびており、底面はほぼ水平で、底面幅が約 15～30㎝、煙出し部までの長さが約 110 ㎝である。先端には径約 20 ㎝のピットが掘り込まれており、煙道部底面より約 6 ㎝深くなっている。燃焼部には側壁がなく、焼面のみが認められた。焼面の範囲は径約 40㎝ である。さらに、この焼面は周溝によって切られていた。

第 2 カマドー西辺の中央部やや北寄りに位置し、燃焼部のみが認められた。燃焼部側壁は、「ハ」の字状を呈し、粘土によって構築されたものである。両側壁の先端部には補強のための土師器甕が倒立して設置されている。燃焼部底面およびその周囲には、95×125㎝ の範囲で焼土が分布している。燃焼部最大幅は先端部で約 50 ㎝、奥行は約 40 ㎝である。また、この燃焼部側壁の下に周溝が認められた。

第 1 カマドと第 2 カマドの関係については、第 1 カマドは燃焼部側壁が残存せず、また、燃焼部底面が周溝によって切られているが、一方、第 2 カマドは燃焼部側壁の下に周溝が認められることから、第 1 カマドから第 2 カマドへとカマドのつくり替えが行なわれたものと考えられる。



第1号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6
深さ(cm)	72	41	67	73	16	18

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	黒褐色	シルト	地山粒混入
第2層	2	黒褐色	シルト	地山粒混入
第3層	3	黒色	シルト	
第4層	4	黒褐色	シルト	地山粒混入
	5	黒色	シルト	
	6	黄褐色	シルト	地山ブロック混入

第4図　第1号住居跡

〔その他の施設〕　第２カマドの北側に土師器甕が１点埋設してあるものが検出された。

〔出土遺物〕　出土遺物には、土師器、須恵器、赤焼土器、砥石がある。本住居跡に伴うと考えられる遺物には、カマド側壁に使用していた土器、および、カマド内、柱穴内、床面出土の遺物がある。床面出土土器の多くは、カマド周辺からの出土である。

○住居に伴う遺物

土師器

坏　いずれも製作に際してロクロを使用せず、底部形態が丸底のものである。全て、体部外面に段を有し、その内面に対応する段のあるもの（第５図1～4）である。

段の位置は、ほぼ体部中央にあるもの（第５図3）と体部下半にあるもの（第５図1・2・4）とがあり、段から上の部分は、全て、口縁部に向かって外傾するもので、内弯気味に立ち上がるもの（第５図2・4）もある。これらの土器の器面調整を観察すると、いずれも体部外面は段を境として、上部に横ナデ、下部にヘラケズリが施されており、体部内面には、ヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕　いずれも製作に際してロクロを使用せず、口径が器高より小さいものである。これらは、さらに、最大径の位置が口縁部にあるもの（第５図5・7）と体部にあるもの（第５図6、第６図1～3）との二者があり、（第６図3）が球形を呈する以外、全て、長胴形のものである。

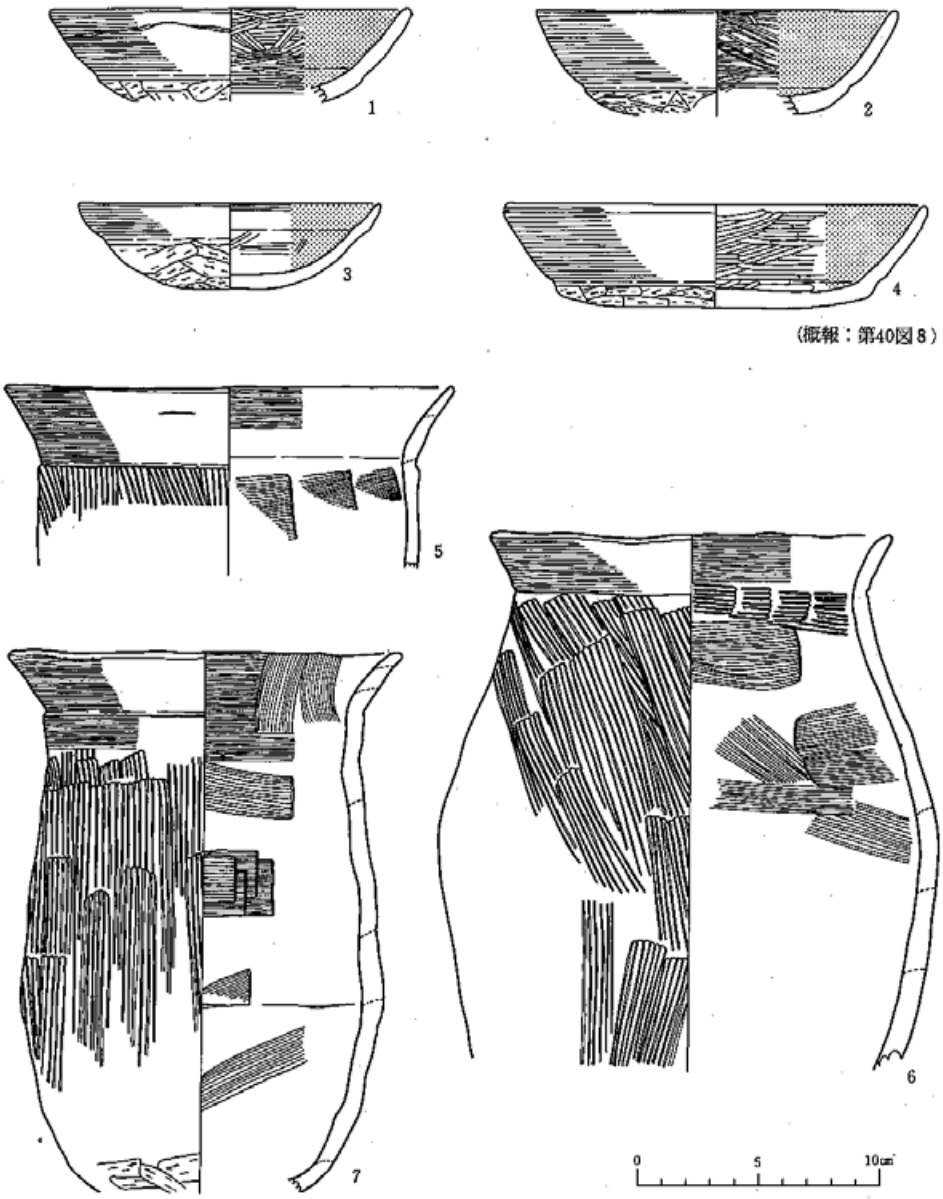
頚部には、いずれも口縁部と体部とを区画する段を有しており、口縁部は外傾するものである。器面調整をみると、口縁部は、全て内外面とも横ナデであるが、（第６図2）のように横ナデ調整前の刷毛目が観察されるものもある。体部は、外面に縦方向の刷毛目が上方より下方へと施され、内面には横方向のヘラナデを施している。一部、体部下端にヘラケズリを施しているものも認められる（第５図7）。

底部形態をみると、平底のもの（第６図4～7、第７図1～3）と丸底のもの（第７図4）とがある。平底のものには、全て、底部底面に木葉痕が認められ、丸底のものにはヘラケズリが施されている。広縁の形態には、強く張り出すもの（第６図4・5）、軽く張り出すもの（第６図6・7）、直線的角がつくもの（第７図1・2）、丸味をもつもの（第７図3・4）とがある。これらの内で、広縁に張り出しの認められないものの多くは、体部下端にヘラケズリが施されている。

須恵器

坏　２点出土している。両方とも体部下半に段を有するものである。

（第７図5）は、底部が平底で、底部からやや丸味を帯びて段に至り、段から上は、ほぼ直線的に垂直に立ち上がっている。段の下には、回転ヘラケズリが上方から下方へと順次施されている。再調整のため、底部の切り離し技法は不明である。

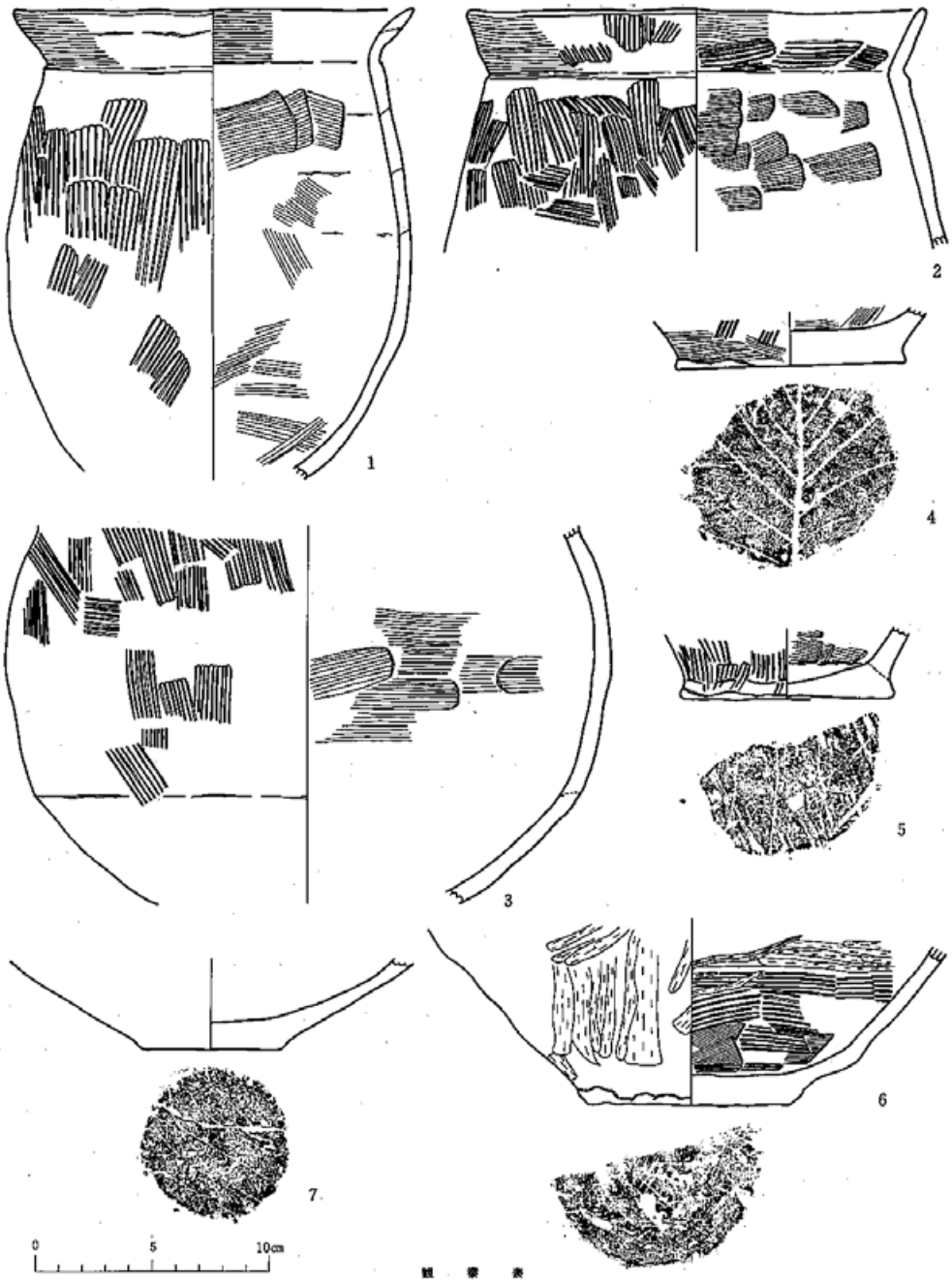


（概報：第40図８）

観　察　表

番号	出土層位	種別	器面 外面	器面 内面	底部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床面	土師器(坏)	横ナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	(3.9)	14.8			B I
2	〃	〃	〃	〃	〃	(4.3)	14.8			〃
3	カマド	〃	〃	〃	〃	3.6	12.4			〃
4	〃	〃	〃	〃	〃	4.3	17.3			〃
5	床面	土師器(甕)	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラナデ		(7.4)	18.4			A 1
6	〃	〃	〃	横ナデ・刷毛目・ヘラナデ		(22)	16.6	20.5		B I
7	カマド側壁	〃	横ナデ・刷毛目・ヘラケズリ	横ナデ・ヘラナデ		(22.3)	16.2	14.9		A 1

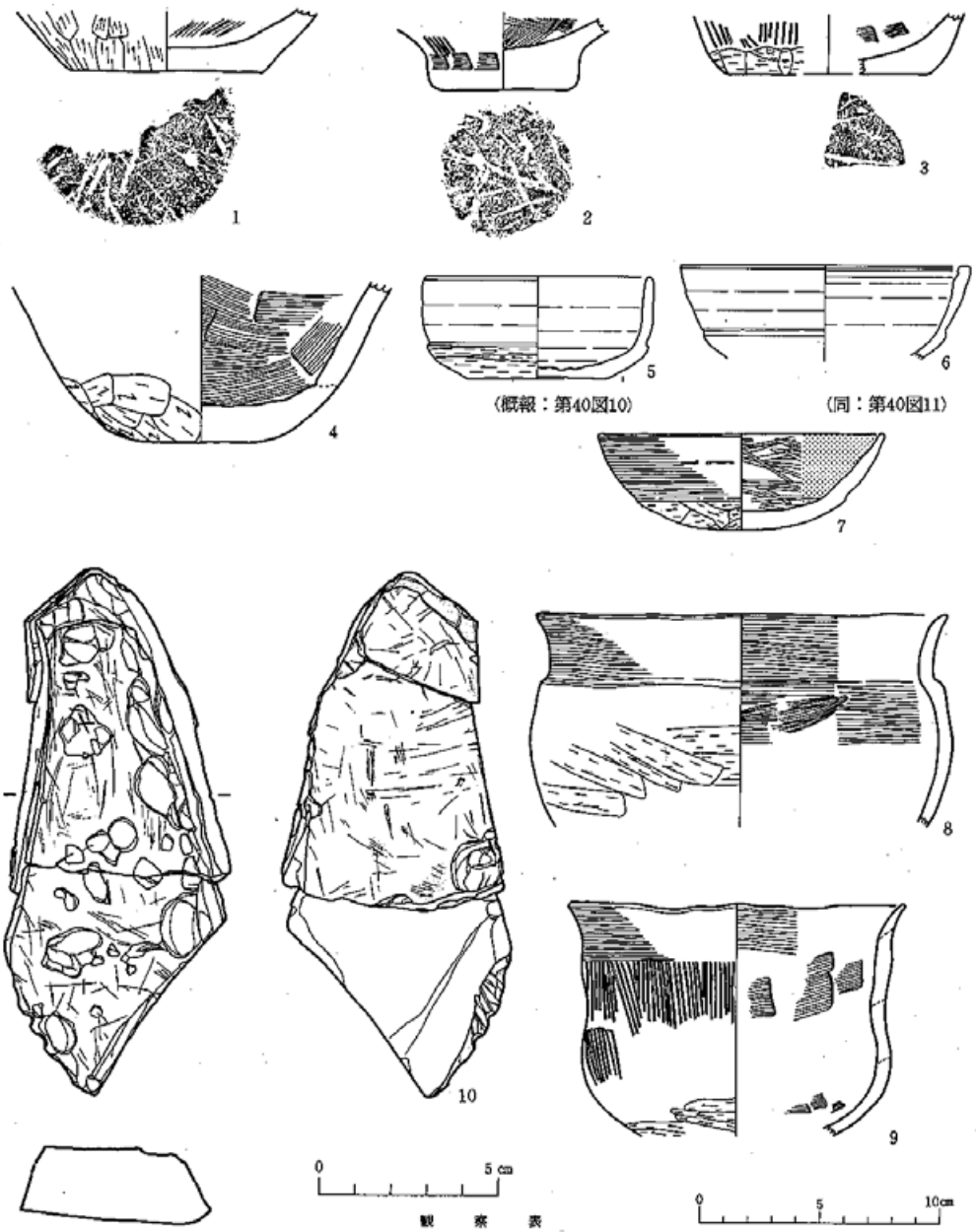
第５図　第１号住居跡・出土遺物　(1)



観　察　表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	口縁	口径	体径	底径	分類番号
1	カマド周辺	土師器(鍋)	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラナデ		(20)	16.9	17		B I
2	床面(埋設)	〃	〃	横ナデ・刷毛目・ヘラナデ		(10)	19.4			〃
3	床　面	〃	刷毛目	ヘラナデ		16.0		25.9		B II
4	〃	〃	刷毛目・ナデ	ナデ	木葉痕				9.6	
5	ピット1	〃	刷毛目	ヘラナデ	〃				8.0	
6	床　面	〃	ヘラケズリ	ヘラナデ・刷毛目・ヘラケズリ	木葉痕 ナデ				8.5	
7	〃	〃	ヘラケズリ		木葉痕				5.9	

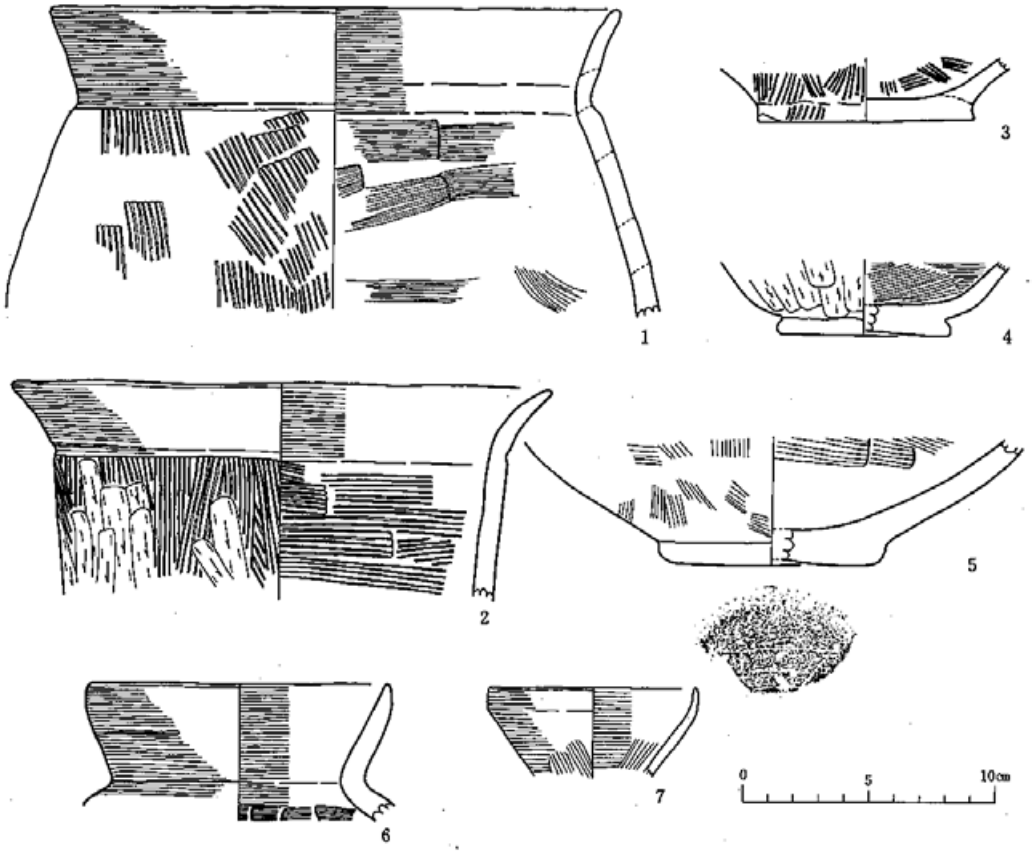
第６図　第１号住居跡出土遺物　(2)



観　察　表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	成部	器高	口径	底径	最径	分類番号
1	床面	土師器(甕)	ヘラケズリ	ナデ	本葉痕 横ナデ				8	
2	〃	〃	刷毛目・ヘラナデ	ヘラナデ	本葉痕				5.3	
3	〃	〃	刷毛目・ヘラケズリ	〃	〃				(8.3)	
4	〃	〃	ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ					
5	〃	須恵器(坏)	ロクロ・回転ヘラケズリ	ロクロ	回転ヘラケズリ	4.3	9.8		5.8	A I
6	〃	〃	ロクロ	〃		(4)	12			A II
7	堆積土	土師器(坏)	横ナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	4	11.8			B I
8	〃	土師器(甕)	横ナデ・ヘラケズリ	横ナデ・ヘラナデ		(8.9)	17.1	17.6		D I
9	〃	〃	横ナデ・刷毛目・ヘラケズリ	〃		(9.7)	13.9	12.9		C 2
10	床面	礫石								

第７図　第１号住居跡出土遺物　(3)



番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	堆積土	土師器(甕)	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラナデ		(12)	22.3			B I
2	〃	〃	横ナデ・刷毛目・ヘラケズリ	横ナデ・刷毛目		(8.6)	21.4			A 1
3	〃	〃	刷毛目	刷毛目	ヘラケズリ				8.6	
4	〃	〃	ヘラケズリ	ナデ	〃				6.7	
5	〃	〃	ナデ	ヘラナデ	木葉痕				7.8	
6	〃	土師器(鉢)	横ナデ	横ナデ・ヘラナデ			11.9			A I
7	〃	〃	横ナデ・ナデ	横ナデ・ナデ			8.1			A II

第８図　第１号住居跡・出土遺物　(4)

（第７図６）は、底部から丸味を帯びて段に至り、段から上は内弯気味に外傾している。口唇部は、やや肥厚し、口縁部内面には沈線が一条巡っている。全面にロクロ調整が施されている。

○堆積土出土遺物

土師器

坏（第７図７）　底部形態が丸底のもので、体部外面の下半に段を有し、内面にも対応するゆるやかな段をもつものである。段から上の部分は、内弯気味に外傾し、器面調整は、外面が

段の上に横ナデ、段の下にヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理されている。

甕　口径が器高より小さいもの（第８図１・2）と大きいもの（第７図８・9）とがある。

前者には、最大径の位置が口縁部にあるもの（第８図 2）と体部にあるもの（第８図 1）とがあり、いずれも、頚部に段を有し、口縁部が外傾するものである。器面調整は、口縁部内外が横ナデ、体部外面が刷毛目のものと刷毛目の後ヘラケズリされているもの、内面がヘラナデのものと刷毛目のものとがある。

後者にも、最大径の位置が口縁部にあるもの（第７図 9）と体部にあるもの（第７図 8）とがある。（第７図 9）は、口縁部と体部とを区画するような段等をもたないもので、口縁部は外傾している。器面調整は、口縁部内外に横ナデ、体部外面では、上半に刷毛目、下端にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。（第７図 8）は、頚部に段を有して、口縁部と体部とを区画し、口縁部は外反しているもので、体部はやや丸味を帯びている。器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

底部は、全て平底を呈し、底縁の形態は、強く張り出すもの（第８図３・4）と軽く張り出すもの（第８図 5）とがある。前者は底部がヘラケズリされ、後者には木葉痕が認められる。

壷　口縁部の破片である。口縁部は外傾し、口縁端部においてやや直立気味に立ち上がるものである。（第８図 6）は、大形のもので、器面調整は内外面とも横ナデが施されている。（第８図 7）は、小形のもので、所謂坩の口縁部である。器面調整は、内外面に横ナデおよびナデが施されている。

第２号住居跡

〔確認面〕　地山面で確認された。

〔平面形・規模〕　南西隅が削平されている。平面形は方形で、規模は長軸 7.6m、短軸 7.4 mである。住居内面積は約 56 ㎡である。

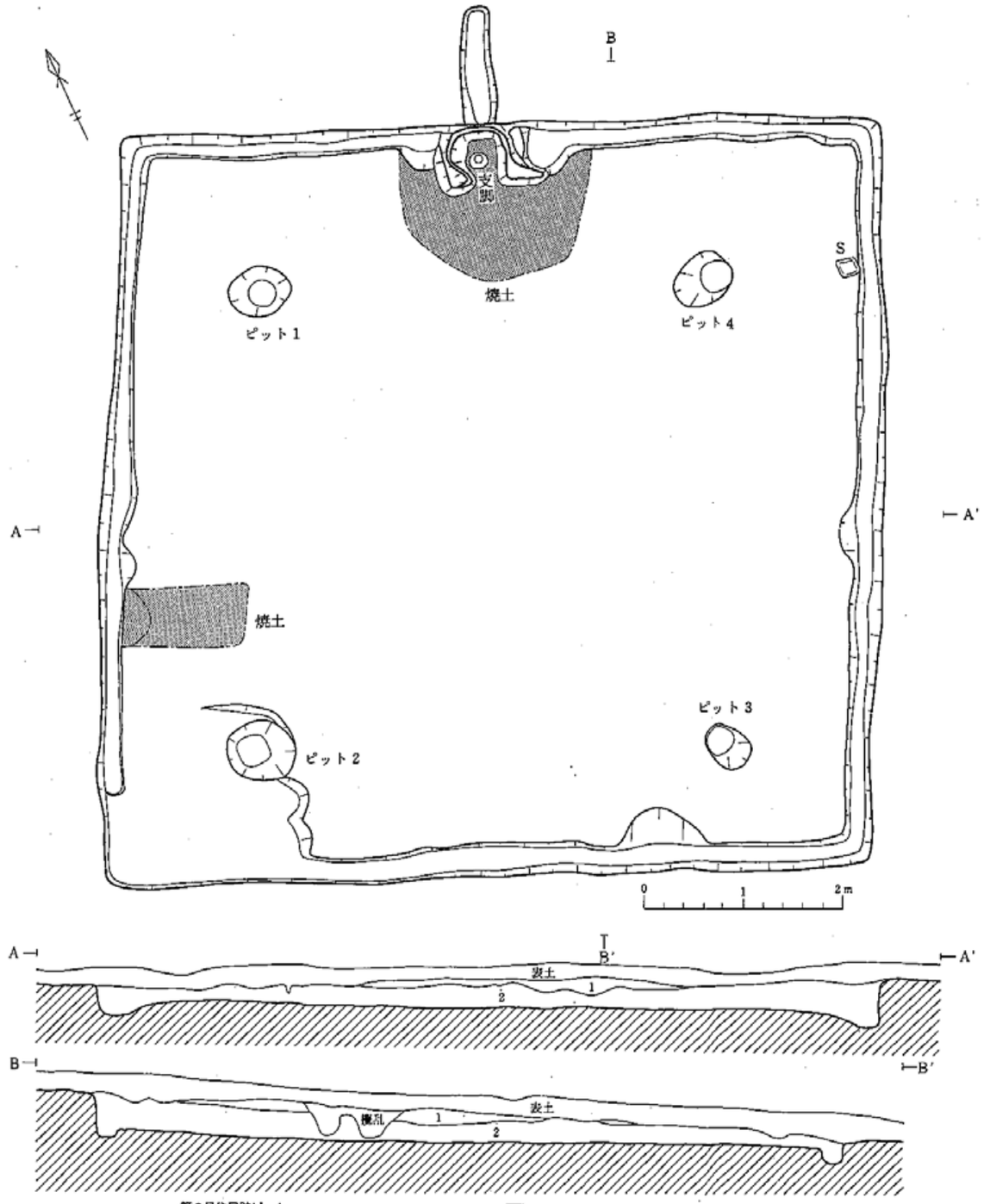
〔堆積土〕　2 層に大別できる。第 1 層は住居中央北寄りに堆積している。第 2 層は住居全体に、床面、周溝を覆い厚く堆積している。堆積層の形態は水平層を呈している。

〔壁〕　4 辺とも残っており、遺存状態は良好である。地山を壁としている。壁は、ほぼ垂直で、残存壁高は、最も保存の良い北壁で約 50 ㎝である。

〔床面〕　地山を床としている。ほぼ平坦で堅くしまっているが、周辺には軟弱な部分も認められる。また、西辺南寄りの部分には焼土の分布が認められる。

〔柱穴〕　床面上でピットが 4 個検出された。いずれにも、柱痕跡は認められないが、ほぼ対角線上に位置するピット 1・2・3・4 が、配置の規則性および深さから、柱穴と考えられる。

〔周溝〕　南西隅の部分を除いて認められた。住居壁に沿って巡り、底面幅が約 10～20 ㎝、床面からの深さが約 10～15 ㎝である。



第2号住居跡ピット

No.	1	2	3	4
深さ(cm)	70	68	64	82

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	黒色	シルト	
第2層	2	黄褐色	シルト	土色が近似しているが、細分可能

第9図　第2号住居跡

〔カマド〕　北辺のほぼ中央部において検出され、燃焼部、煙道部が認められた。全長は 180 ㎝、最大幅は燃焼部先端で 96 ㎝である。燃焼部側壁は粘土によって構築されており、奥行は 44 ㎝である。燃焼部内部には土師器甕を倒立して設置した支脚が認められた。また、燃焼部底面およびその周辺には 140×180 ㎝の範囲で焼土の分布が認められた。煙道部は住居外にのび、底面はゆるやかな勾配をもって先端部にゆくにしたがい高くなっている。底面幅は約 20㎝、長さは 115 ㎝である。さらに、燃焼部の下には周溝が認められた。

〔出土遺物〕　出土遺物には、土師器、須恵器、砥石、鉄製刀子、石製模造品がある。本住居跡に伴うと考えられる遺物には、カマド支脚として使用されていた土器およびカマド内、周溝内、床面出土の遺物がある。床面出土土器の多くは、カマド周辺からの出土である。

○住居に伴う遺物

土師器

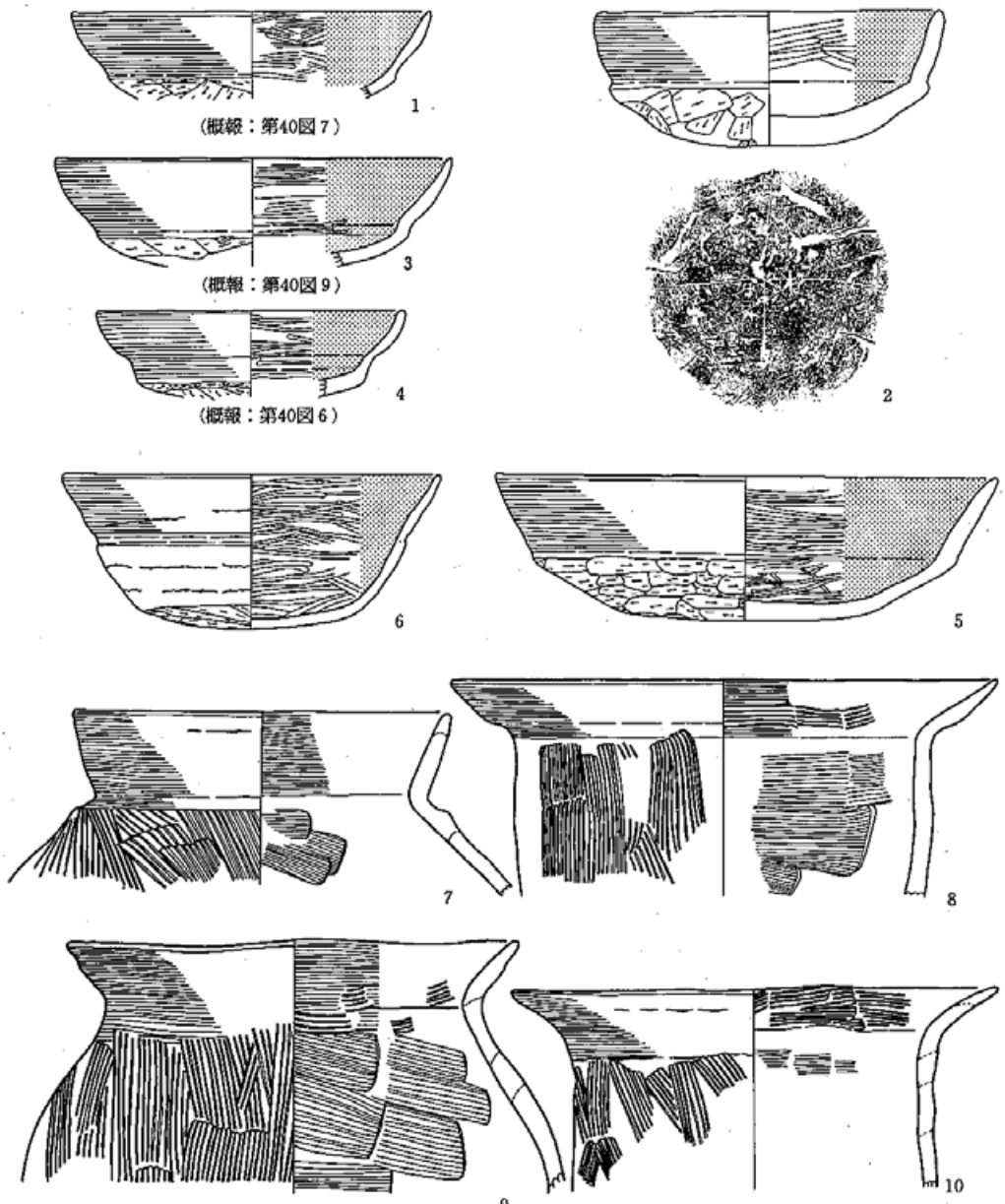
坏　いずれも製作に際してロクロを使用せず、底部形態が丸底のものである。体部外面に段を有するもの（第 10 図 1～5）と沈線を有するもの（第 10 図 6）とがある。

前者は、さらに、内面に対応する段あるいは屈折線をもつもの（第 10 図 2～4・5）ともたないもの（第 10 図 1）の二者がある。体部外面の段の位置は、（第 10 図 2・5）がほぼ中央部に位置している他は、体部下半にある。段から上の部分は、全て外傾するもので、内弯気味に立ち上がるもの（第 10 図 1・3・4）、直立気味のもの（第 10 図 2）がある。器面調整は、全てが、外面の段の上に横ナデ、下にヘラケズリが施され、内面にヘラミガキ・黒色処理がなされている。その内、（第 10 図 3）には、底部にヘラケズリ調整を施した後に線刻が施されており、これは、（第 10 図 4）にも一部認められるものである。

後者は 1 点のみで、前者のものよりやや深いものである。沈線が体部外面のほぼ中央部に巡り、内面には、明瞭な段等をもたないものである。体部から口縁部にかけて外傾している。器面調整は、沈線より上には横ナデが施されているが、下には明瞭な調整が認められず、粘土紐積上痕が良く観察される。底部にはヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ、黒色処理であると思われるが、黒色処理は再酸化をうけているため明瞭ではない。

甕　口径が器高より小さいもの（第 10 図 7～10、第 11 図 1・2）と大きいもの（第 11 図 3・4）がある。

前者は、さらに、最大径の位置が口縁部にあるもの（第 10 図 8・10、第 11 図 1）と体部にあるもの（第 10 図 7・9、第 11 図 2）とがある。最大径が口縁部に位置するものには、口縁部が外傾するもの（第 10 図 8、第 11 図 1）と外反するもの（第 10 図 10）とがみられ、頸部に明瞭な段等は認められない。底部形態は、（第 11 図 1）をみると、平底で、底面に木葉痕が認められ、底縁部に張り出しがみられる。器面調整は、口縁部内外には横ナデが施され、体部外面には刷



観　察　表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	カマド内	土師器(坏)	横ナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	(3.6)	14.7			B II
2	床　面	〃	〃	〃	糸切あり	5.6	14			B I
3	〃	〃	〃	〃	ヘラケズリ	(4.5)	16.3			〃
4	〃	〃	〃	〃	〃	(3.6)	12.7			〃
5	〃	〃	〃	〃	〃	6	20.6			〃
6	〃	〃	横ナデ	〃	〃	6.4	15.5			C II
7	〃	土師器(甕)	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラナデ		(7.2)	15.4			B I
8	〃	〃	〃			(9)	22.5			A 2
9	〃	〃	〃	〃 ・刷毛目		(10.6)	18.4			B II
10	〃	〃	〃	刷毛目・ナデ		(8.3)	20			A 2

第10図　第２号住居跡出土遺物　(1)

毛目、内面にはヘラナデが施されている。最大径が体部に位置するものには、頚部に段のあるもの（第10図7、第11図2）とないもの（第10図9）があり、口縁部は外傾するものである。器面調整は前述のものと同様である。

後者にも、最大径の位置が、口縁部にあるもの（第11図3）と体部にあるもの（第11図4）との二者がある。最大径が口縁部にあるものは、口縁部が外傾し、頚部には段等をもたないものである。器面調整をみると、外面は口縁部付近に横ナデが施され、それ以下の体部全面にはヘラケズリがなされているが、磨滅が著しく明確ではない。内面は、口縁部付近に刷毛目が施され、それ以下にはヘラナデが施されている。底部は平底で、底面に木葉痕を有している。最大径が体部にあるものは、体部上半が内弯しているもので、口縁部と体部の境は明確ではない。器面調整は、外面に横ナデ・刷毛目、内面にナデが施されている。底部形態は、平底で、広縁がやや張り出しているもの（第12図9）がある。

砥石（第11図5）

大部分が欠損している。長方形を呈し、磨面は表面と側縁部の計3面に認められ、擦痕が観察される。

鉄製刀子（第11図6）

身の破片である。背の部分はほぼ平坦で、平造りである。刃の部分は切先部に向かって幅狭くなっている。

珪化木（第11図7）

長方形を呈し、表面に二段の平坦面をもつ珪化木で、その両端に擦った面が認められる。この磨面が、整形時のものなのか、使用痕かは不明である。

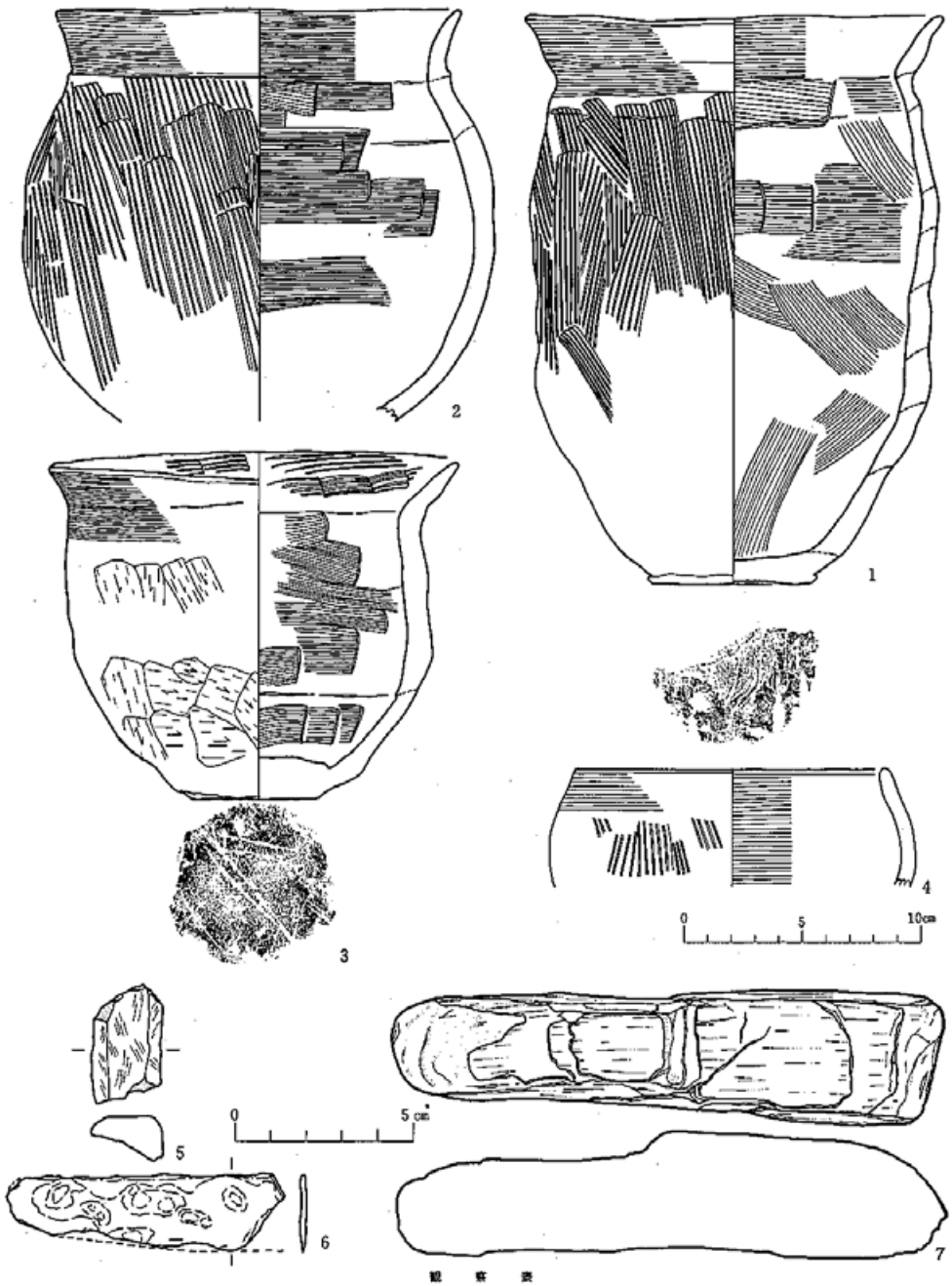
○堆積土出土遺物

土師器

坏　いずれも製作に際してロクロを使用していないもので、底部形態が丸底のもの（第12図1・2）と平底のもの（第12図3）とがある。

前者には、体部外面に段を有するもの（第12図2）と沈線を有するもの（第12図1）がある。（第12図2）は、段が体部下半にあり、内面には段等を有しないものである。段の上は、内弯気味に外傾し、器面調整は、外面では、段の上が横ナデの後ヘラケズリ、段の下がヘラケズリ、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。（第12図1）は、大形のもので、沈線の位置が体部のほぼ中央部にあり、内面に対応する段をもつものである。沈線の上は外傾し、器面調整は、外面では沈線を境として上が横ナデ、下がヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。

後者のものは、体部外面に段を有し、内面に対応する段等をもたないものである。段の位置



観　察　表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体部	底径	分類番号
1	床面	土師器(甕)	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラナデ	木葉痕	24	17.3	16.6	6.7	A 1
2	〃	〃	〃	〃		(17.5)	17.1	19.9		B II
3	カマド支脚	〃	横ナデ・ヘラケズリ	横刷毛目・ヘラナデ	木葉痕	14.7	17.4	16.1	5.4	C 2
4	床面	〃	横ナデ・刷毛目	ナデ		(5)	13.1	13.4		D II
5	〃	砥・石								
6	〃	鉄製刀子								
7	〃	埴輪								

第11図　第２号住居跡出土遺物 (2)

は、ほぼ体部下半にあり、段の上は内弯気味に外傾している。器面調整をみると、外面は、段の上に横ナデが施され、段の下から底部には木葉痕が認められる。木葉痕の一部は、段の上にも認められ、部分的に横ナデを消している。さらに、段の部分の横ナデが木葉痕の上に施されている。内面は、横ナデの後、ヘラミガキ・黒色処理がなされている。

甕　いずれも完形ではないが、口径が器高より小さいと思われるもの（第 12 図 4・5）と大きいと思われるもの（第 12 図 6）とがある。

前者には、最大径の位置が口縁部にあり、頚部に段を有するもの（第 12 図 5）と最大径が体部に位置し、頚部に段等をもたないもの（第 12 図 4）とがある。両方とも、口縁部は外傾し、器面調整は、口縁部内外に横ナデ、体部外面に刷毛目、内面にヘラナデ・ナデが施されている。

後者は、最大径を口縁部に有する小形のものである。（第 12 図 6）は、口縁部が外傾し、頚部に段が二段巡っている。器面調整は、口縁部および口辺部内外が横ナデで、それ以下の体部外面には主たる調整が認められず、内面にヘラナデが観察される。

高坏（第 12 図 7）　坏部のみのもので、直線的に外傾しているものである。器面調整は、外面に、横ナデの後ヘラミガキ、内面に、横ナデ・ヘラナデの後ヘラミガキが施されている。

須恵器

蓋（第 12 図 8）　つまみの部分が欠損している。天井部からやや丸味をもちながら口縁部に至り、口縁は肥厚して、口縁端部に一条の沈線が巡っている。天井部から口縁部にロクロ調整痕が明瞭である。

石製模造品

柳葉形の剣形品である。幅広いもの（第 12 図 10）と細身のもの（第 12 図 11）とがある。先端部は尖り、基部に 1 個の小孔を有し、孔は一方向から穿たれている。表面には「Y」字状の稜をもち、横断面は三角形を呈し、表裏両面および側縁部には製作の際の研磨による擦痕が観察される。

石製品（第 12 図 12）

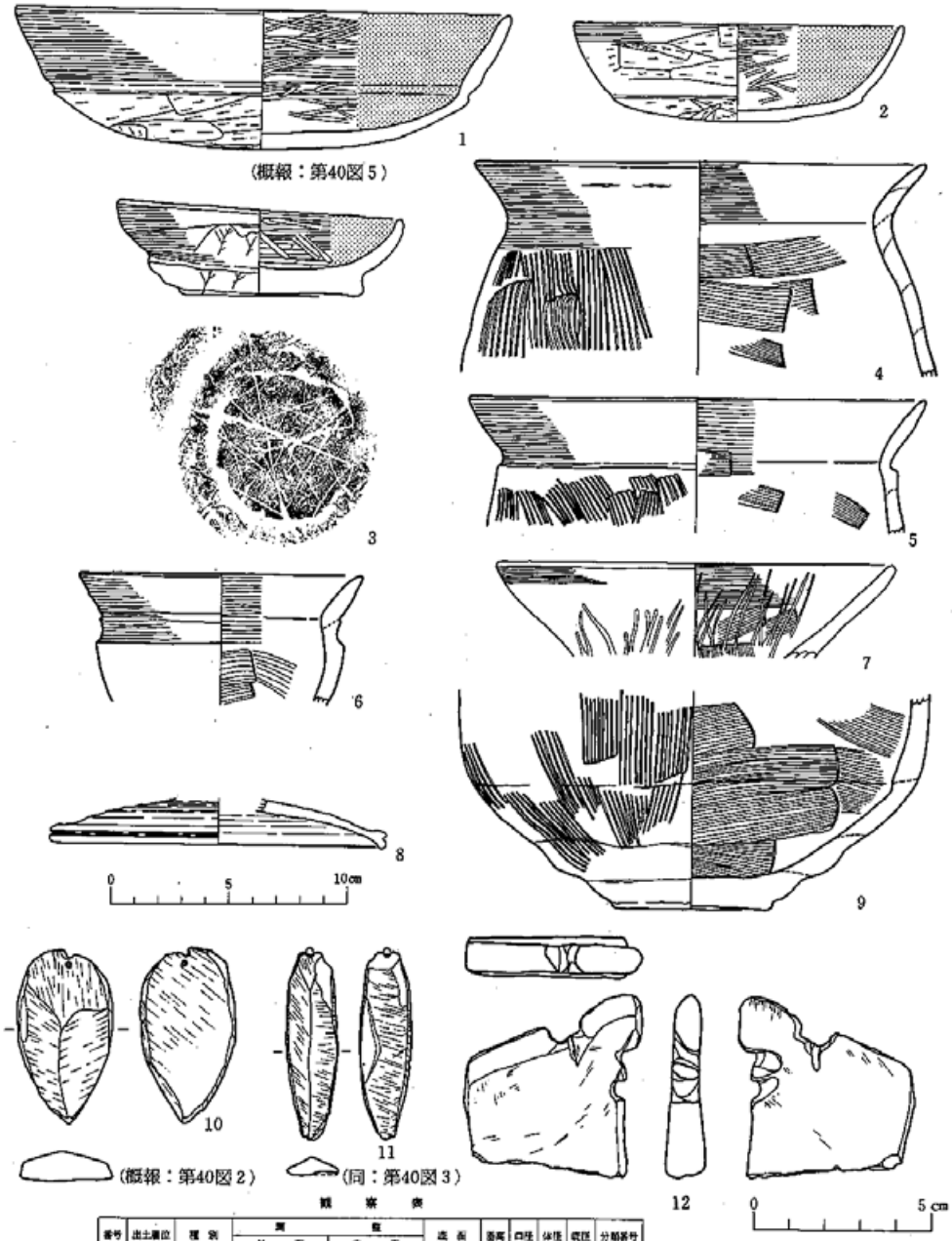
不整形を呈した板状のもので、表裏および側縁に磨面が認められ、さらに、側縁には深い擦痕が残されているものである。磨面にも軽い擦痕が認められ、砥石としての機能を果したものと考えられる。

第 3 号住居跡

〔確認面〕　地山面で確認された。

〔平面形・規模〕　傾斜地であるため、南の約$\frac{1}{3}$が失われている。平面形は、ほぼ方形で、規模は、北辺 4.8m、東辺残存長 3.8m である。残存住居内面積は 14 ㎡である。

〔堆積土〕　8 層が観察される。第 1 層は住居中央部に堆積している。第 2 層は東方からの流



（概報：第40図５）

（概報：第40図２）

（同：第40図３）

観　察　表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	造形	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	埋積土	土師器(坏)	横ナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	5.9	20.9			C I
2	〃	〃	〃	〃	〃	4.2	13.8			B II
3	〃	〃	横ナデ・本葉痕	〃	水磨痕	4	11.9			B II
4	〃	土師器(甕)	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラナデ		(9)	19			A 2
5	〃	〃	〃	〃		(5.7)	19.2			A 1
6*	〃	〃	横ナデ	〃		(5.8)	12.9			C 1
7	〃	土師器(高坏)	横ナデ・ヘラミガキ	横ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ			16.7			
8	〃	須恵器(蓋)	ロクロ	ロクロ			14			
9	床面	土師器(甕)	刷毛目	ヘラナデ					6.7	
10	埋積土	石製模造品								
11	〃	〃								
12	〃	石製品								

第12図　第２号住居跡出土遺物 (3)

入であり、住居東半部に堆積している。第3層は西方からの流入で、住居西半部に厚く床面まで堆積している。第4層は東壁寄りに堆積している。第5層は東方からの流入で、住居東半の床面直上に堆積している。第6層は東方からの流入で、東壁寄りに堆積している。第7層は住居壁の崩壊土粒を含み壁際に堆積している。第8層は周溝内から床面にかけて堆積している住居壁の崩壊土である。堆積層の形態は将棋倒し状を呈している。

〔壁〕 地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は、最も保存の良い北壁で約70㎝である。

〔床面〕 地山を床としている。全体的に良くしまっている。

〔柱穴〕 床面上でピットが4個検出された。配置の規則性と深さから、ピット1・2が柱穴であると考えられるが、この2個の柱穴に対応する柱穴は削平のため不明である。

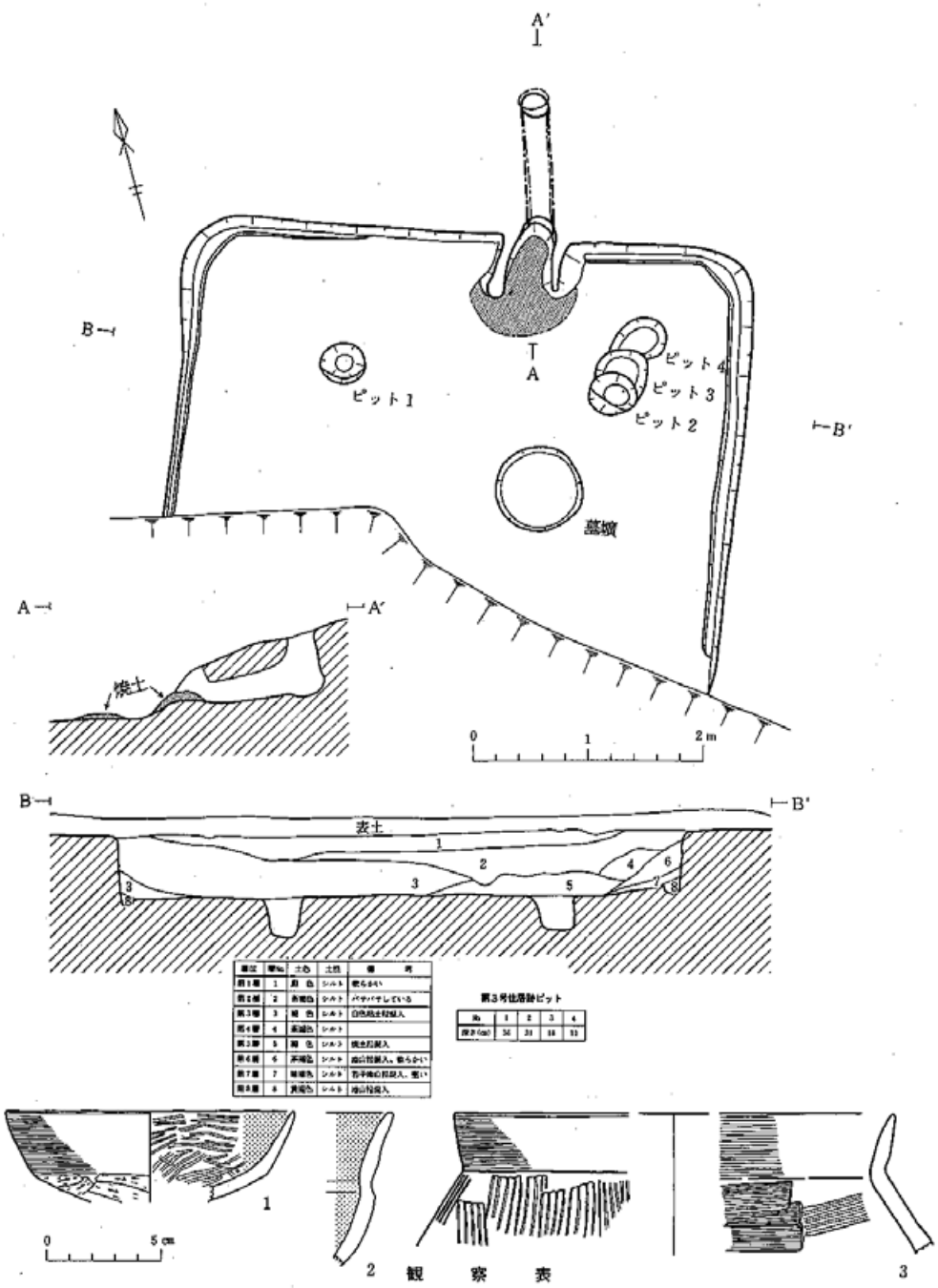
〔周溝〕 失われた南辺と北辺中央部東寄りにとりつけられたカマドの西側を除いて認められた。底面幅約5～10㎝、床面からの深さ約5～15㎝である。

〔カマド〕 北辺中央部東寄りにおいて検出された。燃焼部、煙道部が認められた。全長は180㎝、最大幅は84㎝である。燃焼部は地山の削り出しによって構築されている。燃焼部最大幅は先端部で32㎝、奥行は54㎝である。燃焼部底面およびその周囲には、84×88㎝の範囲で焼土の分布がみられる。煙道部は保存が良く、住居外に掘り抜かれており、先端に向かってゆるやかに高くなっている。底面幅は18㎝、煙出し部までの長さが96㎝である。煙出し部には径22㎝のピットがあり、煙道部底面より約6㎝深くなっている。

〔出土遺物〕 出土遺物は土師器のみであるが、破片を含めても少量しかない。また、床面出土等の住居に伴う遺物もないため、ここでは、住居廃絶後の自然流入による堆積土出土の土器のみを扱うことにしたい。

坏 製作に際してロクロを使用せず、底部形態が丸底のものである。（第13図1）は、体部外面の下半に屈折線を有し、内面には対応する段等が認められないものである。屈折線の上は口縁部に向かって外傾し、器面調整は、外面が屈折線を境として、上に横ナデ、ヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。（第13図2）は、断面図のみであるが、やや深い器形で、体部外面のほぼ中央部に段を有し、内面にも対応する段を有するものである。段の上は外傾している。器面調整は、外面の段より上に横ナデ、下にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕（第13図3） 口径が器高より小さいと考えられるもので、肩部の張りぐあいから球形に近い体部を有していると思われる。頚部は屈折して、口縁部は外傾している。器面調整は、口縁部内外面が横ナデ、体部外面が刷毛目、内面がヘラナデである。



番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	堆積土	土師器(坏	横ナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	(4.1)	12.6			D I
2	〃	〃	〃	〃	〃	(7)				B I
3	〃	土師器(甕)	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラナデ						

第13図　第３号住居跡と出土遺物

2. 溝とその出土遺物

第１溝（第３図）

〔確認面〕　地山面で確認された。

〔規模〕　南北にのびる溝で、残存長は約 16m、上端幅は約 100 ㎝、底面幅は約 35～60 ㎝、深さは約 20～40㎝ である。

〔堆積土〕　２層に分けられるが、全体としてサクサクした柔かい腐植土である。

〔底面・壁〕　底面は、ほぼ平坦で、壁は比較的急に立ち上がっている。

〔出土遺物〕　出土遺物はない。

第２溝

〔確認面〕　地山面で確認された。

〔平面形・規模〕　北は後世につくられた段のため消滅しており、西は自動車道路線敷外までのびている。発掘できた範囲内での平面形は「L」字状を呈している。規模は、東西 15.5m、南北 17.5mで、上端幅が約 90～150 ㎝、底面幅が約 40～80㎝、深さが約 50～100 ㎝である。

〔堆積土〕　２層に分けられる。北西部からの流入による堆積土である。

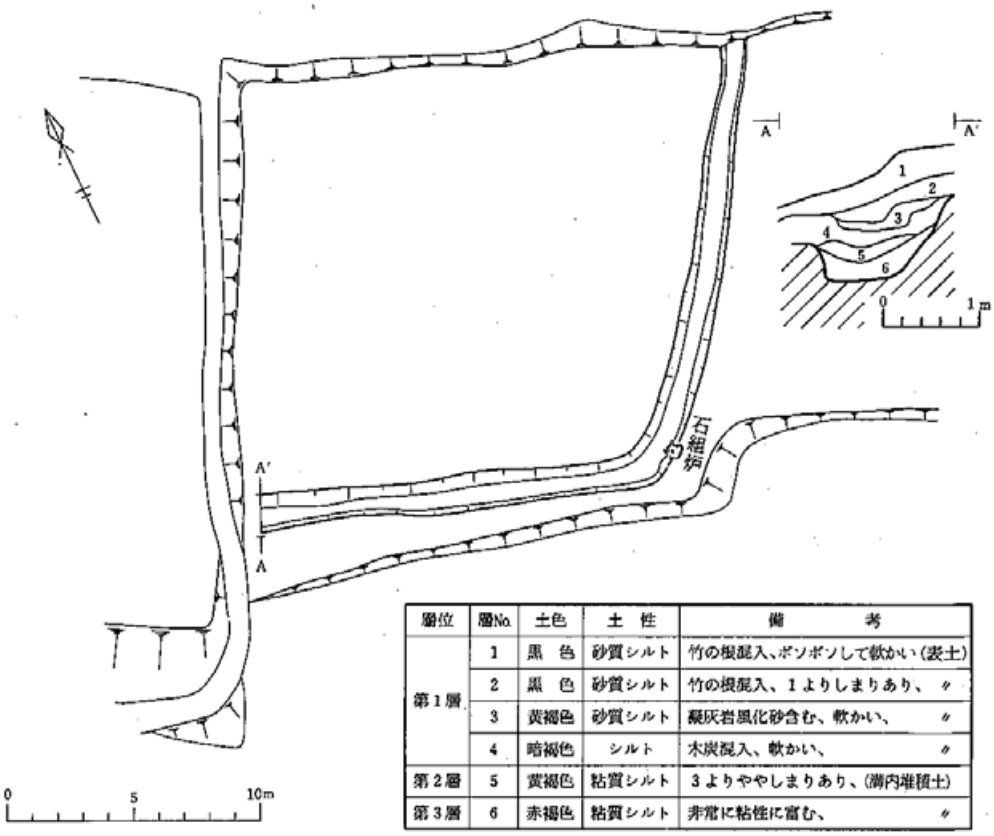
〔底面・壁〕　底面は、ほぼ平坦であり、壁は、ゆるやかに立ち上がる。

〔出土遺物〕　出土遺物には土師器坏と高坏、および少量の甕の底部片がある。特に、高坏の脚部が多数出土していることが注目される。これらの遺物は、全て、溝の堆積土からの出土である。

坏　いずれも製作に際してロクロを使用せず、口縁部がくびれて外反し、内面に対応する稜を有するものである。底部は欠損しているものが多い。これらは、さらに、体部上半が内弯するもの（第 15 図 1）、直立するもの（第 15 図 2）、外傾するもの（第 15 図 3・4・5）の三者がある。器面調整をみると、口縁部内外は、全てに、横ナデが施されているが、体部内外面では調整を異にしている。体部上半が内弯もしくは直立するものには、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施されており、体部上半が外傾するものには、体部内外ともヘラミガキのもの（第 15 図 3）、体部内外面ともナデのもの（第 15 図 4）、体部外面がヘラケズリ、内面がナデのもの（第 15 図 5）などがある。

高坏　完形品は皆無であり、外部と脚部の別個体の破片が多い。

坏部には、坏部上半と下半の接合部にやや下方に突出した稜帯がまわるもの（第 15 図 6）、段がつくもの（第 15 図 7）、角がつくもの（第 15 図 8・9・10）がある。坏部上半は、直線的に外傾するもの（第 15 図 9・10）、外反するもの（第 15 図 6）があるが、その他は、欠損しているため不明である。坏部下半は、外面が強く外傾もしくは外反している。器面調整は、いずれも、内外面が丁寧にヘラミガキされており、その内、（第 15 図 6・9）のように、突出部分や段の



層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	黒色	砂質シルト	竹の根混入、ボソボソして軟かい（表土）
	2	黒色	砂質シルト	竹の根混入、1よりしまりあり、〃
	3	黄褐色	砂質シルト	凝灰岩風化砂含む、軟かい、〃
	4	暗褐色	シルト	木炭混入、軟かい、〃
第2層	5	黄褐色	粘質シルト	3よりややしまりあり、（溝内堆積土）
第3層	6	赤褐色	粘質シルト	非常に粘性に富む、〃

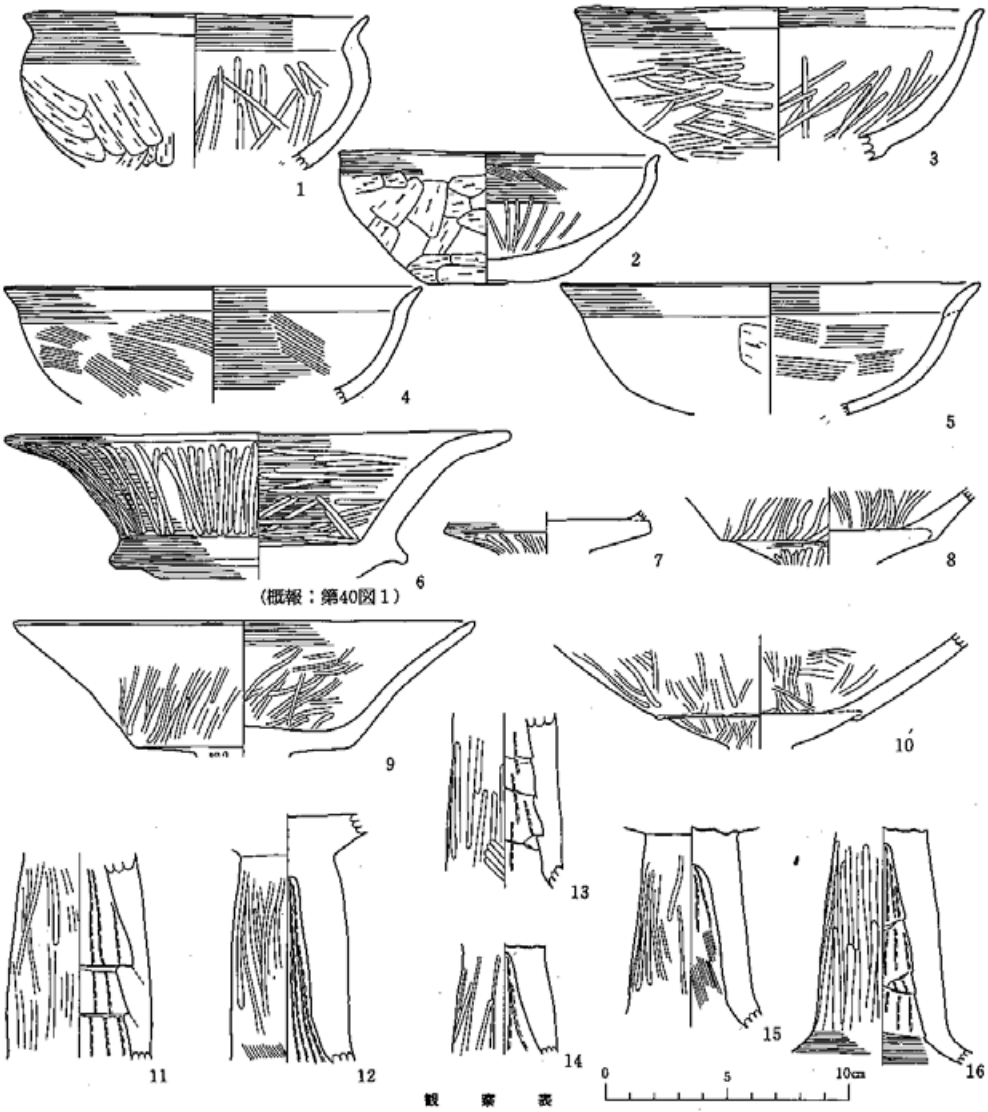
第14図　第　2　溝

部分に横ナデが施されているものや、ヘラミガキ調整の前段階の横ナデが観察されるものもある。

脚部は柱状部と裾部とに分けられるが、出土したものの大部分は柱状部である。柱状部には、直線的にほぼ直立するもの（第15図11～16）と全体的にふくらみをもつもの（第16図1～9）とがあり、量的には後者の方が多い。器面調整をみると、外面には、ほとんどのものに最終調整としてヘラミガキが施されているが、（第16図7・8）のように、ヘラケズリの施されているものも認められる。また、（第16図4）には、外面に部分的に朱彩が認められる。内面は、全てのものにシボリ目が観察され、その内、（15図15、第16図1）にはナデ調整が施されている。また、粘土紙巻状の痕跡が明瞭に認められるものが多い。

裾部は大きく外反して開くものが1点出土しており（第16図10）、その器面調整は、外面が横ナデの後ヘラミガキ、内面が横ナデである。

甕　甕は底部片のみであるが、全て、平底のものである。外反気味に立ち上がるもの（第16図11～13）と内弯気味に立ち上がるもの（第16図14）とがある。底面の器面調整は、いずれも

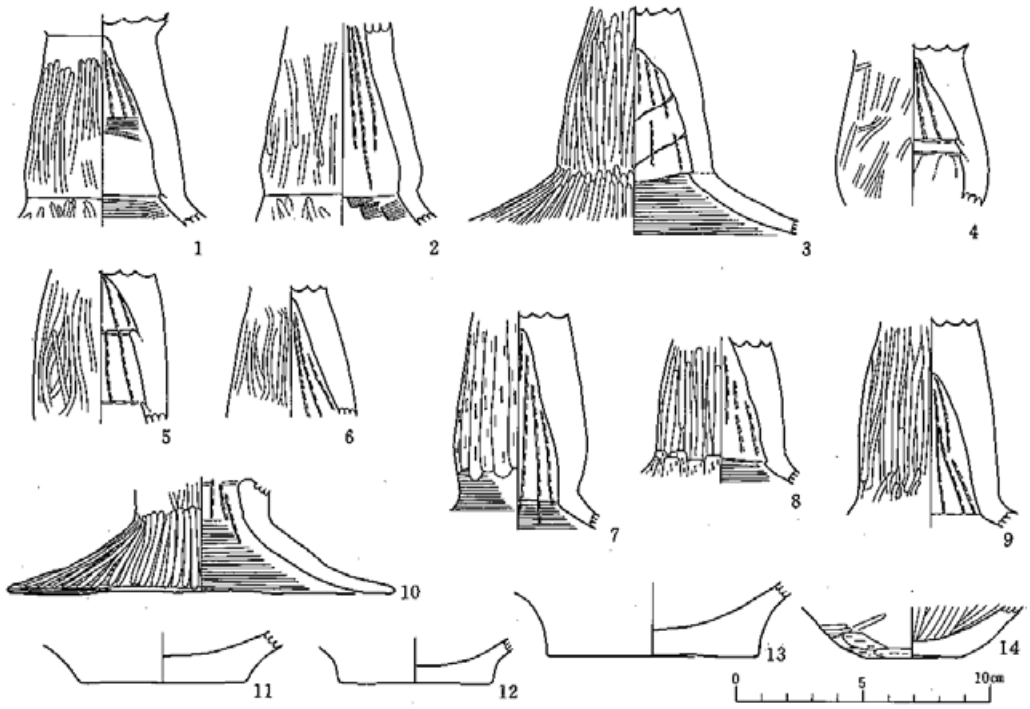


（概報：第40図１）

観　察　表

番号	出土層位	種　別	調　査		底　面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外　面	内　面						
1	堆積土	土師器（坏）	横ナデ・ヘラケズリ	横ナデ・ヘラミガキ		(6.3)	14.2			A I
2	〃	〃	〃	〃　・ナデ	ヘラケズリ	5.4	13.2		4.3	A II
3	〃	〃	横ナデ・ヘラミガキ	横ナデ・ヘラミガキ		(6.3)	16.8			A IIIa
4	〃	〃	横ナデ・ナデ	横ナデ・ナデ		(4.8)	17.2			〃
5	〃	〃	横ナデ・ヘラケズリ	〃		(5.2)	17.2			〃
6	〃	土師器（高坏）	横ナデ・ヘラミガキ	横ナデ・ヘラミガキ		(6)	20.7			A
7	〃	〃	〃	ヘラミガキ						B
8	〃	〃	ヘラミガキ	〃						C
9	〃	〃	〃	横ナデ・ヘラミガキ		(5.6)	19			〃
10	〃	〃	〃	ヘラミガキ						〃
11	〃	〃	ヘラミガキ	シボリ目						I a
12	〃	〃	ヘラミガキ・ナデ	〃						〃
13	〃	〃	ヘラミガキ	〃						〃
14	〃	〃	〃	〃						〃
15	〃	〃	〃	〃　・ナデ						〃
16	〃	〃	ヘラミガキ・横ナデ	〃						〃

第15図　第２溝出土遺物　(1)



観察表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底径	胴径	口径	器高	成形	分類番号
1	堆積土	土師器(高坏)	ヘラミガキ	シボリ目・ナデ						Ⅱ
2	〃	〃	〃 〃	〃 ・ヘラナデ						〃
3	〃	〃	〃 〃	〃 ・横ナデ						〃
4	〃	〃	〃 〃	シボリ目						〃
5	〃	〃	〃 〃	〃						〃
6	〃	〃	〃 〃	〃						〃
7	〃	〃	横ナデ・ヘラケズリ	シボリ目・横ナデ						〃
8	〃	〃	ヘラミガキ・ヘラケズリ	〃						〃
9	〃	〃	ヘラミガキ	シボリ目						〃
10	〃	〃(甕類)	横ナデ・ヘラミガキ	シボリ目・横ナデ						
11	〃	土師器(甕)							6.4	
12	〃	〃							5	
13	〃	〃							6.2	
14	〃	〃	ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ					3.8	

第16図　第２溝出土遺物

ヘラケズリが施されている。

3. 溝状落ち込みとその出土遺物

〔確認面〕　地山面で確認された。

〔平面形・規模〕　不整な溝状の落ち込みで、長さが約4.5m、幅が約85㎝、深さが約7～35㎝である。

〔底面・壁〕　底面は西から東へと傾斜しており、東端部はピット状に落ち込んでいる。壁はゆるやかに立ち上がる。

〔出土遺物〕　出土遺物には、堆積土出土の土師器坏・甕と小形手捏ね土器がある。量的には、甕の破片が多い。

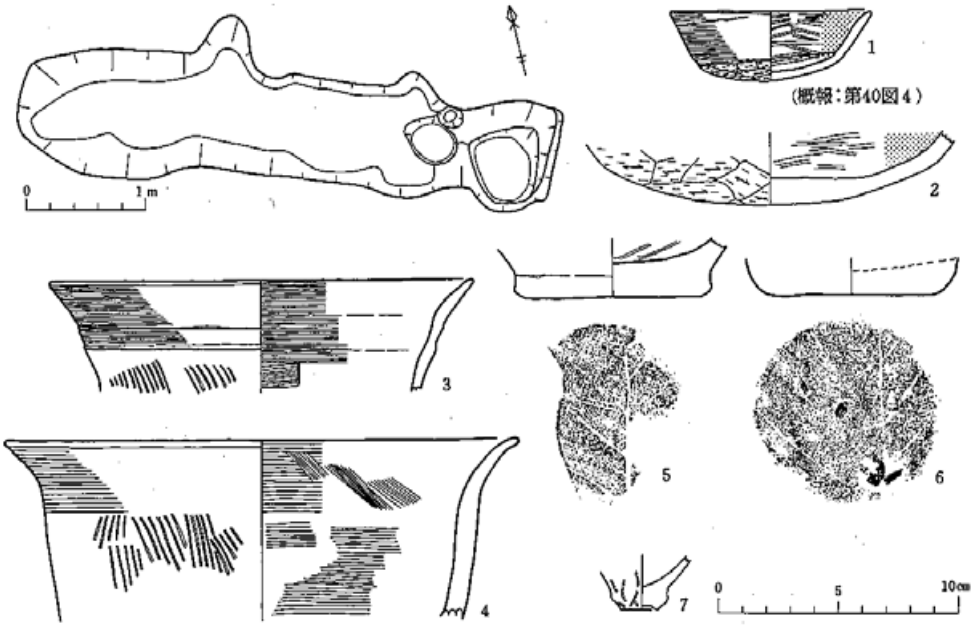
土師器

坏　製作に際してロクロを使用せず、底部形態が丸底のものである。（第17図1）は、小形のもので、体部下半に段を有し、内面にも対応する段を有するもので、段より上は、直線的に外傾している。器面調整は、外面が、段の上に横ナデ、下にヘラケズリが施され、内面がヘラミガキ・黒色処理されている。（第17図2）は底部破片であるが、器面調整は（第17図1）と同様である。

甕　口縁部に最大径をもつものであり、口縁部が外傾して頸部に段をもつもの（第17図3）と外反して頸部に段等をもたないもの（第17図4）がある。器面調整は、双方とも、口縁部の内外面が横ナデ、体部外面が刷毛目、内面がヘラナデである。底部破片には木葉痕が認められる（第17図5・6）。

小形手捏ね土器（第17図7）

口縁部を欠損している。底部が上げ底風のもので、体部には指頭によるオサエが観察される。胎土には石英粒を含み、焼成は良好である。



（概報：第40図4）

観　察　表

番号	出土層位	種　別	調　整		底　面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外　面	内　面						
1	堆積土	土師器（坏）	横ナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	2.9	8.3			B I
2	〃	〃	ヘラケズリ	〃						
3	〃	土師器（甕）	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラナデ		(4.7)	17.3			A 1
4	〃	〃	〃	ナデ		(7.6)	12.4			A 2
5	〃	〃		ヘラミガキ	木葉痕				7.2	
6	〃	〃			〃				7	
7	〃	小形手捏ね器	オサエ			(2.3)			1.6	

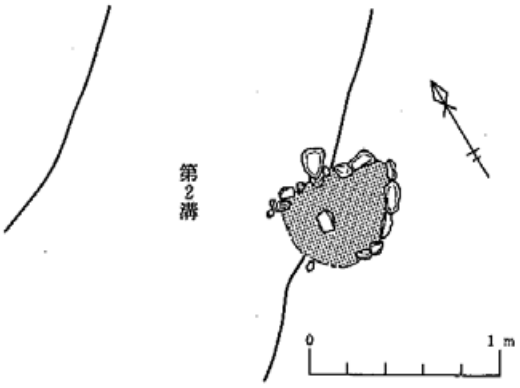
第17図　溝状落ち込みとその出土遺物

4. 石組炉

〔確認面〕 地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 自然石をほぼ円形に配したもので、径は約60cmである。石組の内部には、炭化物や焼土がつまっている。

〔重複関係〕 第2溝の南東コーナーの外側に位置し、石組の西半部が第2溝と重複関係にある。この石組の西半は、第2溝の堆積土上面に及んでいることから、石組炉は、第2溝より新しい時期のものである。



第18図 石 組 炉

5. 墓壙とその出土遺物

〔確認面〕 第3号住居跡の床面において確認されたもので、正確な掘り込み面は不明である。

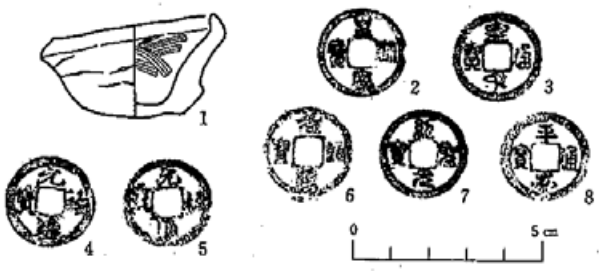
〔平面形・規模〕 平面形は円形で、規模は径74cm、床面(確認面)からの深さが10cmである。

〔底面・壁〕 底面は平坦で、壁はほぼ垂直である。

〔出土遺物〕 小形手捏ね土器1点と古銭7枚が出土した。

小形手捏ね土器（第19図1）

底部形態が丸底のもで、口縁部は外面に稜を形成して、強く内傾している。器面の調整をみると、外面は口縁部にナデ、内面に単位の狭いヘラナデが施されている。胎土には石英粒を含み、焼成は良好で堅い。



第19図 墓壙出土遺物

古銭（第19図2～8）

皇宋通宝が2枚、元祐通宝が3枚、紹聖元宝が1枚、平安通宝が1枚の計7枚、4種類である。

6. 表土および出土地点不明の遺物

ここでとりあげる遺物は、表土および出土地点不明の遺物である。弥生土器、土師器、石製品がある。

弥生土器

（第20図1）は、壺の体部下半の破片である。上半には渦巻文へと展開すると思われる沈線による重孤文がみられる。沈線の幅は狭く、約1㎜で、沈線間の幅は約7～10㎜と均一ではな

いことから、この沈線は一本工具によって施文されたものと考えられる。また、下半には、附加縄文（ＬＲ＋Ｒ）が施されている。

（第 20 図 2・3）は細片であるが、壺の体部上半の破片である。地文である縄文（ＬＲ）の上に沈線を施したものである。沈線には渦巻文になるものと斜行するものとがある。

（第 20 図 4）は、壺の口縁部から肩部の破片である。頚部はすぼまって、口縁部は内弯気味に開く広口の漏斗状を呈するものである。口縁部は波状を呈する。地文は横走する縄文（ＬＲ）で、頚部は磨消され、無文帯となっている。

以上の弥生土器は、破片であり、また、4 点しかないため、ここで、その所属時期について、触れておきたい。

1 は、沈線の施文技法から、同町西裏遺跡出土土器を標式とする「円田式」（伊東：1960）に、2〜4 は、文様構成および形態的・技法的特徴から、福島県白河市天王山遺跡出土土器を標式とする「天王山式」（坪井：1953）に比定される。本遺跡周辺で、これらの型式の弥生土器を出土した遺跡としては、発掘調査が実施されたものとして、大橋遺跡（藤沼：1971）、赤鬼上遺跡（阿部・黒川：1980）がある。

土師器

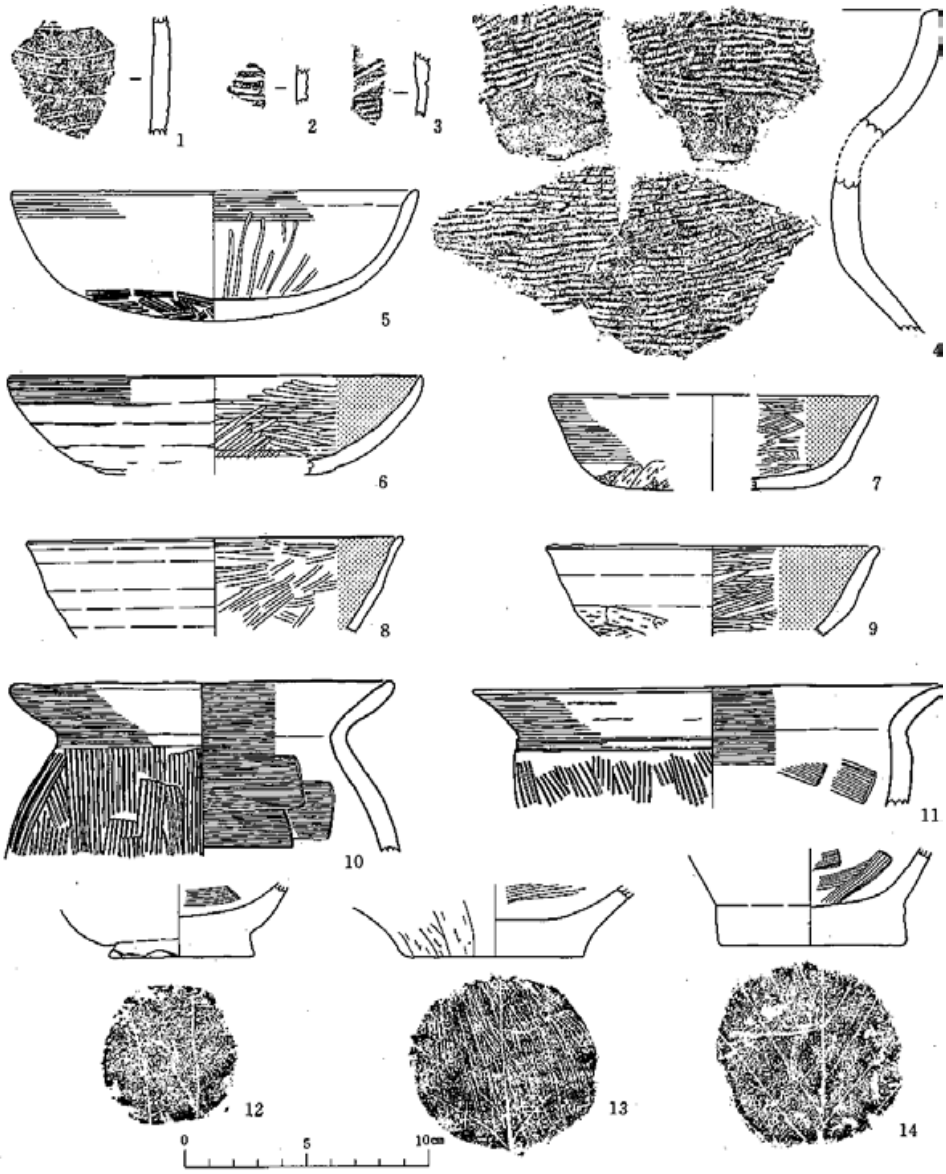
坏　製作に際してロクロを使用していないもの（第 20 図 5〜7）と使用しているもの（第 20 図 8・9）とがある。

前者は底部形態が丸底のもので、体部外面に段を有するもの（第 20 図 6）と段を有しないもの（第 20 図 5・7）とがある。（第 20 図 6）は体部外面下端に段を有し、内面にも対応する段をもつもので、段より上の部分は内弯気味のものである。器面調整は、外面が、口縁部に横ナデで、体部に主たる調整が認められず、粘土紐積上痕跡が観察される。底部底面はヘラケズリされ、内面はヘラミガキ・黒色処理である。（第 20 図 7）は、やや平底風を呈する丸底で、底部から丸味をもって立ち上がり、体部上半が外傾するもので、内面に軽い屈折線が認められる。器面調整は、外面上半が横ナデ、下半がヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。（第 20 図 5）は、底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部に至るもので、口縁部内面には稜が観察される。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面が不明、内面がヘラミガキである。体部下端から底部には刷毛目が施されている。

後者は底部が欠損しているものである。体部はほぼ直線的に外傾し、口縁端部でやや外反する。器面調整は、外面にロクロ調整痕が明確に認められ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。（第 20 図 9）は、体部下半に手持ちヘラケズリが施されている。

甕　最大径の位置が口縁部にあるもの（第 20 図 11）と体部にあるもの（第 20 図 10）とがある。

前者は、口縁部が外反するもので、頚部に段を二段有している。後者は口径が器高より小さ



観察表

番号	出土層位	種別	調整等 外面	調整等 内面	底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	表土	弥生土器(壺)	縄文・LR＋R	ナデ						
2	〃	〃	LR＋沈線	〃						
3	〃	〃	〃	〃						
4	〃	〃	LR縄文	〃						
5	〃	土師器(坏)	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラミガキ		5.3	16.6			D II
6	〃	〃	横ナデ	ヘラミガキ・黒色処理		(4.3)	17			B I
7	〃	〃	横ナデ・ヘラケズリ	〃		(4)				D I
8	〃	〃	ロクロ 〃	〃		(4)	15.4			E
9	〃	〃	ロクロ・手持ヘラケズリ	〃		(3.7)	13.7			〃
10	〃	土師器(甕)	横ナデ・刷毛目	横ナデ・ヘラナデ		(7.3)	15.7			B II
11	〃	〃	〃	〃		(5)	19.7			A 1
12	〃	〃		ヘラナデ	木葉痕				5.6	
13	〃	〃	ヘラケズリ	ナデ	木葉痕の後ヘラケズリ				7.2	
14	〃	〃		ヘラナデ	木葉痕				7.5	

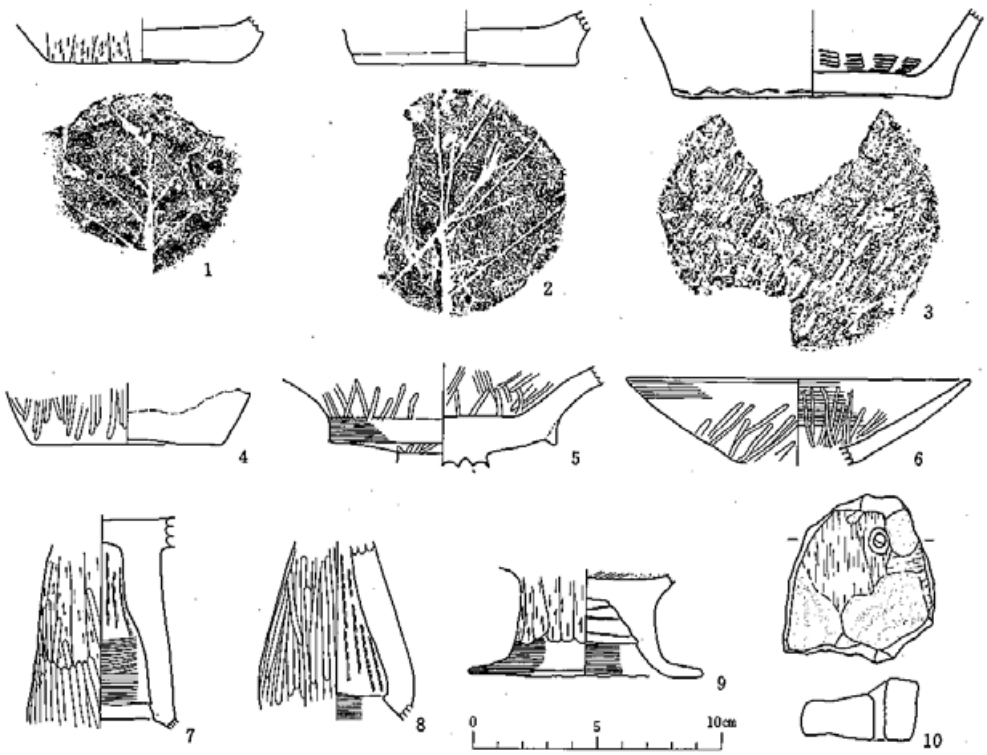
第20図　表土および出土地点不明の遺物　(1)

いものと考えられ、頚部は「く」の字状に屈曲して、口縁部は外傾している。器面調整は、いずれも、口縁部内外面が横ナデで、体部は、外面が刷毛目、内面がヘラナデである。

底部には、平底のもの（第 20 図 12～14）と中央がやや窪んでいるもの（第 21 図 1～4）とがある。底面には木葉痕の認められるもの(第 20 図 12・14、第 21 図 1)、木葉痕の後ヘラケズリが施されているもの（第 20 図 13）、木葉痕の後に付着した筵状圧痕の認められるもの(第 21 図 2)、筵状圧痕の認められるもの（第 21 図 3）、ヘラケズリの施されたもの（第 21 図 4）などがある。

高坏　坏部と脚部の破片である。

坏部には、（第 21 図 5）のように、坏部上半と下半の接合部にやや下方に突出した稜帯をもつものと、（第 21 図 6）のような角をもつものとがある。前者は、坏部上半が大きく外反し、下半が強く外傾している。器面調整は、稜帯外面に横ナデを施している他は、全て、内外面と



観　察　表

番号	出土層位	器　別	調　整		底　面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外　面	内　面						
1	表　土	土師器(椀)	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕				7.6	
2	〃	〃		〃	〃				8.8	
3	〃	〃		刷毛目	籾状圧痕				10.8	
4	〃	〃	ヘラミガキ		ヘラケズリ				7.6	
5	〃	土師器(高杯)	ヘラミガキ・横ナデ	ヘラミガキ						A
6	〃	〃	横ナデ・ヘラミガキ	横ナデ・ヘラミガキ						C
7	〃	〃	ヘラミガキ・ヘラケズリ	シボリ目・ナデ						Ia
8	〃	〃	ヘラミガキ	シボリ目・横ナデ						II
9	〃	〃	ヘラケズリ・横ナデ	ヘラミガキ・黒色処理・シボリ目						Ib
10	不　明	石　製　品								

第21図　表土および出土地点不明の遺物　(2)

もヘラミガキされている。後者はやや小形のもので、坏部上半は直線的に外傾して開くものである。器面調整は、内外面とも、横ナデの後ヘラミガキが施されている。

脚部には、柱状部がほぼ直線的に直立するもの（第21図8）と全体的にふくらみをもつもの（第21図7）、柱状部が短いもの（第21図9）とがある。器面調整は、外面には、ヘラミガキのもの（第21図8）、ヘラケズリのもの（第21図9）、ヘラケズリの後ヘラミガキのもの（第21図7）、内面には、いずれにも、ナデとシボリ目が観察される。（第21図9）は、坏部内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

石製品（第21図10）

不整形を呈し、下半部が欠損しているもので、径約5㎜の孔が表面から裏面へ穿たれている。裏面および側縁部には自然面を残しているが、表面の孔の周囲には擦痕が認められる。

Ⅳ．遺構と遺物に関する考察と問題点

１．遺物

(1)　出土土器の分類

出土土器には、弥生土器、土師器、須恵器があるが、弥生土器については前項で記載しており、また、須恵器甕は量的に少なく、細片であるので、末尾の破片集計表に一括してある。ここでは、土師器と須恵器坏・蓋についてのみ記述する。

〔土師器〕

土師器には、坏、甕、高坏、壺、甑があり、出土量の多い坏、甕、高坏、壺に関して器形、技法によって分類作業を行ないたい。なお、以下の分類は器形の比較的明確な図示遺物を対象としている。

坏　坏には製作に際してロクロを使用していないものと、使用しているものとがある。その内、前者は器形の特徴によって４類に分類される。

Ａ類　ロクロを使用せず、口縁部がくびれて外反するもの。

Ｂ類　ロクロを使用せず、体部外面に段が巡るもの。

Ｃ類　ロクロを使用せず、体部外面に沈線が巡るもの。

Ｄ類　ロクロを使用せず、体部外面に段、沈線をもたないもの。

Ｅ類　ロクロを使用しているもの。

以上の各類は、さらに、体部器形の特徴、器面調整の特徴などからいくつかに細分される。

〈坏Ａ類〉　製作に際してロクロを使用せず、口縁部がくびれて外反するものである。これらは全て内面に対応する稜をもつ。その内、体部上半が内弯するものをＡⅠ類、体部上半が直立するものをＡⅡ類、体部上半が外傾するものをＡⅢ類とする。

ＡⅠ類　口縁部がくびれて外反し、内面に稜がつき、体部上半が内弯するものである。口縁部のくびれおよび内面の稜は、体部上半が内弯することで、より顕著になっている。体部はふくらみをもち、最大径が体部上半に位置している。器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、体部内面にヘラミガキが施されている。

ＡⅡ類　口縁部がくびれて外反し、内面に稜がつき、体部上半が直立するものである。口縁部のくびれおよび内面の稜は、ＡⅠ類ほど明瞭ではない。体部下半はゆるやかな曲線で立ち上がり、上半が急に上を向き直立気味になっている。底部形態は平底のものである。器面調整はＡⅠ類と同様である。

ＡⅢ類　口縁部がくびれて外反し、内面に稜がつき、体部上半が外傾するものである。口縁部のくびれに比して、内面の稜が明瞭である。体部下半は丸味をもって立ち上がり、体部上半

に移行するにつれて外傾してゆくものである。底部形態には平底のものがある。器面調整は、口縁部内外面においてはＡⅠ、ＡⅡ類と同様に横ナデが施されているが、体部の調整においては、次の３種類がある。外面がヘラケズリ、内面がナデのもの、内外面ともナデのもの、内外面ともヘラミガキのものである。

〈坏Ｂ類〉　製作に際してロクロを使用せず、体部外面に段が巡るものである。内面に対応する段のあるものをＢⅠ類、内面に対応する段のないものをＢⅡ類とする。なお、ここで用いる「段」は、前項の事実記載において、屈折線として表現してきたものも包括した概念として使用する。

ＢⅠ類　体部外面に段が巡り、内面に対応する段をもつものである。底部形態は、全て丸底である。段の位置は、ほぼ体部中央にあるもの、体部下半にあるもの、体部下端にあるものなどがある。段から上の部分は口縁部に向かって、全て外傾するもので、内弯気味のもの、直立気味のものがある。器面調整は、外面では、段の上の部分が横ナデ、下の部分がヘラケズリされており、内面は、ヘラミガキ・黒色処理が施されている。内面のヘラミガキの方向は、横方向である。外面の調整の順序は、横ナデの後ヘラケズリである。

ＢⅡ類　体部外面に段が巡り、内面に対応する段等のないものである。底部形態には、丸底のものと平底風のものとがある。外面の段の位置は、体部下半にある。段から上の部分は口縁部に向かって、外傾するもので、内弯気味のものがある。器面調整は、内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されているが、外面では、段の上が横ナデ、下がヘラケズリのもの、段の上が横ナデの後ヘラケズリ、下がヘラケズリのもの、段の上が横ナデで、下に木葉痕の認められるものなどがある。この内、平底風を呈し、木葉痕の認められるものは、ＢⅠ類の中にヘラケズリ調整前の木葉痕が一部認められるものがあることから考えると、この坏は、ヘラケズリ調整を施す前段階のまま焼かれたものと思われる。内面のヘラケズリの方向と外面の調整の順序はＢⅠ類と同様である。

〈坏Ｃ類〉　製作に際してロクロを使用せず、体部外面に沈線の巡るものである。内面に沈線に対応する段をもつものをＣⅠ類､内面に沈線に対応する段等をもたないものをＣⅡ類とする。なお、ここで用いる「沈線」は、上端が２本、明瞭に観察されるものを言う。

ＣⅠ類　体部外面に沈線が巡り、内面に対応する段をもつものである。底部形態は丸底である。沈線の位置は、ほぼ体部中央に巡るものと体部下半に巡るものとがある。沈線から上の部分は、口縁部に向かって外傾するもので、内弯気味のものがある。器面調整は、外面では、沈線の上が横ナデ、下がヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。ヘラミガキの方向はＢ類と同様である。

ＣⅢ類　体部外面に沈線が巡り、内面に対応する段等をもたないものである。底部形態は丸

底である。沈線の位置は、ほぼ体部中央に巡るもので、沈線より上の部分は外傾している。器面調整は、外面では、沈線の上が横ナデで、下には明瞭な調整が認められず、底部がヘラケズリされている。内面には、ヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向はＣⅠ類と同様である。

〈坏Ｄ類〉　製作に際してロクロを使用せず、体部外面に段等をもたないものである。内面に段のあるものをＤⅠ類、内面に段・沈線等がなく、口縁部内面に稜の観察されるものをＤⅡ類とする。

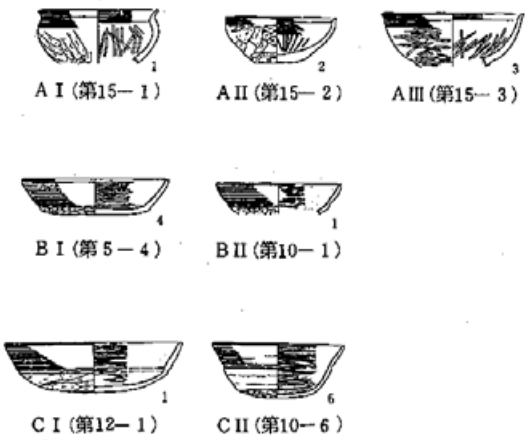
ＤⅠ類　体部外面に段・沈線等がなく、内面に段のあるものである。底部形態は平底風の丸底である。体部から口縁部に向かって外傾する。器面調整は、外面が口縁部から体部に横ナデ底部がヘラケズリであり、その調整順序は横ナデの後ヘラケズリである。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は、Ｂ、Ｃ類と同様である。

ＤⅡ類　体部外面に段、沈線等がなく、内面にも段のないものである。底部形態は丸底である。丸味をもつ底部から立ち上がり、口縁部に至るもので、口縁部内面に稜がみられる。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面が不明で内面が縦方向のヘラミガキである。体部下端から底部には刷毛目が施されている。

〈坏Ｅ類〉　製作に際してロクロを使用しているものである。底部は欠損している。体部は直線的に外傾し、口縁端部がやや外反している。器面調整は体部外面にはロクロ調整痕が明瞭に認められ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は、口縁部から体部が横方向、底部が放射状である。再調整として、体部下半に手持ちヘラケズリが施されているものもある。

土師器坏分類表

ロクロ不使用	A．口縁部がくびれて外反	Ⅰ．体部上半が内弯
		Ⅱ．体部上半が直立
		Ⅲ．体部上半が外傾
	B．体部外面に段	Ⅰ．内面にも段あり
		Ⅱ．内面には段なし
	C．体部外面に沈線	Ⅰ．内面には段あり
		Ⅱ．内面には段なし
	D．段・沈線なし	Ⅰ．内面には段あり
		Ⅱ．内面には段なし
ロクロ使用	E．直線的に外傾	○再調整あり ○再調整不明



甕　製作に際してロクロを使用していないものである。口径と器高の比率、最大径の位置によって次のように大別される。

A類　ロクロを使用しないもので、口径が器高より小さく、最大径が口縁部にあるもの。

B類　ロクロを使用しないもので、口径が器高より小さく、最大径が体部にあるもの。

C類　ロクロを使用しないもので、口径が器高より大きく、最大径が口縁部にあるもの。

D類　ロクロを使用しないもので、口径が器高より大きく、最大径が体部にあるもの。

〈甕A類〉　口径が器高より小さく、最大径の位置が口縁部にあるものである。体部の最大径が体部上端に位置し、頚部に段を有するもの（A1 類）と、体部の最大径が体部中央に位置し、頚部に段等の認められないもの（A2 類）とに細分される。

A1 類、A2 類とも口縁部は外傾するものが主体的であり、A1 類に比してA2 類の方に強く外傾するものが多い。このため、A2 類においても口縁部と体部との区別は比較的明瞭である。これらA類は、そのほとんどが形態的に長胴形の甕と言われているものに該当する。器面調整をみると、A1 類、A2 類とも口縁部内外に横ナデが施され、体部外面には縦方向の刷毛目、内面には横方向のヘラナデが施されている。ただ1 点のみ、体部外面に刷毛目の後に縦方向のヘラケズリを施し、内面に横方向の刷毛目が施されているものがA1 類にある。量的には、A1 類に相当するものがA類の主体を占めている。

〈甕B類〉　口径が器高より小さく、最大径の位置が体部にあるものである。体部の最大径は体部のほぼ中央に位置している。形態的に、長胴形（ＢⅠ類）と球形（ＢⅡ類）とに細分される。

ＢⅠ類、ＢⅡ類とも口縁部は全て外傾している。ＢⅠ類は、全てが頚部に段を有しており、ＢⅡ類は、1 点を除いて、他は全て頚部に段を有していない。器面調整はA類と同様である。量的には、ＢⅠ類の方がＢⅡ類よりは多い。さらに、このＢⅠ類は、上述のA1 類と量的に同数を示しており、このA1 類、ＢⅠ類が、甕として分類したものの中で、主体的位置を示めるものである。

〈甕C類〉　口径が器高より大きく、最大径の位置が口縁部にあるものである。頚部の段の有無によって、C1 類とC2 類とに細分される。

C1 類は、体部の最大径の位置が体部上端にあり、口縁部は外傾している。器面調整は、口縁部内外面が横ナデされており、体部外面には明瞭な調整が認められない。内面にはヘラナデが施されている。

C2 類は、体部での最大径の位置がほぼ体部中央にあり、口縁部は外傾している。器面調整は、外面においては、口縁部が横ナデで、体部が刷毛目のものと、口縁部が横ナデで、体部がヘラナデのものがあり、内面は、横ナデ・ヘラナデのものと、刷毛目・ヘラナデのものとがあ

る。本類は、鉢形に近似している。

これらC類は、甕に分類したものの中で量的に少ないものである。

〈甕D類〉　口径が器高より大きく、最大形の位置が体部にあるものである。体部の最大径は、ほぼ体部中央に位置している。口縁部が外反するもの（DⅠ類）と内弯するもの（DⅡ類）とに細分される。

DⅠ類は、頚部に段を有している。器面調整は、口縁部内外面においては横ナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデされている。1点のみであり、鉢形に類似したものである。

DⅡ類は、体部上半が内弯し、口縁部と体部とを区画するような段はない。器面調整は、外面が口縁部に横ナデ、体部に刷毛目、内面に横ナデが施されている。1 点のみであり、埦形に類似したものである。

これらD類は、量的に非常に少ないものである。

土師器甕分類表

	口径と器高	最大径の位置	体部最大径の位置	頚　部	口縁部
ロクロ不使用	口径＜器高	A．口縁部	○体部上端	1．段あり	外　傾
			○体部	2．段なし	
		B．体　部	Ⅰ．長胴形	○段あり	外　傾
			Ⅱ．球形	○段なし	
	口径＞器高	C．口縁部	○体部上端	1．段あり	外　傾
			○体部中央	2．段なし	
		D．体　部	○体部中央	○段あり	Ⅰ．外反
				○段なし	Ⅱ．内弯

高坏　高坏は個体数の割に、坏部と脚部とが接合して全体の器形の判明するものは皆無である。そのため、坏部と脚部の分類を別々に行なうことにしたい。

（坏部）　球部上半と下半の接合部の形態によって次のように大別される。

Ａ類　坏部上半と下半の接合部に稜帯がまわるもの。

Ｂ類　坏部上半と下半の接合部に段のつくもの。

Ｃ類　坏部上半と下半の接合部に角がつくもの。

〈坏部Ａ類〉　坏部上半と下半の接合部に稜帯がまわるものである。稜帯は、やや下方に突出している。坏部上半は強く外反し、下半には丸味をもって外傾するものと強く外傾するものとがある。器面調整は、外面では稜帯部分に横ナデが施されている他は、全面に縦方向のヘラミガキが施されていう。内面にもヘラミガキが施されている。このA類は、製作するときに、坏部上半と下半とを一応成形した後に、境の部分に粘土紐を貼り付けたものである。

〈坏部Ｂ類〉　坏部上半と下半の接合部に段のつくものである。坏部上半は欠損しているため不明であるが、坏部下半は強く外傾している。器面調整は、段の部分が横ナデで、他は内外面ともヘラミガキが施されている。このＢ類は、坏部下半の先端部内側に坏部上半を接着することによって、土下部下半の先端部側面が段として残されたものである。

〈坏部Ｃ類〉　坏部上半と下半の接合部に角のつくものである。Ａ～Ｃ類の中で、最も量の多いものである。坏部上半には、外反するものと直線的に外傾するものとがある。坏部下半は強く外傾している。器面調整は、内外面とも縦方向のヘラミガキが全面に施されている。このＣ類は、製作の際に坏部下半の先端部に坏部上半を接着しているもので、上半と下半の立ち上がり角度の違いによって角のついたものである。

（脚部）　脚部は柱状部と裾部とに分けられるが、出土した脚部の大部分は柱状部であるため、ここでは、柱状部を基準として分類する。柱状部の形態的特徴によって次のように大別される。

Ⅰ類　柱状部が直線的なもの。

Ⅱ類　柱状部がふくらみをもっているもの。

〈脚部Ⅰ類〉　柱状部が直線的なものである。柱状部の長さが、長いもの（ａ）と短いもの（ｂ）とに細分される。

Ⅰａ類は、直線的で、ほぼ直立するものと、直線的に次第に下方にゆくにしたがって、やや開いてゆくものとがある。器面調整は、外面が主として縦方向のヘラミガキで、内面には粘土紐巻上痕跡やシボリ目が観察され、部分的にナデが施されている。

Ⅰｂ類は、直線的で短く、強く開いた短い裾部のつくものである。器面調整は、柱状部では外面がヘラケズリで内面にシボリ目が観察される。裾部は内外面とも横ナデが施されている。また、部分的に残存している坏部内面をみると、ヘラミガキ・黒色処理が認められる。

〈脚部Ⅱ類〉　柱状部がふくらみをもっているものである。これには、全体的にふくらみのあるものと、柱状部下半にふくらみのあるものとがある。器面調整は、ほとんどが、Ⅰａ類と同様である。

壺　図化できたものは、口縁部の破片２点のみである。口縁部は外傾し、口縁端部においてやや直立気味に立ち上がるものである。器面調整は、内外面とも横ナデが施されている。大きさを比較すると、大形のもの（ＡⅠ類）と小形のもの（ＡⅡ類）とに分けられる。

須恵器

土師器に比べて、出土量が僅少であり、そのほとんどが小破片である。器形としては、坏・甕・蓋がある。破片点数としては、甕が多いようであるが、図化できたものは坏と蓋のみであるため、ここでは、坏・蓋を対象として分類を行なうことにしたい。

坏　図化できたものは２点のみである。体部外面に段の巡るものである。段の位置は体部下半にある。これらは、段の上の部分が、直立するもの（ＡⅠ類）と内弯気味に外傾するもの（ＡⅡ類）とに分けられる。

ＡⅠ類は、底部形態が平底を呈し、段の下から底部には回転ヘラケズリが施され、段の上の部分にはロクロ調整がなされている。

ＡⅡ類は、底部が欠損しており、全面にロクロ調整が施されている。

蓋　図化できたものは１点のみである。つまみの部分が欠損しているもので、天井部からやや丸味をもちながら口縁部に至り、口縁部は肥厚して、口縁端部に一条の沈線が巡っている。天井部から口縁部にかけてロクロ調整痕が明瞭である。

第２表　図示土器集計表

	土師器																										須恵器	
	坏									甕								高坏 坏部			高坏 脚部			壺		坏	
	A1	AⅡ	AⅢ	BⅠ	BⅡ	CⅠ	CⅡ	DⅠ	DⅡ	A1	A2	BⅠ	BⅡ	C1	C2	DⅠ	DⅡ	A	B	C	Ia	Ib	Ⅱ	AⅠ	AⅡ	AⅠ	AⅡ
1　住				5(1)						3(1)		4(1)			(1)	(1)								(1)	(1)	1	1
2　住				4	1(2)	(1)	1			1(1)	2	2	1(1)	(1)	1(1)		1										
3　住				(1)				(1)					(1)														
第２溝	(1)	(1)	(3)															(1)	(1)	(3)	(5)		(10)				
溝状落ち込み				(1)						(1)	(2)																
表土				(2)				(1)	(1)	(2)			(1)					(1)		(1)	(1)	(1)	(1)				

○（　）は遺構伴わない遺物

(2)　出土土器の組み合せとその年代

出土土器の内、土師器坏・甕・高坏・壺と須恵器坏に関して、前項のように分類され、土師

器坏が９種類、甕が８種類、高坏が坏部・脚部とも各々3 種類、壺が２種類、須恵器坏が２種類に細分できた。これらの内、各住居跡単位において第２表のような共伴関係がみられたものに関して、各住居跡間に共通する土器をよりどころとして、組み合せ関係を検討してゆく。

土師器坏には、製作に際してロクロを使用していないもの（A～D類）と使用しているもの（E類）とがある。この内、住居跡単位において共伴関係の認められるＢ・Ｃ類に関してみると、第１号住居跡ではＢⅠ類のみがまとまって出土しており、また、第２号住居跡においてはＢⅠ、ＢⅡ、ＣⅡ類が共伴している。このように、ＢⅠ類は、第1、2 号住居跡に共通して出土しており、さらに、ＢⅠ類は、第２号住居跡において、ＢⅡ、ＣⅡ類と共伴関係が認められることから、ＢⅠ、ＢⅡ、ＣⅡ類は、全て、組み合せ関係が成立するとみることができる。このことから、ＢⅠ、ＢⅡ、ＣⅡ類は、１つの群としてまとめることが可能である。

土師器甕では、製作に際してロクロを使用していないもの（A～D類）と使用しているものとがあり、後者は破片であるため分類基準からは除外してある。ロクロ不使用の甕の共伴関係をみると、第１号住居跡では、A1、ＢⅠ類が共伴し、第２号住居跡では、A1、A2、ＢⅠ、ＢⅡ、C2、ＤⅡ類が共伴している。このように、A1、ＢⅠ類が第1、2 号住居跡で共通して出土していることから、A1、A2、ＢⅠ、ＢⅡ、C2、ＤⅡ類は組み合せ関係が成立するとみることができる。このことから、ロクロ不使用の甕の内、A1、A2、ＢⅠ、ＢⅡ、C2、ＤⅡ類は、1 つの群としてまとめることができる。

このように、坏・甕に関して、各住居跡間での組み合せ関係から、各々1 つの群としてまとめることができた。さらに、これらの坏と甕は、第1、2 号住居跡において共伴関係が認められることから、これらは、１つのセットとして１群に包括することができる。また、第１号住居跡において、共伴関係の認められる須恵器坏ＡⅠ、ＡⅡ類も、この群に伴うものと考えられる。

以上のように、共伴関係の認められるものについては１群にまとめることができたが、その他の、遺構に伴うような出土状態でないために共伴関係の不明な土師器に関しては、その形態

第３表　出土土器組み合せ表

	土師器					須恵器
	坏	甕	高坏 坏部	高坏 脚部	壺	坏
(第１群)	ＡⅠ、ＡⅡ、ＡⅢ（ロクロ不使用）	(底部片のみ)	A、B、C	Ⅰa、Ⅱ	ＡⅠ、ＡⅡ	
第２群	ＢⅠ、ＢⅡ、ＣⅡ（ロクロ不使用）	A１、A２、ＢⅠ、ＢⅡ、C２、ＤⅡ				ＡⅠ、ＡⅡ
(第３群)	E（ロクロ使用）	(ロクロ使用の破片のみ)				
その他	ＣⅠ、ＤⅠ、ＤⅡ（ロクロ不使用）	C１、ＤⅠ		Ⅰb		

的、技法的特徴から、次のように、いくつかの型式論的グルーピングが可能である。
○坏ＡⅠ、ＡⅡ、AⅢ類、高坏坏部A～C類、脚部Ⅰａ、Ⅱ類は、全て、第2溝内堆積土出土であり、各々、形態的、技法的に型式的まとまりをもつ1群の土器として捉えることが可能なもので、これには、表土出土のＤⅡ類と第 1 号住居跡堆積土出土の壺ＡⅠ、ＡⅡ類も含み、1つの群として把握されえるものである。
○坏Ｅ類はロクロ使用という技法的特徴から、型式的把握の可能なものであり、これには、表土出土のロクロ使用の甕の破片も含み、1つの群として捉えられる。
○坏ＣⅠ・ＤⅠ類、甕C1・ＤⅠ類、高坏Ⅰｂ類、須恵器蓋は、住居跡内堆積土と表土からの出土であり、その形態的・技法的特徴から、前述のいずれかの群に伴うものと考えられるが、1つの群として把握されえないものである。

以上の、共伴関係の認められる1群と型式論的グルーピングの可能な2群の各器種間の組み合せ関係をまとめると、第3表のようになる。

これら3群の土師器を、現在の東北地方南部における、坏の変遷を基礎とした土師器の型式編年体系の中で位置付けると、第1群土器の土師器坏は南小泉式、第2群土器の土師器坏は栗囲式、第3群土器は表杉ノ入式に比定される。また、第2群土器の土師器甕についても、その共伴関係と組み合せ関係から同型式に属するものと考えることができる。さらに、須恵器坏に関しても、その共伴関係から、土師器と同年代のものと考えられる。

次に、群が設定できなかった土師器について、以下に、その年代を検討してみたい。
○土師器坏ＣⅠ類は、五輪Ｃ遺跡（小野寺：1979）遺物包含層出土土器に1点類例があり、栗囲式に比定されている。本例も、同型式に属するものと考えられる。
○土師器坏ＤⅠ類は、栗遺跡（仙台市教委・東北学院大考古研：1979）第1号住居跡床面出土土器に類例があり、共伴している土師器坏をみると、栗囲式に属するものと考えられる。
○甕C1・ＤⅠ類は、類例に乏しいものであるが、頚部に明確な段を有するものは、栗囲式～国分寺下層式に特徴的なものであり、本遺跡から国分寺下層式に比定される土師器坏の出土がないことを考慮すると、ほぼ栗囲式に属するものと考えてよいであろう。
○高坏Ⅰｂ類は、形態的・技法的特徴から、栗囲式～国分寺下層式に属するものと考えられるが、甕C1・ＤⅠ類と同様に、国分寺下層式の坏がないことから、ほぼ、栗囲式に属するものと考えたい。
○須恵器蓋は、類例が見られず、所属時期は不明である。

(3)　出土土器に関する問題点

〔第1群土器について〕

第1群土器は、主として、第2溝内堆積土からの出土である。共伴関係は不明であるが、形

態的・技法的特徴から１型式としてのまとまりをもつものと考えられる。本群を構成する器種には、土師器坏、高坏、壺、甕があるが、特に、高坏脚部の出土量が多い。前項の分類の中で、本群に属するものには、坏では、ＡＩ、ＡⅡ、ＡⅢ、ＤⅡ類、高坏では、坏部のＡ～Ｃ類、脚部のＩａ、Ⅱ類、壺ではＡＩ、ＡⅡ類がある。これら、第１群土器は、南小泉式と考えることができる。

南小泉式は、氏家和典氏によって、南小泉Ⅱ式（氏家：1957）として型式設定されて以来、小笠原好彦・阿部義平両氏（小笠原・阿部：1968）、白鳥良一・加藤道男両氏（白鳥・加藤：1974）等によって検討が加えられて来たが、以下で、これら、先学諸氏による成果を基に、南小泉式の形態的・技法的特徴を整理してみる。

〇形態的には、坏では、口縁部にくびれをもち内側に稜をもつもの、体部から口縁部にかけて全体的に丸味をもって立ち上がるもの、体部が外傾し口縁部で直立するものなどがあり、丸底のものと平底のものとがある。高坏では、坏部が、口縁部が外反し坏底部に稜帯がめぐるもの、口縁部が外傾し坏底部が段をもって屈曲するもの、口縁部が外傾し坏底部が単純に屈曲するもの、坏底部から口縁部にかけて屈曲をもたず内弯ないし外傾気味にゆるやかに立ち上がるもの、脚部が、柱状部が平行に直立し平坦な裾部のつくもの、柱状部が円錐台状になるもの、柱状部が平行に直立し裾部の下面に段がつくもの、柱状部が中膨みのものなどがある。壺では、単純口縁で口縁部が外傾し、頸部が強くすぼまるものと弱くすぼまるものがある。

〇技法的には、坏は、口縁部内外面に横ナデ、体部内外面にヘラミガキを施すものが主体的で、稀に体部外面にヘラケズリを施したものがある。高坏は、坏部、脚部とも外面全体にヘラミガキを施し、坏部内面にもヘラミガキが施されているものが一般的で、一部、口縁部や稜帯、段の部分に横ナデが施されているものもある。壺の口縁部は、内外面とも横ナデが施されているものが多い。

以上のような、南小泉式の基本的特徴と本群の土器を比較すると、坏、高坏、壺とも、形態的・技法的に非常に近似していることが知られる。

このような、形態的・技法的特徴をもち、本群に類似した器種の組み合せが判明している土師器は、県内では、仙台市南小泉遺跡、岩切鴻ノ巣遺跡、多賀城市新田遺跡（以上、前掲本）、古川市引出遺跡（氏家・大場：1950）、大河原町台の山遺跡（千葉・阿部：1980）などから出土したものが知られている。特に、岩切鴻ノ巣遺跡出土の第Ⅱ群土器は内容も豊富で、本群の土器全てを包括する内容をもつものである。これらの遺跡から出土した土師器も、現時点においては、いずれも、南小泉式として捉えられているもので、本群も、日常の生活用具としてのセット関係が明確ではないものの、ほぼ南小泉式の範疇に属するものとして理解することが妥当であろう。

〔第２群土器について〕

第２群土器は、第１・２号住居跡床面出土土器である。本群を構成する器種には、土師器坏、甕、須恵器坏があり、前項の分類の中の、土師器坏ＢⅠ、ＢⅡ、ＣⅡ類、甕A1、A2、ＢⅠ、ＢⅡ、C2、ＤⅡ類、須恵器坏ＡⅠ、ＡⅡ類がそれに該当する。

以下、本群の基本的特徴を整理する。

○土師器坏－ロクロ不使用で、底部形態が丸底のものである。体部外面に段が巡り、内面に対応する段のあるもの（ＢⅠ類）、段のないもの（ＢⅡ類）、体部外面に沈線が巡り、内面に段のないもの（ＣⅡ類）がある。内面の段は、さほど明瞭ではなく、屈折線となっているものもある。段・沈線より上の部分は、全て外傾するものであるが、強く外傾するものはなく、内弯気味なもの、直立気味なもの、直線的なものがあり、その内、内弯気味に外傾するものが多い。器面調整は、外面では、段・沈線より上に横ナデ、下にヘラケズリが施され、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。量的には、ＢⅠ類が主体を占めている。

○土師器甕－ロクロ不使用のもので、長胴形のもの（A1、A2、ＢⅠ類）、球形のもの（ＢⅡ類）、鉢形のもの（C2 類）、埦形のもの（ＤⅡ類）とがある。量的には、長胴形を呈するものが主体を占めている。その内でも、A1 類とＢⅠ類が最も多い。長胴形の甕の多くは、頚部に段を有しており、口縁部は、外傾もしくは外反している。体部の最大径は、体部中央もしくは体部上半に位置しているものが多い。器面調整は、口縁部内外に横ナデ、体部外面に刷毛目、内面にヘラナデを施しているものが主体を成している。

○須恵器坏－体部外面に段を有し、段より上の部分が直立するもの（ＡⅠ類）と内弯気味に外傾するもの（ＡⅡ類）とがある。ＡⅠ類は、平底を呈し、段の下から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。ＡⅡ類は、底部が欠損しており、全面にロクロ調整が施されている。これは、坏として分類したが、蓋の可能性も否定できない。

以上のような土器の組み合せによって本群が成立しているが、その内、本群の土師器は栗囲式と考えることができる。しかし、それは、所謂栗囲式と若干様相を異にしているようであるため、以下で、先学による研究成果を踏まえながら、その類似点と相違点を明確にすることによって、本群の土師器の編年的位置付けを行ないたい。

○坏についてみると、所謂栗囲式の形態的特徴として、型式設定者の氏家氏は次の２点を挙げている。(1)（住社式に比して）「口縁径の割合に器高が小である」こと。(2)「口縁部と体部（底部）との接線部分において、稜線（段）もしくは括れ部の形成が顕著であり、土器内面でも口縁部と体部とを区別することが可能である」こと。（氏家：1957、1961）の２点である。更に同氏は、栗囲式の細分案として、栗囲式Ⅱ類を提唱し（氏家：1968）、その特徴を「体部と底部の接点において外側では稜線を、内側ではその部分で曲折する特殊な変化を示すもの」とまとめ

ている。また、近年、栗囲式から国分寺下層式の坏について整理された、桑原滋郎氏は、栗囲式の形態的・技法的特徴として、次のような点を挙げている。形態的特徴としては、(1)割合深いこと。(2)体部が外反すること。(3)丸味をもった底部をもつこと。(4)体部と底部の境は段あるいは稜となっていること。技法的特徴としては、体部外面にヨコナデ、底部にヘラケズリを施し、内面はヘラミガキ・黒色処理されていること。（桑原：1976）とされている。

さて、以上のような、栗囲式に関する基本的立脚点に立って、次に、本群の土師器坏を捉えかえしてみたい。

まず、本群の土師器坏の中で、量的に主体を占めるＢⅠ類についてみると、体部内外面の段と器面調整の点において、所謂栗囲式としての基本的特徴をもつものであることがわかる。しかし、口縁部が外反もしくは強く外傾していなく、内面の段も明瞭でないことは、従来、一般的に認識されていた栗囲式とは異なるものであると言わざるをえない。栗囲式のタイプサイトである仙台市栗遺跡出土の坏の多くは、桑原氏の整理された、形態的・技法的特徴をもつものが主体を占めており（仙台市教委・東北学院大考古研：1979）、本類とは様相を異にしている。あえて、本類の類似資料を挙げるとすれば、形態的には、栗囲式Ⅱ類を設定する資料となった仙台市善応寺横穴古墳出土の土師器坏に求めることができるであろう。

一方、量的に少ないＢⅡ・ＣⅡ類に関してみると、これらは、内面に段のない点において、形態的には、所謂栗囲式とされているものとは一線を画するものであるが、器面調整はＢⅠ類と同様である。ＢⅡ類は形態的には、氏家氏によって設定された国分寺下層式（氏家：1967）や、桑原氏による砂押川遺跡出土の坏Ａ類（桑原：1976）に非常に近似しているものであり、また、ＣⅡ類も、形態的には、栗原郡志波姫町糠塚遺跡出土の国分寺下層式とされている坏ＡⅡ類（小井川・手塚：1978）に類似しているものである。しかし、現時点において、この国分寺下層式の範疇に属するものと理解されている坏には、体部外面の器面調整として、ヘラミガキ（稀にヘラケズリ）が施されていることを主たる特徴としており（岡田・桑原：1974、桑原：1976、小井川・手塚：1978 他）、ＢⅡ・ＣⅡ類とは器面調整上の相違が認められる。

このように、各々の類の坏を取り上げると、各種の異なった形態的要素をもっているが、これらは、その出土状態から、1 つのセットとして把握することができるものであり、1 型式内のバラエティーとして理解することができる。このことから、本群の土師器坏は、量的に主体を占めるＢⅠ類から、ほぼ栗囲式の範疇に属するものであり、また、次型式の国分寺下層式に形態的類似性をもつものを含むことから考えて、栗囲式の中でも新しい時期に位置するものと捉えることが妥当であろう。

○甕についてみると、氏家氏の挙げている形態的特徴は、(1)「長胴の器形に外反せる単純な口縁を有し」ていること。(2)「体部における最大径は、中央部乃至肩部にある」こと。(3)「底部

には、多くの場合、木葉痕が附されている」ことであり、本群の土師器甕は、以上のような、栗囲式の特徴と、基本的に一致している。このことは、豊富な内容を有する栗遺跡出土の甕をみても、一般的に認められる傾向である。また、栗遺跡出土の甕の器面調整をみると、長胴形を呈する甕の体部外面には、ほとんどのものに、刷毛目が施されており、これも本群の甕と近似している。このような傾向は、国分寺下層式とされる糠塚遺跡出土の甕にヘラケズリや軽いケズリが多いことと対象的であり、本群の土師器甕が栗囲式に属するものであることを傍証するものである。

○須恵器坏についてみると、形態的には、福島県郡山市麓山窯跡Ｂ窯出土のものに近似している(梅宮：1960、木本：1975)。木本氏は、この麓山窯跡出土の須恵器坏に関して論究され、東北地方における窯跡出土の須恵器坏との形態的・技法的特徴の比較検討から推定される年代として、「8 世紀初頭を下らないもの」（木本：1975）とおさえている。

さて、県内で本例と類似している資料は、桃生郡矢本町矢本横穴古墳群 12 号墳の羨道出土のもの（三宅：1973）、岩沼市長谷寺横穴古墳群 3 号墳の羨道出土のもの（佐藤：1968）があり、それぞれ、栗囲式から国分寺下層式頃の土師器坏を伴って出土しているようである。また、集落跡出土の例としては、名取市清水遺跡第 48 号住居跡出土のものが幾分近似しており、この例は、栗囲式の土師器坏と共伴している（宮教委：1976）。

以上のような類例の整理から、本群の須恵器坏は、ほぼ栗囲式と同年代のものと考えられ、このことから、本群の絶対年代として、9 世紀初頭頃を用意しておきたい。

〔第 3 群土器について〕

第 3 群土器の土師器は、表土からの出土であり、共伴関係は不明であるが、その技法的特徴から、表杉ノ入式に比定される。表杉ノ入式の土師器は、製作に際してロクロを使用していることを特徴としており、本遺跡出土の図示遺物では、坏Ｅ類がこれに相当する。また、破片の中には、ロクロ使用の土師器甕が数点あり、これも、第 3 群土器に属するものである。このように、表杉ノ入式はロクロ技術の導入を特徴としているが、近年の調査・研究の進展によって、表杉ノ入式には、ロクロ不使用の甕も依然として存続していることが明確になっている。このことから、本遺跡の表土や堆積土出土の甕の中には、本群に包括されえる可能性をもつものも存在すると考えなければならない。さらに、破片の中には、赤焼土器が少量認められるが、この赤焼土器は、多くの遺跡でロクロ使用の土師器と伴って出土しており、本遺跡においても、本群に伴うものとして理解しておきたい。その他、須恵器坏・甕の破片が若干出土しているが、須恵器の住居跡からの出土の増加が国分寺下層式以降に顕著であることを考えると、これらの須恵器のほとんども本群に伴うものと考えられる。

(4)　土器以外の遺物について

土器以外の遺物としては、砥石、鉄製刀子、石製模造品、石製品がある。

（ｉ）　砥石

第 1・2 号住居跡の床面より各々1 点出土している。これらは、3～4 面の磨面が認められるものである。その所属時期は、共伴した土師器から、栗囲式期のものと考えられる。古墳時代以降、鉄製農工具の普及に伴って、住居跡からの出土例の多いものである。

（ⅱ）　鉄製刀子

第 2 号住居跡床面より 1 点出土している。身の部分の後半分のみが残存していたものである。共伴した土師器から、その所属時期は、栗囲式期であると考えられる。鉄製刀子は武器や工具などとして活用されたものであるが、その出土例には、古墳からの副葬品としてのものと住居跡出土のものとがある。本遺跡のような住居跡からの出土は、当時の集落内における鉄製品の所有形態等を把握する意味で貴重なものであるが、今回の調査では、集落の全貌を捉えることができなかったため、この点に触れることはできない。

（ⅲ）　石製模造品

第 2 号住居跡の堆積土中より剣形品が 2 点出土した。その所属時期は、共伴関係が不明であるが、従来の研究によって、石製模造品が古墳時代前期から中期に特徴的な遺物であるとされていることを考慮すると、本遺跡出土の 3 群の土器中、第 1 群土器に伴うものと考えられることから、ほぼ、南小泉式期の所産とすることが妥当であろう。石製模造品は、祭祀的性格を具備した遺物と考えられており、その出土遺跡には、古墳・祭祀遺跡・集落跡の三形態がある。本遺跡出土の石製模造品は、該期の住居跡が検出されなかったものの、集落跡からの出土形態に属するものと考えてよいであろう。しかし、集落内祭祀のあり方は、今回の調査では追求することができなかった。なお、県内における、石製模造品の出土例は、先の仙台市岩切鴻ノ巣遺跡の報文中での整理（白鳥・加藤：1974）以後のものとしては、名取市宮下遺跡（宮教委：1975）、亘理郡亘理町宮前遺跡（宮教委：1975）、柴田郡大河原町台の山遺跡（千葉・阿部：1980）、宮城郡利府町八幡崎Ｂ遺跡（小井川・森：1980）などが挙げられ、これらも、ほぼ、南小泉式期の所産と考えられている。

（ⅳ）　石製品

ここで、石製品として記述するものは、第 2 号住居跡床面出土の磨面のある珪化木、同住居跡堆積土出土の側縁に深い擦痕のある石製品、表土出土の磨面と小孔を有する石製品である。この内、珪化木は、その共伴する土師器から、栗囲式期のものと考えられるが、他の所属時期は不明である。また、これらの石製品の用途・機能に関しては不明と言わざるをえない。ただ、側縁に深い擦痕のある石製品は、桃生郡鳴瀬町の里浜貝塚の発掘調査（東北歴史資料館主体：

1979 年 9 月調査）において、縄文時代晩期中葉の層より出土した石製品と類似している。調査者（藤沼・岡村両氏）は、この石製品の用途として、骨角器を製作する過程での整形段階に使用したものと考えておられ、本遺跡出土の類似石製品に関しても、同石製品の近くから出土した石製模造品とセットとして考えると、同石製品は石製模造品の整形に関与した遺物として理解することが可能ではないかとの御教示を頂いた。ともあれ、今後の類似資料の増加と検討によって結論さるべきものであろう。

2. 遺構

(1) 竪穴住居跡の形態・構造とその年代

今回の調査で検出された住居跡は 3 軒である。これらの住居跡について、その形態的特徴、廃絶後の状態等を整理してみたい。

〔平面形〕 3 軒とも、基本的に方形を基調としている。第 1・2 号住居跡は隅が角ばっており、第 3 号住居跡は丸味を帯びている。

〔規　模〕 第 2 号住居跡(6.5m×5.7m)以外のものは、南辺部が消失しているため不明である。残存辺から推定した規模を比較すると、大形のもの（第 1・2 号住居跡）と小形のもの（第 3 号住居跡）とがある。

〔　壁　〕 壁は、全て地山を壁としており、やや外傾気味に立ち上がる。北辺での残存壁高は約 50 ㎝～70 ㎝である。

〔床　面〕 床面は、全て地山を床としているが、第 2 号住居跡では周辺に軟弱な部分も認められ、住居跡掘り方に粘土を貼って貼床としている可能性もある。

〔柱　穴〕 第 3 号住居跡は南半部を消失しているため明確ではないが、ほぼ、4 本柱を基調にしている。第 1・2 号住居跡では、対角線上に位置している。

〔周　溝〕 周溝は、消失している部分を除き、住居壁に沿って 1 本まわっている。第 1・2 号住居跡では、カマド燃焼部の下にも認められた。

〔カマド〕 第 1 号住居跡の第 2 カマドのみ西辺に位置しており、他は全て北辺に位置している。燃焼部の構築方法には、粘土構築によるもの（第 1・2 号住居跡）と地山削り出しによるもの（第 3 号住居跡）とがある。煙道部は、いずれも、住居外に伸びている。特に、第 3 号住居跡は保存が良好で、地山掘り抜きの形態が認められた。煙道底面は、水平なもの（第 1・3 号住居跡）と先端に向かってやや高くなるもの（第 2 号住居跡）とがあり、煙道部先端には、煙出しピットを有するもの（第 1・3 号住居跡）と有しないもの（第 2 号住居跡）とがある。

〔その他の施設〕 第 1 号住居跡の第 2 カマド北側に土師器甕の上半部が埋設されていた。

〔廃絶後の状態〕 第 1・3 号住居跡の堆積土層の形態は将棋倒し状を呈し、自然堆積層と考えられる。第 2 号住居跡は堆積土層が水平層であり、人為的堆積状態を示しているが、その出

土遺物には第1～3群の全ての土器を含んでいることから、住居廃絶後に人為的に埋められたものではなく、自然堆積層と考えられる。土色・土性が似ているため細分することが困難だったものと理解される。

〔住居跡の年代〕

各住居跡の床面およびカマドからの出土土器によって、住居跡の年代を推定すると、第1・2号住居跡は、栗囲式期に属するものと考えられる。しかし、第1・2号住居跡は棟を接する距離にあり、同時に存在していたものとは考えにくい。このことを、両住居跡に伴う土師器坏に関してみると、第1号住居跡では全てＢⅠ類で、第2号住居跡では主体となるＢⅠ類にＢⅡ、ＣⅡ類という形態的に新しい要素をもつものが共伴していることから考えると、第1号住居跡より第2号住居跡の方が新しいものと考えてよいであろう。

第3号住居跡は、遺構に伴う遺物がないため、正確な所属時期は不明であるが、住居廃絶後の堆積土出土土器が栗囲式に比定されるものであることから考えると、本住居跡の年代も、ほぼ、栗囲式期に属するものとして考えることが妥当であろう。

⑵　溝の性格と年代

（ⅰ）　第1溝

南北にのびた溝で、出土遺物はない。性格不明の後世の溝である。

（ⅱ）　第2溝

調査区内での平面形は「L」字状を呈し、規模は、東西 15.5m、南北 17.5mで、上端幅が約90～150㎝、底面幅が約40～80㎝、深さが約50～100㎝である。底面は平坦で、壁は、ゆるやかに立ち上がっている。この溝からの出土遺物は、全て堆積土中からの出土で、底面からの出土はない。堆積土出土の土器は、全て第1群土器（南小泉式）である。このことから考えると、この溝は、南小泉式期のうちに埋まり切ったものであると言うことができる。

この溝の性格については、調査時に、方形周溝墓を想定したこともあったが、その主体部等の施設が検出されなかったこともあって、この説は放棄された。調査者の藤沼氏は、概報において次のような指摘をしている。つまり、本遺跡の立地している台地平坦部の西側の部分では、南小泉式土器の破片や石製模造品が発見されていることから、この台地西部に南小泉式期の集落があって、この溝はそれを区画する溝の一部ではないかということである。この指摘は、現時点では検証不可能であり、本遺跡の全体像把握としての今後の課題であろう。なお、県内で集落を区画するような溝は、明確なものとしては、遠田郡小牛田町山前遺跡（古墳時代前期）（小牛田町教委：1976）があり、可能性のあるものとしては、古川市留沼遺跡（古墳時代前期）（宮教委：1976、三宅：1979）がある。近県では、福島県安達郡大玉村間尺（破橋）遺跡（古墳時代前半）（大玉村教委：1975）で、「コ」の字状の溝が確認されている。

(3)　溝状落ち込みとその年代

第3号住居跡の北西部で検出されたもので、長さが約4.5m、幅が約85㎝、深さが約7～35㎝である。堆積土は自然堆積か人為的堆積かは不明である。この溝状落ち込みに伴う遺物はないが、堆積土中から出土した土師器は、全て第2群土器（栗囲式）に比定されるものであり、本遺構の所属時期も、ほぼ、栗囲式期頃と考えることができるであろう。本遺構の性格は不明である。

(4)　石組炉とその年代

径約60㎝の円形の石組炉が第2溝内堆積土上面に一部重複して構築されていた。この石組炉に伴う遺物はなく、その所属時期は、第2溝との重複関係から、第2溝が埋まり切った南小泉式期以後のものとして理解されえることに留まる。また、この石組炉の性格等については、それを傍証する資料がないため不明である。

(5)　墓壙とその年代

第3号住居跡の床面で確認されたもので、平面形は径74㎝の円形を呈している。この墓壙は平面形の形態から、棺桶を埋納するための掘り方と考えられる。出土遺物には、小形手捏ね土器1点と古銭7枚があり、古銭は死者を葬る際の六道銭と考えられる。これらの古銭から、この墓壙の年代を推定してみたい。皇宋通宝、元祐通宝、紹聖元宝は北宋からの渡来銭で、日本国内で貨幣の鋳造を停止した中世に広く流通したものであり、平安通宝は室町時代末から江戸時代の初め頃まで長崎地方で鋳造された私鋳銭と言われている。このことから、この墓壙の時期は、最も新しい貨幣である平安通宝が流通していた頃か、それ以後の時期のものと考えられる。ほぼ、近世の墓壙として捉えることができるであろう。

3. 遺跡の構成と今後の問題点

塩沢北遺跡は、蔵王町と村田町との境を画する愛宕山丘陵の一部が西に突き出た舌状台地上に立地している。今回の調査区域は、台地頂上部平坦面の東側半分と南斜面の部分である。

弥生時代

弥生時代の遺物としては、円田式土器と天王山式土器が表土中より出土している。しかし、該期の遺構は確認できなかった。円田式土器は弥生時代中期後葉の土器であり、東北地方南部において、水稲農耕が定着化してきたと考えられている時期のものである。このことは、本遺跡の立地している台地を、最初に生活の場とした人々は、稲作を生業とした人々であり、その後、天王山式土器の出土から弥生時代後期においても、人々の生活の舞台となっていたことが知られる。

古墳時代

古墳時代の遺物としては、古墳時代中期の南小泉式土器と石製模造品、後期の栗囲式土器と

砥石・鉄製刀子が出土している。ほぼ、南小泉式期の遺構として考えられるものには、該期に埋まり切った第２溝が、栗囲式期の遺構としては、竪穴住居跡３軒と溝状落ち込み１基が検出された。

南小泉式土器の分布は、特に台地西半部に密であり、第２溝は、この台地西半部を区画するような形で検出された。今回の調査では、該期の住居跡は確認されなかったため、該期の住居跡群と第２溝との関係は、今後の課題として残された。また、石製模造品による集落内祭祀のあり方についても、その出土状態が良好でないため不明であった。

栗囲式期の住居跡は、2 軒が台地平坦面に位置し、1 軒が南斜面に位置していた。今回の調査では、該期の集落の全体像を把握するまでには至らなかった。しかし、該期の住居跡は、仙台市栗遺跡の他、類例に乏しい。その意味では、貴重な一資料を提示することになるであろう。

以上のような、古墳時代の遺物・遺構から、この台地上には、古墳時代中期という東北地方南部において飛躍的に古墳が増加し、大形化した時期に、この地で人々が生活し、また、古墳時代後期という群集墳や横穴古墳が盛行する東北地方の律令体制下前夜に、ここで生きていた人々の生活の一端を知らせてくれるものである。

平安時代

該期の遺構は検出されなかったが、表土中より表杉ノ入式土器の出土があった。律令体制下に、この地で何らかの活動をしていたことが知られる。

近世

墓壙とその副葬品が出土した。1 基だけであるが、この周辺で生活していた人の墓であろうか。

Ⅴ．ま　と　め

1. 塩沢北遺跡は、愛宕山丘陵の一部が西へ突出した舌状台地に立地している。
2. 本遺跡は、弥生時代(中・後期)、古墳時代(中・後期)、平安時代、近世の複合遺跡である。
3. 出土遺物には、弥生土器(円田式・天王山式)、土師器(南小泉式・栗囲式・表杉ノ入式)、須恵器、赤焼土器、小形手捏ね土器、石製模造品、砥石、鉄製刀子、不明石製品がある。
4. 検出された遺構は、古墳時代中期の溝１本、古墳時代後期の竪穴住居跡３軒、溝状落ち込み１基、近世の墓壙１基、時期不明の石組炉１基、溝１本である。

引用・参考文献（年代順）

氏家　和典（1950）：「宮城県高倉村引田出土の土師器」『歴史』第8輯
大場　恒一
佐藤　宏一（1968）：「宮城県岩沼市長谷寺横穴古墳群」『仙台湾周辺の考古学的研究』
小笹原好彦
坪井　清足（1953）：「福島県天王山遺跡の弥生式土器」『史林』第36巻1号
氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
伊東　信雄（1960）：「古代史」『宮城県史』第1巻
梅宮　　茂（1960）：「郡山市麓山窯跡調査報告」『福島県文化財調査報告書』第8集
氏家　和典（1961）：「土器」『陸奥国分寺跡』所収
氏家　和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
氏家　和典（1968）：「仙台市燕沢善応寺横穴古墳調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第3集
阿部　義平（1968）：「宮城県新田遺跡の土師器」『考古学雑誌』第54巻2号
白高郷土研（1970）：「斎川流域および北無双作遺跡の出土遺物」『白石高校郷土研究誌』第15号
藤沼　邦彦（1971）：「塩沢北遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集
藤沼　邦彦（1971）：「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集
三宅　宗議（1973）：「古代」『矢本町史』1
白鳥　良一（1974）：「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅰ　宮城県文化財調査報告書第35集
加藤　道男
岡田　茂弘（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』Ⅰ
桑原　滋郎
宮城県教委（1974）：「宮前遺跡－亘理町における古代集落跡の発掘調査概要」『宮城県文化財調査報告書』第38集
木本　元治（1975）：「郡山市麓山瓦窯出土の須恵器」『しのぶ考古』5
宮城県教委（1975）：「清水遺跡－第3次現地説明会資料」
名取市教委（1975）：「宮下遺跡－名取市宮下における古代集落跡の発掘調査概報」『名取市文化財調査報告書』第1集
大玉村教委（1975）：「間尺（破橋）遺跡発掘調査報告書」
桑原　滋郎（1976）：「東北北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について」『考古学雑誌』第61巻4号
小牛田町教委（1976）：「山前遺跡」
宮城県教委（1976）：「留沼遺跡－宮城県文化財発掘調査略報(昭和50年度)」『宮城県文化財調査報告書』第42集
宮城県教委（1976）：『高清水町観音沢遺跡現地説明会資料』
白　石　市（1976）：『白石市史・別巻』考古資料篇
小井川和夫（1978）：「糠塚遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第53集
手塚　　均

白石市教委（1978）：「観音沢遺跡調査報告書」『白石市文化財調査報告書』第18集

仙台市教委（1979）：「栗遺跡発掘調査報告書：『仙台市文化財調査報告書』第14集

東北学院大
考　古　研

三宅　宗議（1979）：「古墳時代」『郷土資料（考古）』古川市教育委員会・古川市図書館

宮城県教委（1979）：『宮城県遺跡地名表修正板』

小野寺祥一郎（1978）：「五輪Ｃ遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第61集

千葉　宗久（1980）：「台の山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅱ　宮城県文化財調査報告書
阿部　博志　　第62集

小井川和夫（1980）：「八幡崎Ｂ遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅱ　宮城県文化財調査報告
森　　貢喜　　書第62集

阿部　博志（1980）：「赤鬼上遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅰ　宮城県文化財調査報告書
黒川　利司　　第63集

第 4 表　破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面－内面	第1号住居跡 床	第1号住居跡 カマド	第1号住居跡 1層	第1号住居跡 2層	第2号住居跡 床	第2号住居跡 カマド	第2号住居跡 周溝	第2号住居跡 1層	第2号住居跡 2層	第3号住居跡 1層	第3号住居跡 2層	第2溝 堆積土	溝状落ち込み 堆積土	表土	地明・表点不採	合計
土師器	坏	口縁部	横ナデ－ミガキ				3	2				4	1		5		6	7	28
			横ナデ－ミガキ(黒色)	9	1	1	13	4	1			15	4	6			25	17	96
			横ナデ－ナデ	2			1					5	1		1			7	18
			ミガキ－ミガキ	2			2				1		1	4	1	2	5	3	21
			ミガキ(黒色)－ミガキ(黒色)									2							2
			ナデ－ナデ														2		2
			ロクロ－ミガキ(黒色)								1						4	2	7
			不明－ミガキ						1			5							6
			不明－ミガキ(黒色)	1								1	1						3
			不明－不明	1						1								2	4
		体部	横ナデ・ケズリ－ミガキ														1		1
			横ナデ・ケズリ－ミガキ(黒色)														1		1
			横ナデ・ケズリ－ナデ														3		3
			横ナデ・ナデ－ミガキ												1			1	2
			横ナデ・ナデ－ナデ														1		1
			横ナデ・ミガキ－ミガキ												2				2
			ミガキ－ミガキ	1													1	4	6
			ミガキ－ナデ								1				2				3
			ミガキ－ナデ(黒色)	1								1						1	3
			ミガキ－ヘラナデ								1								1
			不明－ミガキ									3							3
			不明－ミガキ(黒色)														1	1	2
			不明－不明					1				1							2
		底部	ケズリ－ミガキ				5					3			3		5	1	17
			ケズリ－ミガキ(黒色)	2	2		5	1	2			12	2	3		1	34	11	75
			ケズリ－ナデ														3		3
			ケズリ－ナデ(黒色)									1							1
			ケズリ－ヘラナデ														1		1
			ミガキ－ミガキ														1		1
			ミガキ－ミガキ(黒色)															2	2
			ミガキ(黒色)－ミガキ(黒色)					1				2					1		4
			不明－ミガキ(黒色)	1								2							3
			回転糸切り－ミガキ(黒色)															1	1
			不明－不明															1	1
	小計			20	3	1	29	10	4	1	4	57	10	13	15	3	95	61	326
	甕	口縁部	横ナデ－横ナデ	17		2	39	4	2		4	31	3	15	1	2	87	38	245
			横ナデ－ナデ														7		7
			横ナデ－ミガキ														1		1
			横ナデ－刷毛目															1	1
			横ナデ－不明				1										9		10
			ミガキ－ミガキ	1													14	2	17
			ナデ－ナデ														2		2
			ロクロ－ロクロ									1		1			1	1	4
			不明－不明	2			2							1		3	8	2	18
		体部	刷毛目－刷毛目														3	5	8
			刷毛目－ナデ	20			16	25	5		4	71	4	17	1	2	194	42	401
			刷毛目－ヘラナデ	20		1	17	4			1	17	5	3			67	10	145
			刷毛目－ミガキ	1			2	1									6	5	15
			刷毛目－不明	28			18	6			1	40	3	11		1	2	22	132
			ナデ－ナデ	1	1	1	4	2			1	9					45	4	68
			ナデ－ミガキ													2	1		3
			ナデ－不明									1							1
			ミガキ－ミガキ	4										8		1	11	19	43
			ミガキ－ナデ				1	3	1		1	7					22	14	49
			ミガキ－不明	1			1	7		2	1	11		1			22	9	55
			ケズリ－ヘラナデ														3	1	5
			ケズリ－ナデ	1			3		1			5					9	7	26
			ケズリ－ミガキ					1						1				1	3

種別	器形	部位	器面調整 外面－内面	第1号住居跡 床	第1号住居跡 カマド	第1号住居跡 1層	第1号住居跡 2層	第2号住居跡 床	第2号住居跡 カマド	第2号住居跡 周溝	第2号住居跡 1層	第2号住居跡 2層	第3号住居跡 1層	第3号住居跡 2層	第2溝 堆積土	溝状落ち込み 堆積土	表土	地明・表点不採	合計
土師器	甕	体部	ケズリ－刷毛目														1		1
			不明－ミガキ		1		1											1	3
			不明－ヘラナデ									2	2				9		13
			不明－刷毛目						1										1
			不明－ナデ	3			3	2	1		1	7	2	8			40	10	77
			不明－不明	26	1	13	48	21	8	2	9	75	12	41		3	152	133	544
		底部	ケズリ－ナデ												1		12		13
			ケズリ－ヘラナデ				3											1	4
			ケズリ－ミガキ														1	1	2
			ケズリ－不明	1			1	1		1		1					3		8
			木葉痕・ケズリ－ナデ														5		5
			木葉痕・ナデ－ナデ														1		1
			木葉痕－ナデ	3			2					1					1		7
			木葉痕－ミガキ									1							1
			木葉痕－不明									1					1		2
			ナデ－ナデ														2	1	3
			ナデ－ヘラナデ	2			1												3
			ミガキ－ミガキ				1										1		2
			ミガキ－ヘラナデ				2			1							1		4
			不明－ナデ				1							1			4		6
			不明－ヘラナデ				1	2				1							4
			不明－不明				3					5					2	4	14
	小計			131	3	17	171	79	19	6	23	288	31	108	3	14	750	334	1,977
	壺	口縁部	横ナデ－横ナデ														2		2
			横ナデ－ミガキ															1	1
			ミガキ－ミガキ				1					10			1		1	4	17
		体部	ミガキ－ミガキ												2		22	5	29
			ミガキ－ナデ									4					2		6
			ミガキ－ヘラナデ														2		2
			ミガキ－不明				2					4					2		8
	小計						3					18			3		31	10	65
	甑	底部	ナデ－ミガキ														1		1
			ケズリ－不明	2															2
			不明－不明															1	1
	小計			2													1	1	4
	高坏	坏部	横ナデ・ミガキ－横ナデ・ミガキ														11		11
			横ナデ・ミガキ－ナデ														4		4
			ミガキ－ミガキ	8			15				2	18			1		36	27	107
		脚部	ミガキ－シボリ目				1										2		3
			ミガキ－ナデ														6		6
			ミガキ－ヘラナデ															1	1
			ミガキ－横ナデ	1			1										1		3
			ミガキ－不明				1												1
			不明－ヘラナデ									1							1
	小計			9			18				2	19			1		60	28	137
須恵器	坏	体部	ロクロ－ロクロ														1		1
	小計																1		1
	甕	口縁部	ロクロ－ロクロ	1															1
		体部	ロクロ－オサエ														1		1
			平行タタキ目－青海波文								1								1
			格子タタキ目－青海波文														1		1
			ケズリ－オサエ														1		1
	小計			1							1						3		5
	蓋	天井部	ロクロ－ロクロ										1						1
	小計												1						1
赤焼土器	坏	口縁部	ロクロ－ロクロ			1													1
	小計					1													1
合計				163	6	19	221	89	24	6	30	382	42	121	21	18	941	434	2,517

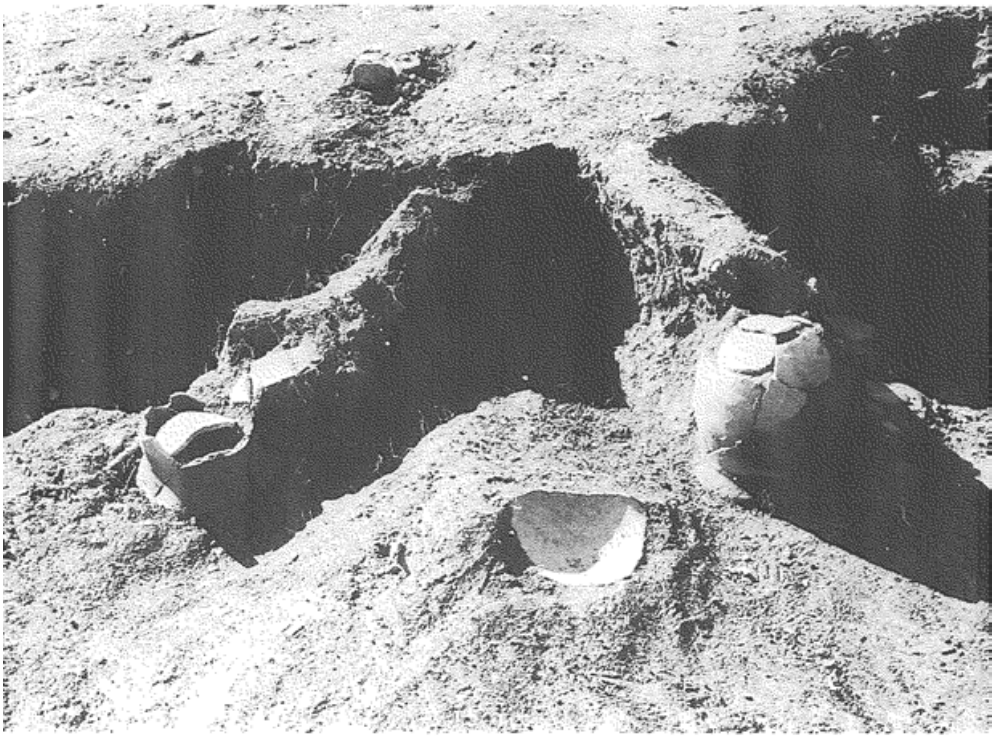
写　真　図　版

遺跡遠景

調査風景（南斜面）

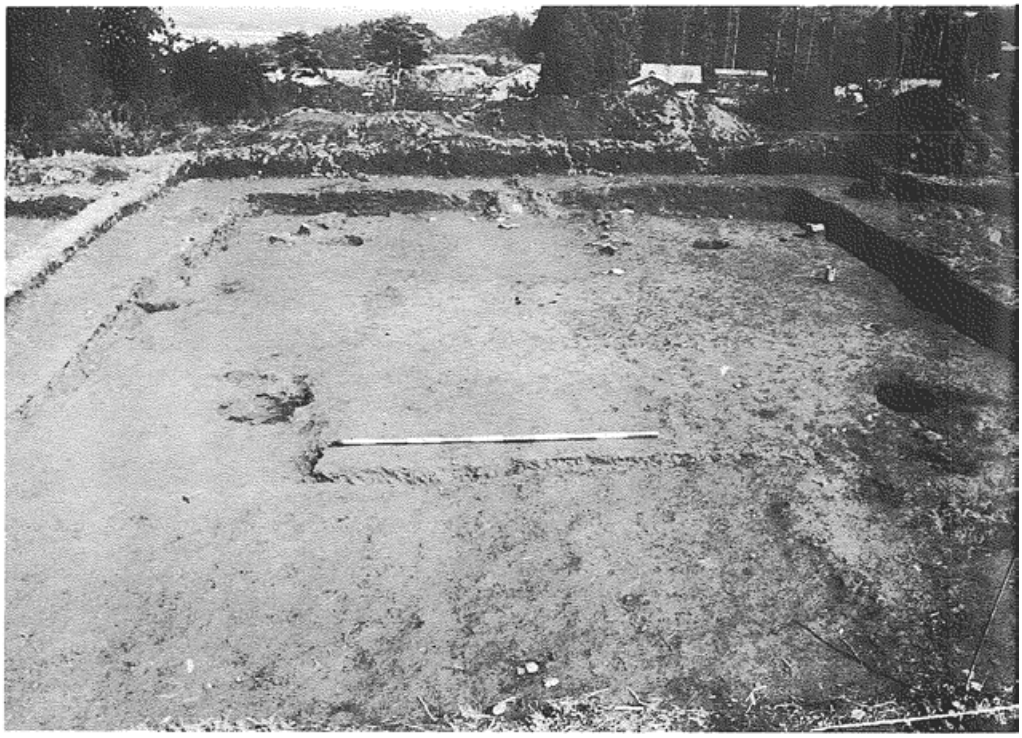
図版 1

第１号住居跡

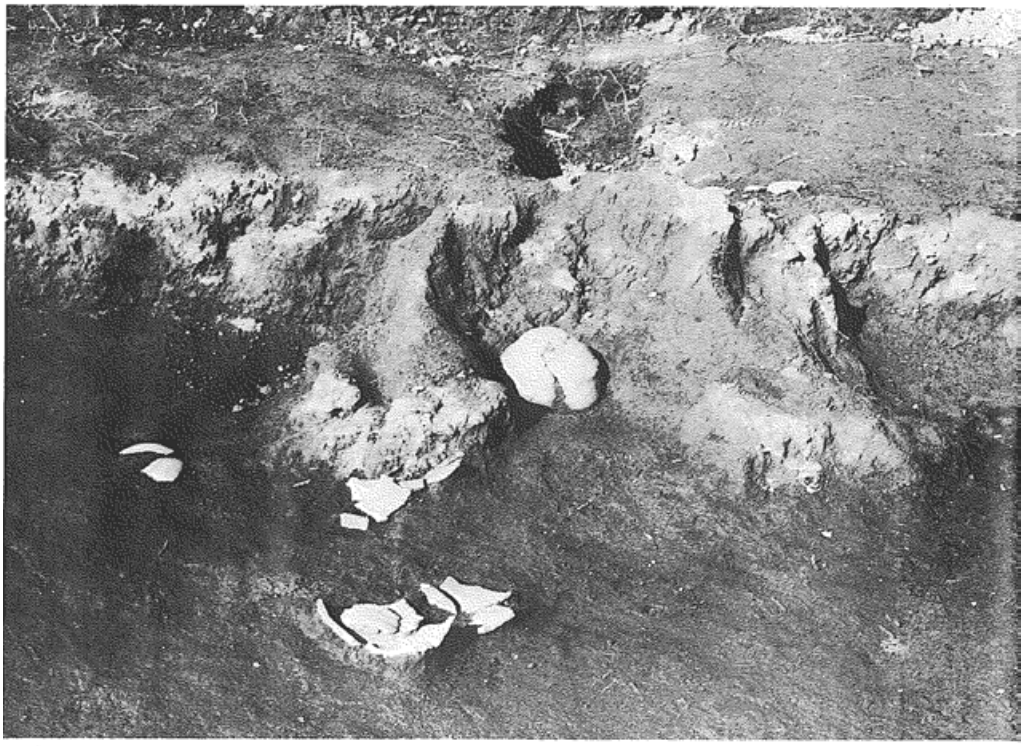


第１号住居跡第２カマド

図版２

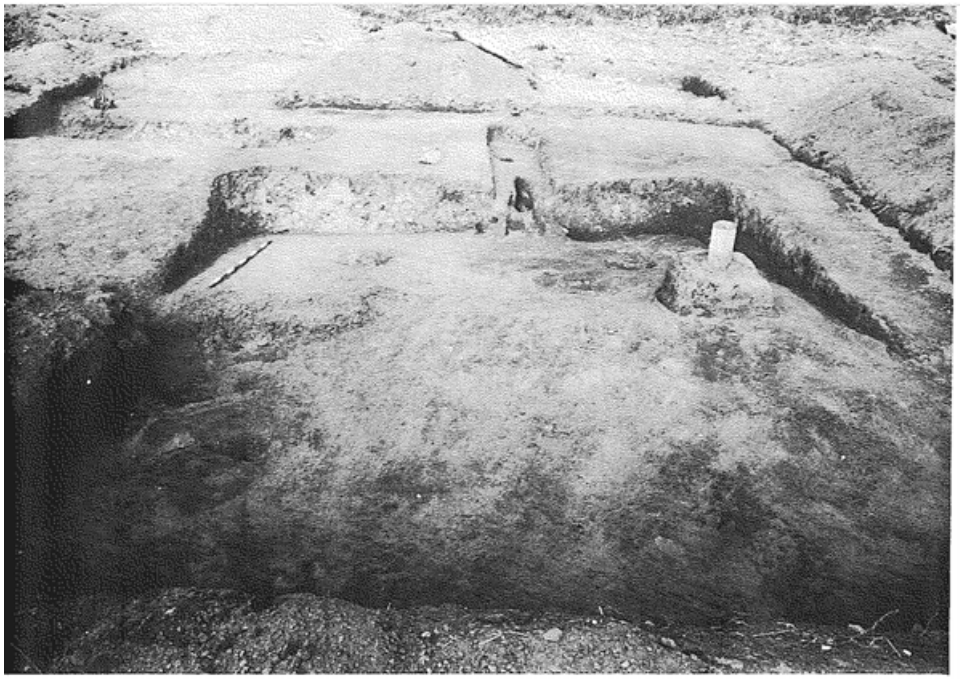


第２号住居跡



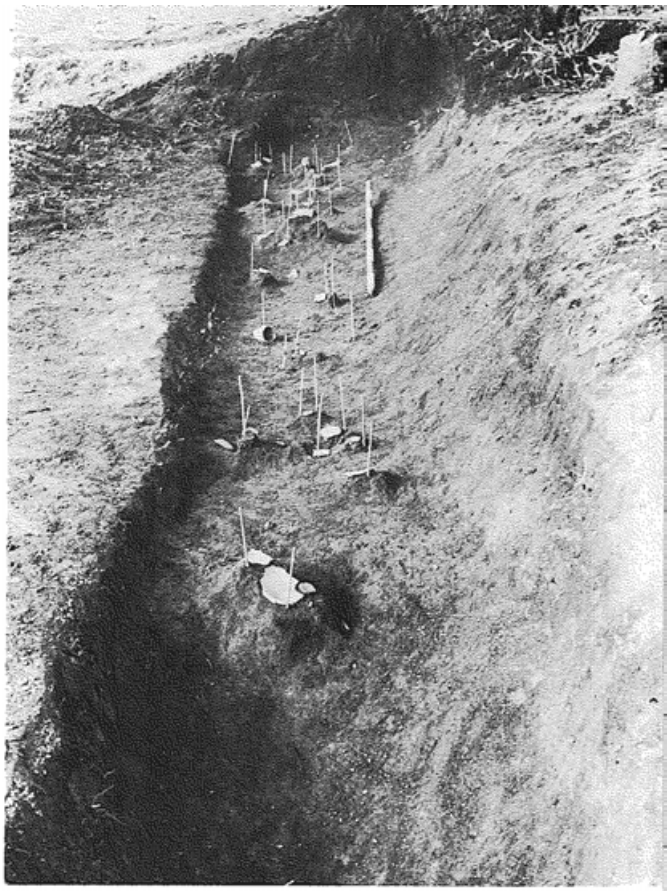
第２号住居跡カマド

図版３



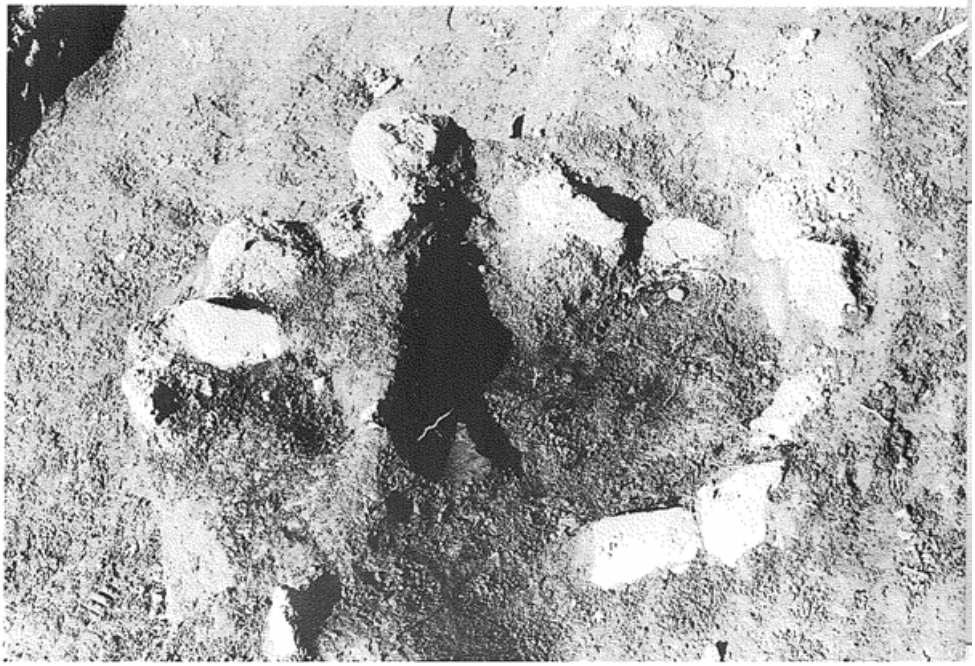
図版4

上、第3号住居跡
下、同カマド



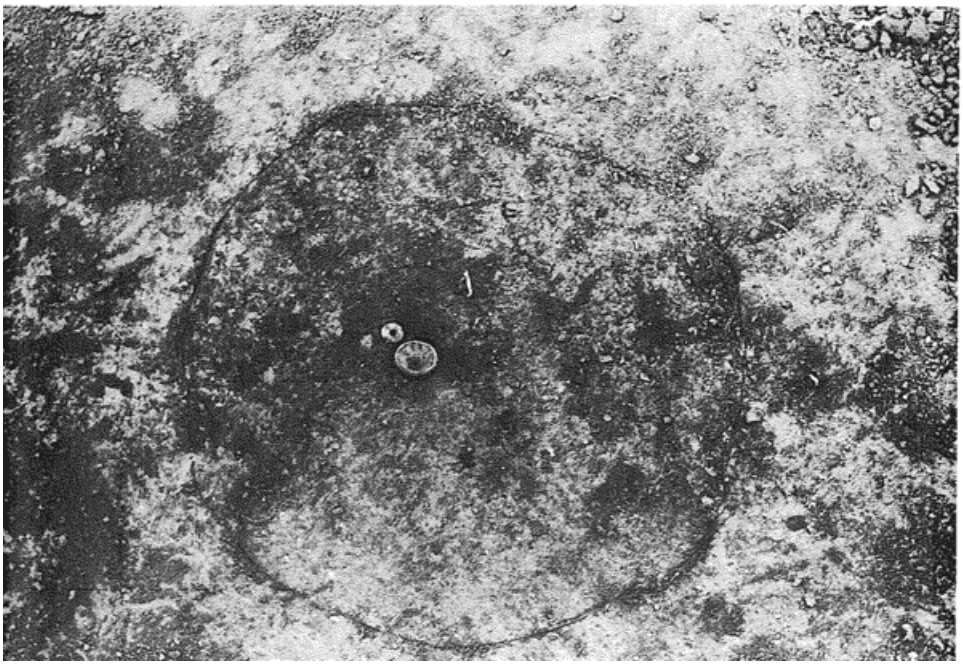
図版5

上、第2溝
下、石組炉



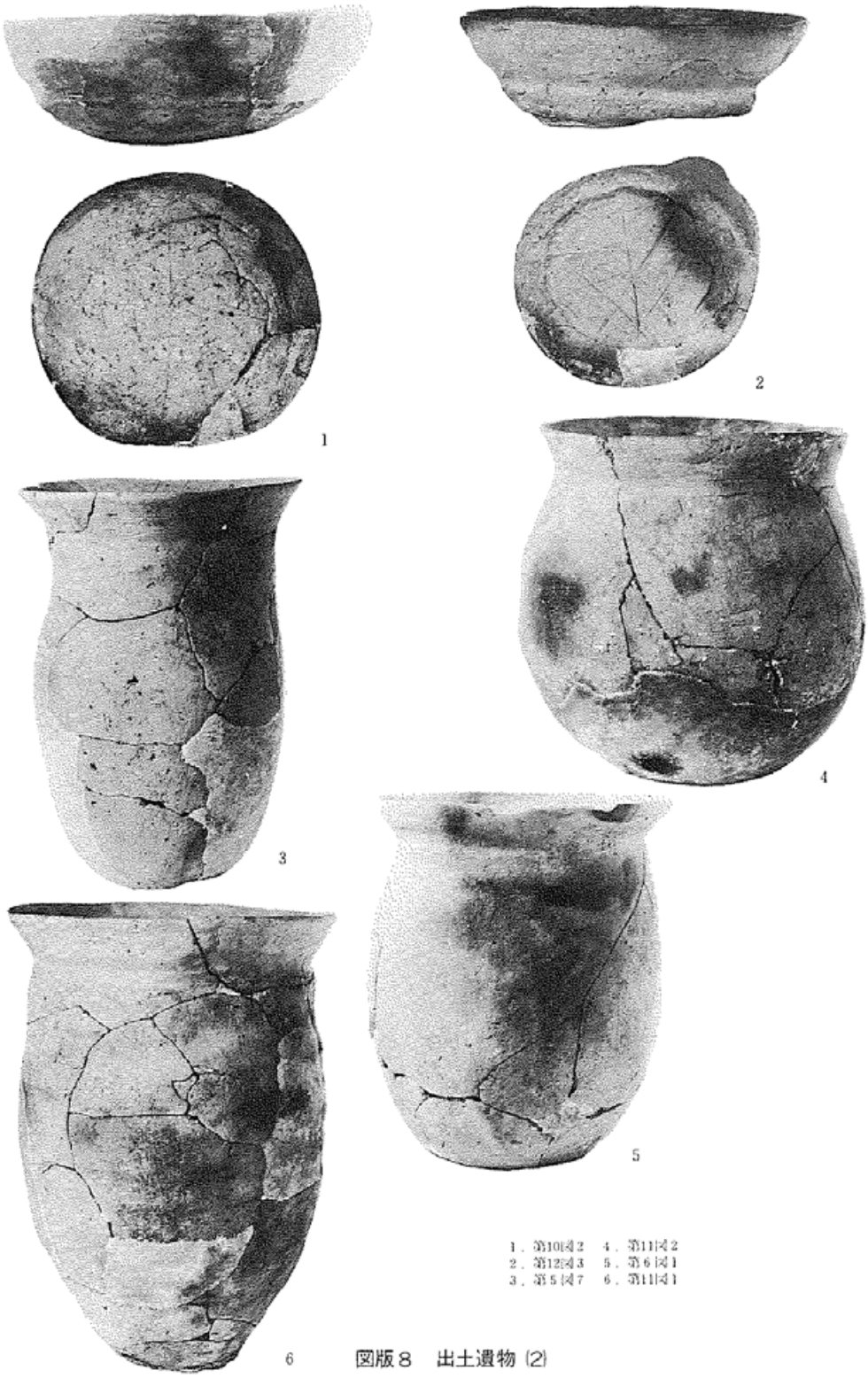
図版6

上、溝状落ち込み
下、墓壙



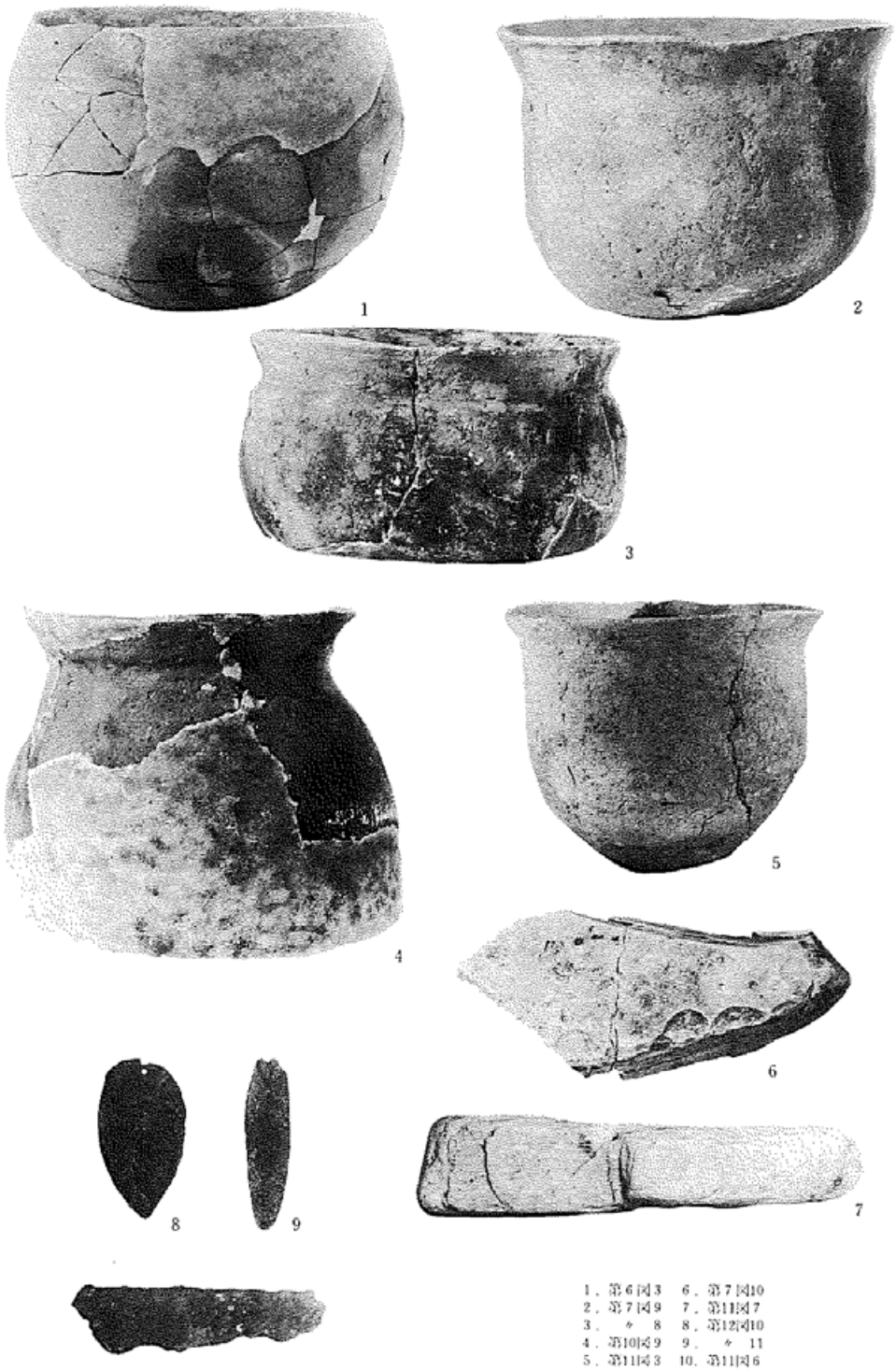
1．第5図1　8．第10図5
2．　〃　2　9．　〃　6
3．　〃　4　10．第17図1
4．第7図7　11．第20図5
5．第10図1　12．第7図5
6．　〃　3　13．　〃　6
7．第12図1

図版７　出土遺物（1）



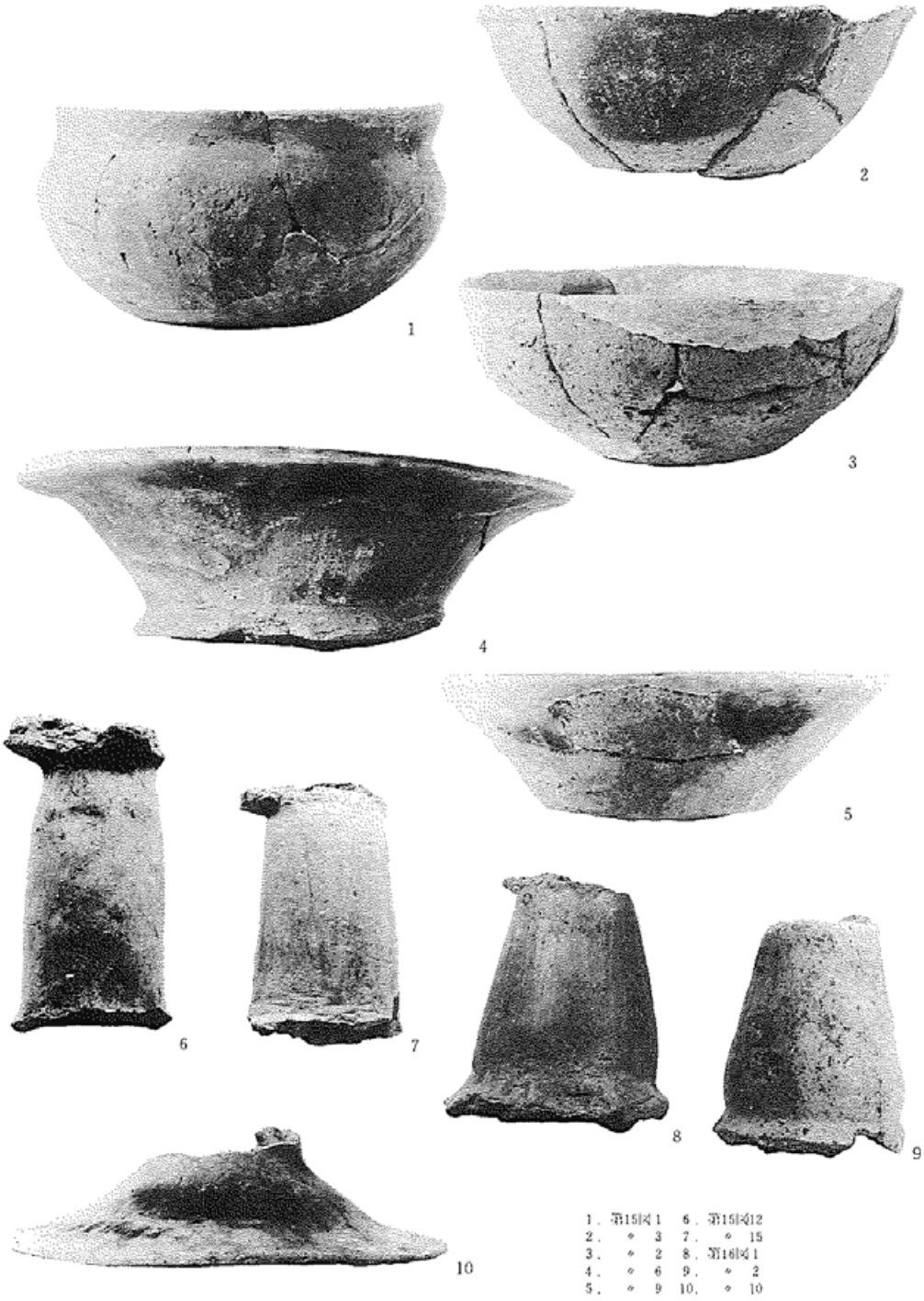
1．第10図2　4．第11図2
2．第12図3　5．第6図1
3．第5図7　6．第11図1

図版８　出土遺物 (2)

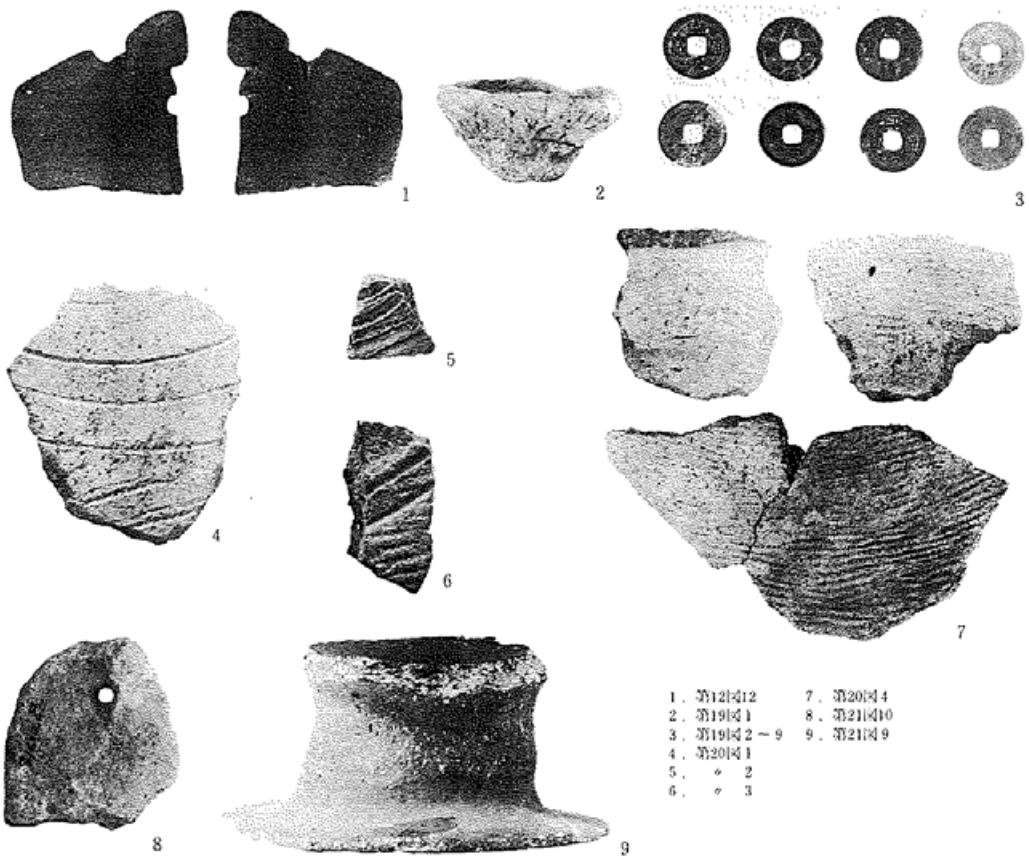


1．第6図3　6．第7図10
2．第7図9　7．第11図7
3．　〃　8　8．第12図10
4．第10図9　9．　〃　11
5．第11図3　10．第11図6

図版9　出土遺物 (3)



図版10　出土遺物 (4)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
1．第12図12
2．第19図1
3．第19図2～9
4．第20図1
5．〃 2
6．〃 3
7．第20図4
8．第21図10
9．第21図9

図版11　出土遺物 (5)